都城市文化財調査報告書　第102集

Nagata fujitsuka　　Site

永田藤束遺跡

－民間老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１年３月

宮崎県都城市教育委員会

Nagata fujitsuka　　Site

永田藤束遺跡

－民間老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１年３月

宮崎県都城市教育委員会

例　言

1．本書は、民間の老人福祉施設建設に伴い都城市教育委員会が平成 21 年度に実施した永田藤東遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同市文化財課主幹矢部喜多夫（現高城市民生活課主幹）と同主事山下大輔が担当した。

3．本書で使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は真北である。

4．現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て矢部・山下が行った。遺構図のトレースについては、Adobe 社の Illustrator CS3 を用いて山下が行った。

5．本書に掲載した遺物の実測は整理作業員および山下が行い、トレースは山下が行った。

6．現場での遺構写真撮影は矢部・山下が行い、出土遺物の写真撮影は山下が行った。

7．本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。

8．出土遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001 年度前期版を参考にした。

9．本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、掘立柱建物跡を 1/60、土坑・井戸跡を 1/40、溝状遺構・硬化面を 1/50 ないし 1/100 とした。遺物実測図は古銭・小型の石器を 1/2、その他の石器を 1/4、これら以外の遺物は 1/3 とし、各図版に示している。

10. 本書の執筆および編集は山下が行った。

11. 発掘調査および掘調査報告書の作成にあたっては、以下の方々のご教示・ご協力を賜った（順不同・敬称略）。
上田　耕（南九州市教育委員会）、菅付和樹・福田泰典（以上、宮崎県埋蔵文化財センター）、桒畑光博・久松　亮・栗山葉子・近沢恒典・加覧淳一・下田代清海（以上、都城市文化財課）

12. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

13. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡・ピット列　SC:土坑・土坑墓　SD：溝状遺構・道路状遺構　SE：井戸跡　SF：硬化面
SS：集石遺構　P：ピット

14. 出土遺物の時期比定に関しては、以下の編年研究の成果を参考とした。

木戸雅寿 1995「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』
桒畑光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第 19 号　宮崎考古学会
森田　稔 1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
山本信夫編 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財　第 49 集　太宰府市教育委員会

序　文

本書は、民間老人福祉施設建設に伴い、都城市教育委員会が実施した永田藤東遺跡の発掘調査報告書であります。

本書に所収いたしました永田藤東遺跡は都城市の南部、安久町に所在しております。近年、安久町周辺では、開発に伴う発掘調査が数多く実施されており、地域の歴史に関する多くの知見が得られております。本遺跡の調査では、主に平安時代から鎌倉時代にかけての遺物や遺構がみつかっています。遺跡の主な時期である 11 世紀後半から 12 世紀代にかけては、11 世紀前半に立荘されたといわれる島津荘が拡大していった時期であり、遺跡で確認された遺構や出土遺物は、当時の都城盆地南部の地域的様相を考える上で非常に重要な資料であるといえます。

本書がこうした地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解・ご協力を頂いた社会福祉法人豊の里をはじめとする関係諸機関、発掘調査に従事して頂いた市民の方々に対し、心より厚く御礼申し上げます。

2011 年 3 月

都城市教育委員会

教育長　酒匂　醸以

本文目次

第１章　序説 …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査の成果 …… 4
　第１節　調査の方法と概要 …… 4
　第２節　遺跡の層序 …… 6
　第３節　平安時代～中世の遺構と遺物 …… 8
　　1　掘立柱建物跡・ピット列（SB） …… 9
　　2　土坑・土坑墓（SC） …… 13
　　3　溝状遺構（SD） …… 16
　　4　井戸跡（SE） …… 26
　　5　硬化面（SF） …… 27
　　6　集石遺構（SS） …… 28
　　7　ピット（P）出土の遺物 …… 29
　　8　包含層出土の遺物 …… 29
　第４節　その他の時代の遺構と遺物 …… 42
　　1　溝状遺構（SD） …… 42
　　2　包含層出土の遺物 …… 42
第４章　まとめ …… 51
　第１節　平安時代末～中世の遺物について …… 51
　第２節　平安時代末～中世の調査成果 …… 53

挿図目次

第１図　遺跡位置図（S=1/50,000） …… 3
第２図　調査区位置図（S=1/10,000） …… 5
第３図　調査区域図（S=1/500） …… 5
第４図　調査区土層断面図（S=1/60） …… 7
第５図　平安時代～中世遺構配置図（S=1/300） …… 8
第６図　SB01 実測図（S=1/60） …… 9
第７図　SB02・03 実測図（S=1/60）
　SB02 出土遺物実測図（S=1/3） …… 10
第８図　SB04 ～ 10 実測図（S=1/60）・SB04 出土遺物
　実測図（S=1/3） …… 12
第９図　SC01 ～ 11 実測図（S=1/40） …… 14
第10図　土坑（SC）出土遺物実測図（S=1/3） …… 15
第11図　SD01・02・SC01 実測図（平面図：S=1/100、
　断面図：S=1/50） …… 16
第12図　SD01 出土遺物実測図（S=1/3） …… 16
第13図　SD03 実測図（S=1/50） …… 18
第14図　SD03 出土遺物実測図①（S=1/3） …… 20
第15図　SD03 出土遺物実測図②（S=1/3） …… 21
第16図　SD03 出土遺物実測図③（S=1/3） …… 22
第17図　SD03 出土遺物実測図④（S=1/3） …… 23
第18図　SD03 遺物出土状況（S=1/40） …… 24
第19図　SD04・05 実測図（平面図：S=1/100、
　断面図：S=1/50） …… 25
第20図　SD04・05 出土遺物実測図（S=1/3） …… 26
第21図　SE01 実測図（S=1/40）・出土遺物実測図
　（石器：S=1/4、その他：S=1/3） …… 27
第22図　SF01・02 実測図（平面図：S=1/100、断面図：
　S=1/50）・出土遺物実測図（古銭：S=1/2、貿易
　陶磁器：S=1/3） …… 28
第23図　SS01 実測図（S=1/20） …… 29
第24図　ピット（P）出土遺物実測図（S=1/3） …… 29
第25図　包含層出土遺物実測図①（S=1/3） …… 30
第26図　包含層出土遺物実測図②（S=1/3） …… 31
第27図　包含層出土遺物実測図③（S=1/3） …… 32
第28図　包含層出土遺物実測図④（S=1/3） …… 33
第29図　包含層出土遺物実測図⑤（S=1/3） …… 34
第30図　包含層出土遺物実測図⑥（S=1/3） …… 35
第31図　包含層出土遺物実測図⑦（S=1/3） …… 37
第32図　包含層出土遺物実測図⑧（S=1/3） …… 38
第33図　包含層出土遺物実測図⑨
　（石器：S=1/2・1/4、その他：S=1/3） …… 39
第34図　包含層出土遺物実測図⑩（S=1/3） …… 40
第35図　包含層出土遺物実測図⑪（S=1/3） …… 41
第36図　SD06 実測図（平面図：S=1/100、断面図：
　S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3） …… 43
第37図　包含層出土遺物実測図⑫（S=1/3） …… 43
第38図　SD03 出土坏・小皿の法量分布図 …… 52
第39図　SD03 出土遺物の編年的位置づけ …… 53

表目次

第１表　永田藤東遺跡出土遺物観察表① …… 44
第２表　永田藤東遺跡出土遺物観察表② …… 45
第３表　永田藤東遺跡出土遺物観察表③ …… 46
第４表　永田藤東遺跡出土遺物観察表④ …… 47
第５表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑤ …… 48
第６表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑥ …… 49
第７表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑦ …… 50

図版目次

図版1　平安時代～中世の調査① …… 56
1. 調査区北西遺構検出状況（南から）
2. 調査区南東遺構検出状況（西から）
図版2　平安時代～中世の調査② …… 57
3. 調査区北西土層堆積状況
4. 調査区南東土層堆積状況
5. SB01 完掘状況（東から）
6. SB02・03・06・07 完掘状況（南から）
7. SB03・04・08 ～ 10 完掘状況（北から）
8. SC01 土層断面（南東から）
9. SC01 遺物出土状況（西から）
10.SC01 完掘状況（北西から）
図版3　平安時代～中世の調査③ …… 58
11.SD01・02 土層断面①（西から）
12.SD01・02 土層断面②（西から）
13.SD01・02 完掘状況（南西から）
14.SD03 溝状部分検出状況（南西から）
15.SD03 拡張部検出状況（南東から）
16.SD03 遺物出土状況（西から）
17.SD03 土層断面①（南西から）
18.SD03 土層断面②（北東から）
図版4　平安時代～中世の調査④ …… 59
19.SD03 粘土・灰色土堆積状況（西から）
20.SD03 溝状部分底面の粘土①
21.SD03 溝状部分底面の粘土②
22.SD03 溝状部分底面の粘土③
23.SD03 完掘状況（北から）
24.SD03 完掘状況（南から）
図版5　平安時代～中世の調査⑤ …… 60
25.SD04 土層断面（西から）
26.SD04 完掘状況（西から）
27.SE01 土層断面（西から）
28.SE01 掘り下げ状況（底面は未完掘　西から）
29.SF01・02 検出状況（北から）
30.SF01 大観通寶出土状況（東から）
31.SD01・02・05・06・SE01 完掘状況（北から）
32. 調査区東半遺構完掘状況（南東から）
図版6　遺構内出土遺物① …… 61
SB02　SB04　SC01　SC04　SC09　SD01　SD03
図版7　遺構内出土遺物② …… 62
SD03 出土土師器小皿　土師器坏（線刻有）
土師器小皿（穿孔有）　ミガキ椀　黒色土器 A
図版8　遺構内出土遺物③ …… 63
SD03 出土遺物（黒色土器 B　白磁　国産陶器
滑石製品　砥石　鉄釘　鞴羽口）
図版9　遺構内出土遺物④ …… 64
SD04　SD05　SE01　SF01　SF02　P15　P20　P56
P58　P76
図版10　包含層出土遺物① …… 65
土師器坏　墨書土器か　土師器小壺　土師器小皿
土師器甕
図版11　包含層出土遺物② …… 66
ミガキ椀　ミガキ椀（線刻有）　黒色土器 A
黒色土器 B
図版12　包含層出土遺物③ …… 67
土師質須恵器　須恵器　白磁椀　白磁皿
図版13　包含層出土遺物④ …… 68
白磁椀　白磁皿　青磁椀　青白磁合子身
青白磁水滴　白磁像　中国陶器　国産陶器
図版14　包含層出土遺物⑤ …… 69
常滑焼　国産陶器　東播系須恵器　布痕土器
滑石製石鍋　石鍋転用品　滑石製品
図版15　包含層出土遺物⑥ …… 70
砥石　台石・磨敲石　碁石　鉄鏃　鉄鎌・刀子
鉄釘　鉄鍋　鉄滓　鞴羽口　国産陶器　染付

第１章　序説

第１節　調査の経緯と経過

平成 21 年 11 月 5 日、社会福祉法人豊の里より都城市教育委員会文化財課（以下、市文化財課）に都城市安久町4995-1外における文化財所在の有無の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（永田藤東遺跡）の範囲内に位置していたため、平成 21 年 12 月 8・9 日に市文化財課が確認調査を実施した。その結果、対象地の北側約 1/3 の範囲において埋蔵文化財の所在が確認された。これを受け、都城市役所内の関係各課と豊の里、市文化財課による協議を重ね、建物建設に伴い遺跡が破壊される範囲約 1,000㎡については緊急の発掘調査を実施することで合意した。この後、平成 21 年 12 月 22 日付けで社会福祉法人豊の里と都城市との間で永田藤東遺跡に関する協定と永田藤東遺跡発掘調査業務委託契約を締結した。現場での発掘調査は平成 22 年 1 月 7 日から実施し、同年 2 月 22 日に全ての作業を終了した。この発掘調査と並行して出土遺物の洗浄を市文化財課で行った。発掘調査報告書作成については、永田藤東遺跡に関する協定に基づき、平成 22 年 7 月 12 日付けで社会福祉法人豊の里と都城市との間で永田藤東遺跡発掘調査（報告書作成）業務委託契約を締結した。平成 22 年度は前年度に引き続き出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行い、その後発掘調査報告書の執筆・編集を行った。

第２節　調査組織

平成 21 年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体者　宮崎県都城市教育委員会

調査責任者	教育長	玉利　　譲（平成 22 年 2 月 24 日まで）
		酒匂　醸以（平成 22 年 2 月 25 日から）
調査事務局	教育部長	石川　　清
	文化財課長	坂元　昭夫
	文化財副課長	山下　進一郎
	文化財課主幹	矢部　喜多夫
	文化財課副主幹	桒畑　光博
調査担当者	文化財課主幹	矢部　喜多夫
	文化財課主事	山下　大輔

発掘調査従事者　小山田福子、上坂春雄、坂口米蔵、塩屋貴士、下津佐ミエ子、庄司紀子、高尾和子、谷口清二、津曲節子、黒葛原忠夫、中条道安、中原忠珍、平川洋子、満木テル子、宮田エイ子、吉盛五恵子、脇田節子、渡司裕美子

整理作業従事者　尾曲真貴、福岡八重子、横尾恵美子

平成 22 年度の組織（報告書刊行年度）

調査主体者　宮崎県都城市教育委員会

調査責任者	教育長	酒匂　醸以
調査事務局	教育部長	石川　　清
	文化財課長	坂元　昭夫
	文化財副課長	山下　進一郎
	文化財課主幹	松下　述之
	文化財課副主幹	桒畑　光博
調査担当者	文化財課主事	山下　大輔

整理作業従事者　内村ゆかり、奥　登根子、尾曲真貴、横尾恵美子、吉留優子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

今回発掘調査の対象となった永田藤東遺跡は都城市南部、安久町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成 18 年１月１日に高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡４町との合併により新都城市が誕生した。この合併に伴い現在人口は約 17 万人を数え、市域は約 650 ｋ㎡に及ぶ。人口規模では南九州第３の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、南北約 25km、東西約 15kmの楕円状を呈している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。永田藤東遺跡は、市域南部の安久町に位置し、大淀川の支流である萩原川の左岸、開析扇状地に位置する。現在、遺跡の周辺は宅地に加え畑地が広がっており、対象地の現況も畑地となる。

第２節　歴史的環境

永田藤東遺跡が所在する市南部は、市内の中でも最も遺跡の密度が高い地域であり、遺跡詳細分布調査の成果からは縄文時代から近世まで多くの遺跡が確認されている。また、この地域は近年、開発等により本調査が数多く実施されている地域でもあり、これらの発掘調査からは多くの知見が得られている。ここではこれらの発掘調査の成果を参考に、時代ごとに本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

市内南部において最も古い遺跡は、大岩田町に所在する大岩田上村遺跡である。本遺跡は平成 11 年度に調査が実施され、旧石器時代～近世までの遺構・遺物が確認されている。ここで、旧石器時代の細石刃や細石刃核が出土している。旧石器時代の遺跡は都城盆地ではほとんど確認されておらず、市内ではこの他、山田町池増遺跡、高城町雀ヶ野遺跡のみとなる。

縄文時代になると都城市内各地で遺跡が確認されるようになり、市内南部においてもこれまで数多くの遺跡が調査の対象となっている。周辺に所在する遺跡をみてみると、まず、永田藤東遺跡から安久川を挟んで東へ約 1.2km のところには天ヶ渕遺跡が位置する。主要な時代は古代～近世であるが、縄文時代早期の遺物として、鬼界アカホヤ火山灰の下位から貝殻文系塞ノ神式土器と磨石･スクレイパー等が出土している。天ヶ渕遺跡からさらに 1.5km 程東にいくと成山遺跡がある。昭和 40 年代に宮崎大学により２回の調査が実施され、平成８年度には都城市教育委員会が調査を行っている。遺構としては晩期前半と考えられる方形の住居跡が検出されている。遺物では後期の丸野式、西平式、中岳式などがあり、晩期の組織痕を残す土器も出土している。この他、円盤状土製品や石鏃、磨石、打製石斧などもみられる。永田藤東遺跡の南に位置する梅北北原遺跡（中郷中学校）においても、校舎建て替えに伴う発掘調査で縄文時代早期の遺構・遺物が確認されている。10 基の集石遺構をはじめ早期中葉期の下剥峯式土器、押型文土器などが出土している。この他、周辺の梅北町や安久町に所在する王子原遺跡、上安久遺跡、豊満大谷遺跡、野添遺跡、梅北佐土原遺跡、大浦遺跡、尾平野洞穴などでも縄文時代の遺構や遺物が確認されている。

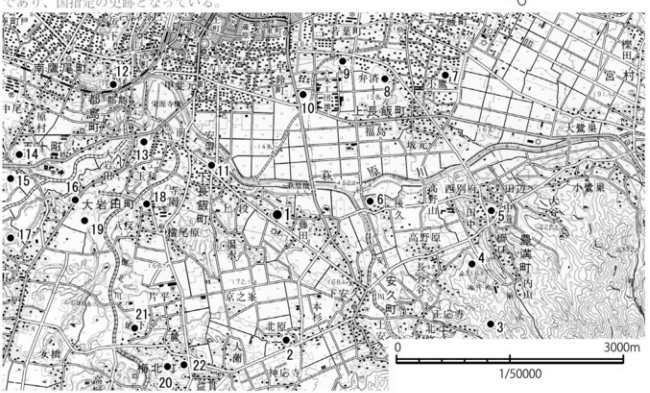
縄文時代の遺跡に比べると弥生時代の遺跡は少ない。複数の竪穴住居跡が検出された集落遺跡は萩原川を挟んで北側の扇状地でのみ確認されている。永田藤東遺跡から萩原川を越えて北に 1.6km のところには高田遺跡がある。民間の大型店舗建設に伴い調査されており、弥生時代中期前半の入来Ⅱ式期を主体とする集落が検出されている。また高田遺跡よりさらに東方には後年田遺跡が位置し、中溝式や山ノ口Ⅱ式を主体とする中期後半の集落跡が調査されている。この他、鹿児島との県境に近い梅北町大浦遺跡でも弥生時代中期後半と考えられる竪穴住居跡が１基検出されており、市街地に近いところでは姫城川左岸に位置する上ノ園第２遺跡で弥生時代後期の住居跡が検出されている。

古墳時代の集落遺跡としては、上述の上ノ園第２遺跡で古墳時代前期を中心とする住居跡や土器が確認されており、尾崎第１遺跡（貴船寺跡）で竪穴住居跡が２墓、安久町野添遺跡で竪穴住居跡が３基、土坑墓が１基確認されている。この他、下長飯町城ヶ尾遺跡で古墳時代前期の土器が採集されている。

古代の遺跡としては、上述の天ヶ渕遺跡で古代～近世の遺構・遺物が出土している。また、上ノ園第２遺跡では８世紀後半から10世紀前半と想定される遺構・遺物が出土している。また発掘調査での出土資料ではないが、梅北町の尾崎第２遺跡では昭和30年代に須恵器の蔵骨器が１点採集されている。また、古代末、万寿年間（1024～28）には大宰府大監平季基が開発し、藤原頼通に寄進したことで島津荘が成立したといわれている。しかし、この時期の遺跡は市内全体をみても多くなく、南横市町坂元Ｂ遺跡や早水町池ノ友遺跡、今町筆無遺跡等数える程である。

中世に入ると遺跡数が増加する。特に梅北町や安久町といった市内南部では寺院跡などの宗教施設や城郭跡が数多くみられることが特徴といえる。寺院跡としては、正応寺や西生寺があるが、いずれも明治初期の廃仏毀釈により廃寺となり、建物自体は現存しない。現在では古石塔類が残るのみとなる。また、周辺には六ヶ（村）城跡、池平城跡、梅北城跡といった中世城郭も存在している。一方、この時期の集落遺跡の調査事例としては、水田跡、溝状遺構、道路状遺構が検出された嫁坂遺跡や上述の天ヶ渕遺跡、筆無遺跡などがある。

近世では、中世末～近世の墓壙が合計143基も検出された尾崎第１遺跡（貴船寺跡）がある。これらの墓壙からは、煙管、土鈴、軽石製独楽など豊富な副葬品がみつかっている。また、中世に引き続き西生寺跡などの宗教施設が数多く確認される。さらに、県道269号線沿いに位置する今町一里塚は近世の道標であり、国指定の史跡となっている。



1：永田藤東遺跡　2：梅北北原遺跡　3：六ヶ（村）城跡　4：池平城跡　5：成山遺跡　6：天ヶ渕遺跡
7：小鷹原遺跡　8：後牟田遺跡　9：上ノ園第２遺跡　10：高田遺跡　11：城ヶ尾遺跡　12：都之城跡
13：大岩田城跡　14：油田遺跡　15：岩立遺跡　16：宮尾・立野遺跡　17：筆無遺跡　18：黒土遺跡
19：大岩田上村遺跡　20：尾崎第２遺跡　21：梅北城跡　22：尾崎第１遺跡（貴船寺跡）

第１図　遺跡位置図（S=1/50000）

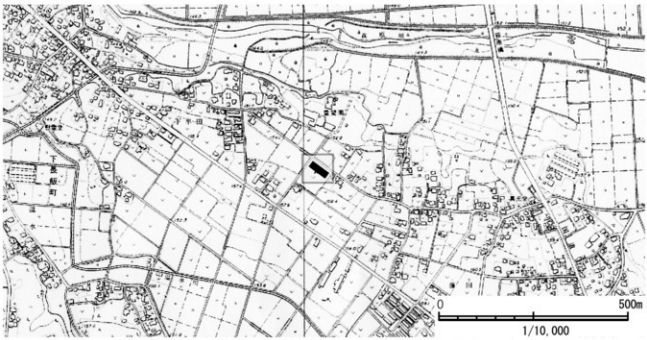
第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法と概要

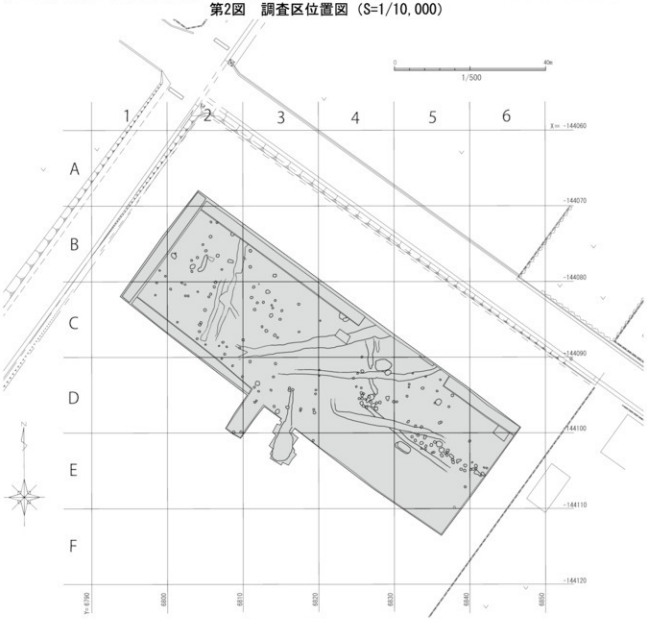
調査対象地は都城市安久町、大淀川の支流である萩原川の南約 350 ｍの場所に位置する。工事計画によれば、既存の老人福祉施設建物の老朽化に伴い、新たに既存の建物の南側 100 ｍのところに建て替えをするというものであった。工事対象地の確認調査の結果から、対象地のうち北側約 1/3 には遺跡が遺存していることが判明したため、この範囲のうち工事により破壊されると考えられる建物建設部分に関して緊急の発掘調査を実施した。また、遺構検出面まで深いところで２ｍ程の掘削が必要であったため、調査区を二段掘りしている。そのため、調査対象面積は 1,012㎡であるが、実際の調査面積はやや狭くなり 935㎡となる。

調査区は長辺約 53 ｍ、短辺約 18 ｍの長方形を呈する。長軸は北西―南東方向となる。周辺の自然地形をみると、北へ 350 ｍ程のところを東西に流れる萩原川に向かい傾斜していく。この自然地形の傾斜に合わせて盛り土がなされているため、地形的に最も低い調査区北西側では約 1.7 ｍの盛り土が確認された。遺構検出面において、標高の一番高い調査区南東側と最も低い北西側の比高差は 2.3 ｍ程になる。開発対象地の南側約 2/3 については、確認調査の結果、既に霧島御池軽石ないしは鬼界アカホヤ火山灰まで削平されていることが判明した。本調査の結果、調査区よりさらに南に続くと考えられる遺構が確認されたことから、開発対象地の南半にも本来は遺跡が広がっていた可能性が高い。調査対象地は先述のように遺跡が遺存し、かつ建物建設により破壊を受ける範囲約 935㎡である。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系の SN 座標線に一致した 10 × 10 ｍを１区画とし、東西方向を西から 1、2、3… の順に算用数字で、南北方向を北から A、B、C… の順にアルファベットで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

現地での発掘調査は、まず、重機による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎ作業は基本的には盛り土（表土層）を除去する作業としたが、調査期間を考え、一部調査区南東端では表土直下の黒色土の上部も重機により掘り下げた。表土直下が御池軽石の漸移層であった調査区南東部では表土剥ぎ終了の段階でピット等の遺構と遺物が確認されていた。表土剥ぎの後、発掘調査作業員を動員して遺物包含層（Ⅲ層）の掘り下げおよび遺構の検出作業を行った結果、調査区全体において溝状遺構やピットを中心とする遺構を検出した。遺物も調査区全体で出土する傾向にあったが、特に SD03 の周辺部と調査区北西側の黒色土が厚く堆積していた範囲では多く出土している。この SD03 については、当初調査区端の溝状部分のみを検出しており、さらに調査区外まで遺構が続いていることが予想された。遺構の周辺からも多量の遺物が出土する傾向にあったことから、遺構の走行方向および全体像を把握することを目的とし、一部調査区外にトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、井戸状の深い土坑に既に検出していた溝状の遺構が取り付く形を呈していることが分かった。この遺構の埋土内からは土師器の坏や小皿を中心とし、完形のものを含む多量の遺物が出土した。これらの遺物は一括性の高い資料として、都城南部地域における土器編年を構築する際の基準資料として重要である。この他、土師器以外にも鞴の羽口や鉄製品等も出土している。この遺構以外にも底面が硬化する道跡と考えられるものを含む６条の溝状遺構を検出した。これらのうち SD04 と SD06 は堆積する埋土からそれぞれ中世、近世以降の所産であると考えられる。さらに、調査区全体でピットを数多く検出している。このうち発掘現場において掘立柱建物跡として認識できたのはわずかに１基のみであるが、整理作業段階で図面上において掘立柱建物跡およびピット列として認識可能だったものが９基あるため、本報告では合計で 10 基の掘立柱建物跡・ピット列を報告している。遺構検出面は調査区東側でⅤ層中ないしはⅥ層（御池軽石）上面、西側ではⅣ層中ないしはⅤ層上面となる。出土した遺物をみてみると、平安時代末～中世初頭の土師器を中心に、須恵器、貿易陶磁器、国産陶器、滑石製品、鉄滓や鞴の羽口などといった多様な遺物が出土しているが、量的に最も多いのは坏・椀・小皿等の平安時代末の土師器である。上述のように、SD03 からは多くの完形の土師器等が出土しているが、包含層出土の遺物については完形のものは皆無で、大部分が破片である。ただし、出土量的には調査面積に比して大量の遺物が出土しているといってよいだろう。これらの遺物のほとんどは遺物包含層である基本土層Ⅲ層上部から出土しており、Ⅲ層下部およびⅣ層からの出土はみられない。



第2図　調査区位置図（S=1/10,000）



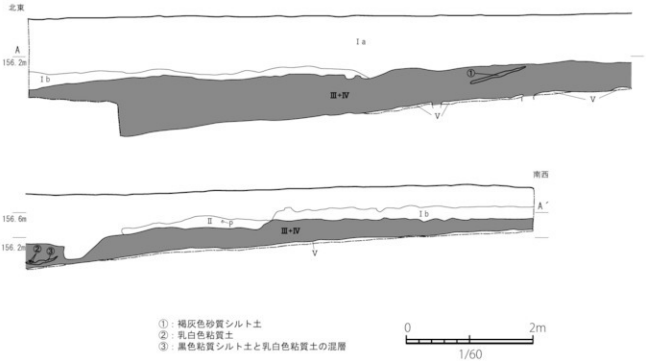
第3図　調査区域図（S=1/500）

第２節　遺跡の層序

前節でみたように、本遺跡は遺跡の北側を流れる萩原川に向かって南から北へと傾斜していく地形を呈している。本来はこのような自然地形を呈しているところを造成し、平坦地を作りだしているため、地形的に高い調査区南側では表土（造成土）が薄くなり、北に向かうにつれ表土が厚くなる。土層堆積状況をみると基本的には調査区全体で表土、黒色土、御池軽石漸移層、霧島御池軽石の順に堆積している。この中で自然地形に沿って御池軽石の上位の黒色土が厚く堆積したり、既に御池軽石漸移層まで削平されたりするなどの差異がみられる。基本土層については、事前に行われた確認調査成果および調査区東西端の土層堆積状況を基準に設定した。

Ⅰａ層：褐灰色砂質シルト土（1cm 以下の白色軽石を含む）
Ⅰｂ層：明褐灰色砂質シルト土（1cm 以下の白色・黄色軽石を多量に含む）
Ⅱ層：黒色微粘質シルト土（1cm 以下の灰白色軽石を含む）
Ⅲ層：黒色粘質シルト土（3mm 以下の黄色軽石を少量含む）
Ⅳ層：黒色粘質シルト土（3mm 以下の黄色軽石を含む）
Ⅴ層：黒褐色微粘質シルト土（硬くしまる。1cm 以下の黄色軽石を多く含む）＝霧島御池軽石漸移層
Ⅵ層：黄色軽石＝霧島御池軽石
Ⅶ層：黒色粘質シルト土（粘性強い）
Ⅷ層：黄橙色火山灰＝鬼界アカホヤ火山灰
Ⅸ層：黒色粘質シルト土（硬くしまる。1mm 以下の黄色軽石を含む）
Ⅹ層：黒褐色粘質シルト土（1.5cm 以下の黄色軽石多く含む）＝桜島嫁坂軽石（P11）農集層
ⅩⅠ層：にぶい褐色粘質シルト土
ⅩⅡ層：黄橙色粘土（2cm 以上の礫を多く含む。粘性極めて強い）

Ⅰａ層は表土層で、桜島文明軽石と思われる灰白色軽石を多く含む造成土（盛土）である。全体的にルーズで現代のガラスや陶器・瓦等がわずかに含まれる。Ⅰｂ層は、調査区の南東部分でのみ確認された層で、試掘調査時にも確認されていない。白色・黄色軽石を多量に含む砂質シルト土であり、旧耕作土であると思われる。Ⅱ層は黒色微粘質シルト土で、灰白色軽石を多くふくむ。調査区全体で確認できるものではなく、調査区の東端のみで確認した。Ⅲ層は黒色粘質シルト土で、黄色軽石をわずかに含む。この層の上部から平安時代末～中世にかけての遺物が多く出土している。下部にいくほど出土量は少なくなる。Ⅳ層はⅢ層よりも黄色軽石を多く含み、Ⅲ層下部ともできる層で、調査区壁の断面の一部ではⅢ層とⅣ層を区別せず、Ⅲ層としている範囲もある。Ⅲ層下部ないしはⅣ層からは遺物はほとんど出土しない。Ⅴ層は黒褐色微粘質シルト土で、1cm 以下の黄色軽石を多く含み硬くしまる。霧島御池軽石の漸移層である。遺物は出土していない。Ⅵ層は霧島御池軽石層である。調査対象地での堆積は薄く、最大でも 30 ～ 40cm 程度を測るのみである。Ⅶ層～ⅩⅡ層は確認調査、SD03 の井戸状掘り込み部分および井戸跡と考えられる遺構を掘り下げた際に確認したものである。今回の調査における包含層掘り下げは最大で御池軽石上面までであったため、これらの層は調査区全体で確認したものではない。Ⅶ層は霧島御池軽石と鬼界アカホヤ火山灰に挟まれた黒色粘質シルト土で、縄文時代前・中期に相当する。Ⅷ層は鬼界アカホヤ火山灰である。下部には火山豆石が確認できる。Ⅸ層は黄色軽石を多く含む層で、硬くしまる。牛の脛火山灰相当層である。Ⅹ層は黒褐色粘質シルト土で黄色軽石を多く含む。桜島嫁坂軽石（P11）農集層に相当する。ⅩⅠ層は時期的には縄文時代早期に相当するものと考えられるが、遺物等は出土していない。ⅩⅡ層は黄橙色粘土層で、小礫を多く含み粘性が極めて強い。また、調査区の一部および SD04 の埋土最上層に桜島文明軽石と考えられる軽石層が確認されている。これも調査区全体で確認されているものではなく、大部分は既に削平されているものと想定される。



基本土層説明

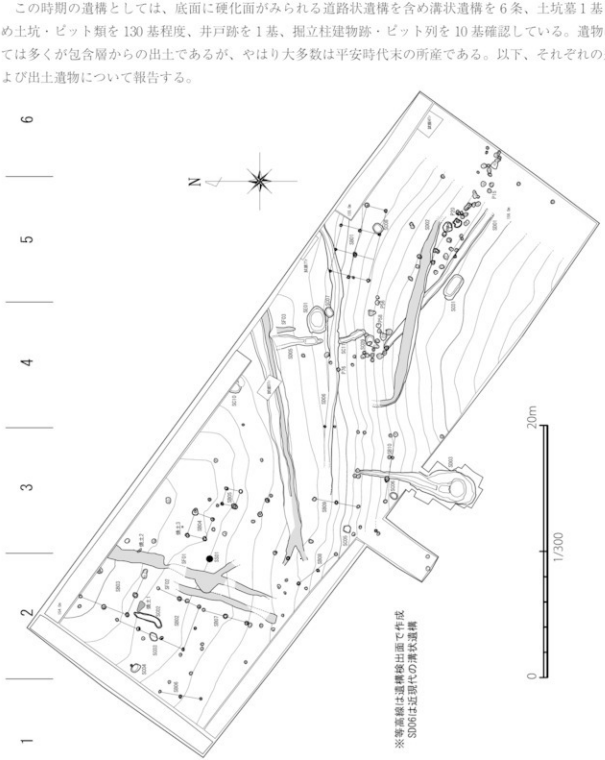
Ⅰa：褐灰色砂質シルト土（1cm以下の白色軽石を含む）
Ⅰb：明褐灰色砂質シルト土（1cm以下の白色・黄色軽石を多量に含む）
Ⅱ：黒色微粘質シルト土（1cm以下の灰白色軽石を含む）
Ⅲ：黒色粘質シルト土（3mm以下の黄色軽石を少量含む）
Ⅳ：黒色粘質シルト土（3mm以下の黄色軽石を含む）
Ⅴ：黒褐色微粘質シルト土（硬くしまる　1cm以下の黄色軽石を多く含む）＝霧島御池軽石の漸移層
Ⅵ：黄色軽石＝霧島御池軽石
Ⅶ：黒色粘質シルト土（粘性強い）
Ⅷ：黄橙色火山灰＝鬼界アカホヤ火山灰
Ⅸ：黒色粘質シルト土（硬くしまる　1mm以下の黄色軽石を含む）
Ⅹ：黒褐色粘質シルト土（1.5cm以下の黄色軽石多く含む）＝桜島桜坂軽石（P11）濃集層
ⅩⅠ：にぶい褐色粘質シルト土
ⅩⅡ：黄橙色粘土（2cm以下の礫を多く含む　粘性極めて強い）

第4図　調査区土層断面図（S=1/60）

第３節　平安時代～中世の遺構と遺物

本遺跡の遺構の多くは、出土遺物から平安時代末（11 世紀後半～ 12 世紀代）頃の所産であると判断できる。しかし、包含層からは中世の遺物もわずかながら出土していることから、遺物が出土していない遺構については中世の所産である可能性も否定できない。そのため、ここでは平安時代～中世の遺構と遺物として報告する。遺構内から遺物が出土しており、帰属時期がわかるものについてはその都度言及することとしたい。

この時期の遺構としては、底面に硬化面がみられる道路状遺構を６条、土坑墓１基をはじめ土坑・ピット類を 130 基程度、井戸跡を１基、掘立柱建物跡・ピット列を 10 基確認している。遺物については多くが包含層からの出土であるが、やはり大多数は平安時代末の所産である。以下、それぞれの遺構および出土遺物について報告する。



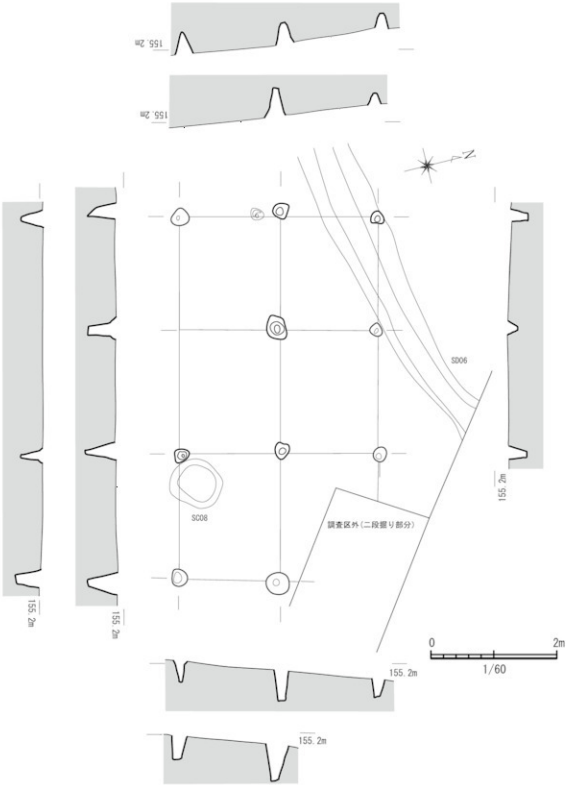
第5図　平安時代～中世遺構配置図（S=1/300）

1　掘立柱建物跡・ピット列（SB）

今回の調査では掘立柱建物跡とピット列をそれぞれ５基ずつ検出している。ピット列とは等間隔に並ぶピット群のことで何らかの建物の一部の可能性がある遺構である。ここでは現場での調査中には認識できなかったもので、整理作業を進める中で図面上において掘立柱建物跡ないしはピット列と認識できたものも含めて報告する。

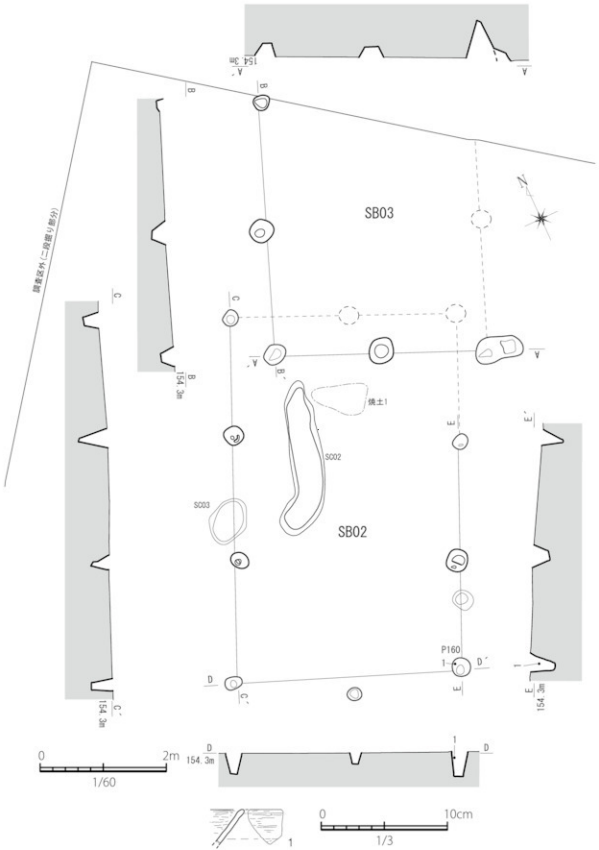
SB01（第６図）

D-5区で検出した掘立柱建物跡である。一部の柱穴は検出できていないが、桁行３間（5.82 m）×梁間２



第6図　SB01実測図（S=1/60）

間（3.08 m）の総柱を呈すものと考えられる。北西隅の柱穴が近・現代の溝状遺構である SD06 に切られる。主軸を東西方向に取る。柱穴の埋土内から遺物は出土していないが、周囲の包含層からは平安時代の土器が出土していることから、本遺構もこの時期の所産である蓋然性が高い。



第7図　SB02・03実測図（S=1/60）・SB02出土遺物実測図（S=1/3）

SB02（第７図）

B・C-2 区で検出しており、北東側の柱穴２本を欠くが、本来は桁行３間（5.76 m）×梁間２間（3.48 m）の掘立柱建物跡であると考えられる。北側の一部は SB03 と重複するようである。主軸を南北方向に取る。遺物は柱穴（P160）からミガキ椀の口縁部が１点出土している（1）。この資料は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、端部がわずかに玉縁状に肥厚する。内外面ともにミガキ調整が加えられる。この他、土師器甕やミガキ椀が出土している柱穴もあるが、小破片のため図化し得なかった。また、建物の範囲内に焼土が点在する範囲（焼土１）が認められたが、検出面のレベル差が大きく、SB02 に伴うものの可能性は低い。

SB03（第７図）

B-2 区、SB02 の北側に隣接して検出した掘立柱建物跡である。検出したのは桁行２間（4.0 m）×梁間２間（3.35 m）であるが、さらに桁行が調査区外に延びる可能性が高い。東側の柱穴２本は検出できていない。主軸を南北方向に取り、南側の一部は SB01 と重複するが、柱穴自体が切り合っているわけではないため、前後関係は不明である。主軸方向、規模等が SB02 と似る。柱穴の一つからは土師器甕の小破片が出土しているが図化し得なかった。

SB04（第８図）

C-3 区で検出した１間（1.92 m）×１間（1.52 m）の掘立柱建物跡である。柱穴の配置は若干いびつになる。主軸は東西方向に取る。柱穴の一つ（P125）からミガキ椀（2）が出土している。全体的に磨耗しているが、内面および断面がわずかに黒色を呈するため、本来は黒色土器 A 類であった可能性もある。胴部が若干張り、口縁部に向かい外反しながら立ち上がる。やはり内外面ともにミガキ調整が加えられる。この他、土師器甕や小皿が出土しているが、いずれも小破片のため図化はしていない。

SB05（第８図）

SB04 の南西に隣接して検出した１間（1.3 m）×１間（1.2 m）の掘立柱建物である。柱穴は若干いびつな配置を取る。主軸は東西方向にある。柱穴から土師器坏の小破片が出土しているが、図化し得なかった。

SB06（第８図）

B・C-1 区で検出したピット列である。南北方向に一列３基（両端のピットの心々間は 3.3 m）のピットを検出した。本来は掘立柱建物跡の一辺で、さらに調査区外（西側）に延びる可能性が考えられる。遺物は出土していない。

SB07（第８図）

C-2 区において検出したピット列である。一列３基（両端のピットの心々間は 3.6 m）のピットを検出したのみだが、本来は掘立柱建物跡の一部であった可能性がある。主軸は SB02・03 と同様に南北方向に取るものと考えられる。図化し得なかったが、柱穴の一つから土師器坏の小破片が出土している。

SB08（第８図）

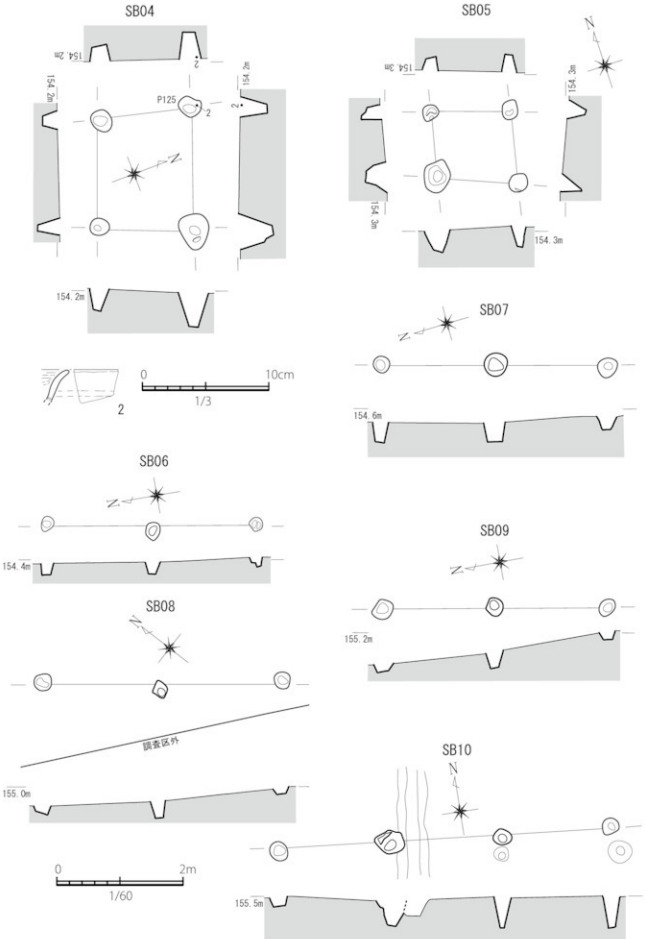
C・D-2 区で検出したピット列で、北西―南東方向に一列３基（両端のピットの心々間は 3.76 m）のピットが直線的に並ぶ。やはり本来は掘立柱建物跡の一部である可能性があり、さらに南側の調査区外へ延びる可能性が高い。遺物は出土していない。

SB09（第８図）

D-3 区で検出したピット列である。一列３基（両端のピットの心々間は 3.54 m）のピットが南北方向に並ぶ。周辺ではこれらと建物構造を構成するようなピットは検出しておらず、遺物も出土していない。

SB10（第８図）

D-3 区で検出したピット列で、SD03 と重複するが前後関係は不明である。一列４基（両端のピットの心々間は 5.42 m）のピットが東西方向に直線的に並ぶ。東側２本のピットについては両者ともに南側に隣接して同様の規模のピットが存在するため、そちらが実際のピット列の一部である可能性もある。また、ピットの一つは SD03 と重複する。遺物は出土していない。



第8図　SB04～10実測図（S=1/60）・SB04出土遺物実測図(S=1/3)

2　土坑・土坑墓（SC）

ここでは、長軸が0.5ｍを超えるものを土坑として報告する。それ以下のものはピットとし、遺物が出土しているもののみ別途報告する。本遺跡では合計11基の土坑を検出しているが、土坑墓の可能性の高いSC01以外は機能等が不明なものが多い。

SC01（第9・10図）

E-5区で検出した2.26 × 1.04ｍの長楕円形を呈す土坑墓と考えられる遺構である。長軸を北西 - 南東方向にとる。掘り形の南西側の長辺はロート状を呈す。掘り形の大部分はゴボウ作付けのトレンチャーにより攪乱を受ける。埋土内からは鉄釘等の直接的に木棺の存在を示す遺物は出土していないが、完形品の遺物が出土していることや規模・平面形態などから墓である可能性が高いと判断した。

遺物は埋土内からまんべんなく土師器坏（**3**～**8**）、小皿（**9**～**11**）、黒色土器Ｂ類（**12**）、白磁椀の破片（**13**）などが出土している。土師器の坏と小皿の底部が残る資料は全てヘラによる切り離しである。坏の形態にはヴァリエーションがあり、**3**や**5**のような本遺跡で主体を占めるタイプに加え、**6**のような切り離しの技法により円盤高台状になるものや、**8**のような底部からの立ち上がりが強いタイプもみられる。このようなヴァリエーションは時間幅を示している可能性が高いが、**9**や**10**といった器形全体が分かる資料や、**12**の黒色土器Ｂ類の口縁部形態、**13**の白磁椀Ⅳないし Ⅴ類の可能性が高い資料の存在から、本遺構の帰属時期は平安時代末（11世紀後半から12世紀前半）としておきたい。

SC02（第9・10図）

B-2区で検出した細長い溝のような土坑である。2.52 × 0.52ｍの逆「し」字状を呈し、深さは最も深いところでも10cm程を測るのみである。検出面に近い埋土の最上部からは白磁皿（**14**）が出土している。口縁端部が外折し、内面体部下半は肉厚となる。底部は欠損する。大宰府分類白磁皿Ⅳ類（11世紀後半から12世紀前半）であろうか。

SC03（第9図）

SC02の西隣で検出した0.76 × 0.6ｍの楕円状を呈す土坑である。検出面からの深さは10cm程である。遺物は出土していない。

SC04（第9・10図）

B-2区の調査区端で検出した土坑である。0.74 × 0.52ｍの不整隅丸方形を呈する。検出面からの深さは最深でも12cm程を測るのみである。埋土内からは黒色土器Ａ類の底部片が出土している（**15**）。この他、砕片のため図示し得なかったがミガキ椀の破片も出土している。

SC05（第9図）

D-3区、調査区進入路付近で検出した不整形を呈する土坑である。0.54 × 0.54ｍを測り、深さはわずか3cm程である。埋土内からは土師器の坏が出土している。

SC06（第9図）

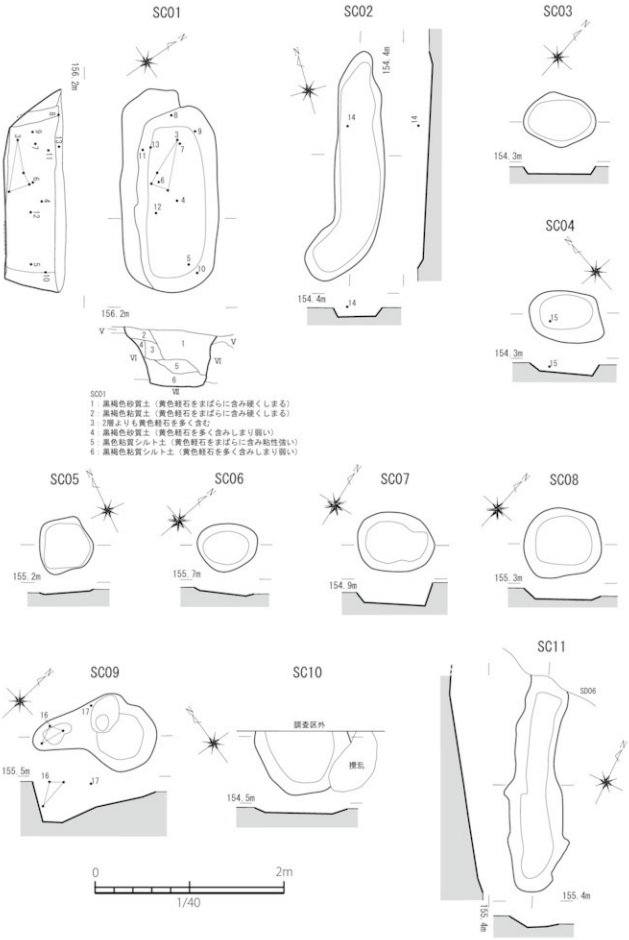
D-3区、SD03の西側で検出した土坑である。0.64 × 0.5ｍの楕円形を呈す。深さは4cm程を測るのみである。遺物は出土していない。

SC07（第9図）

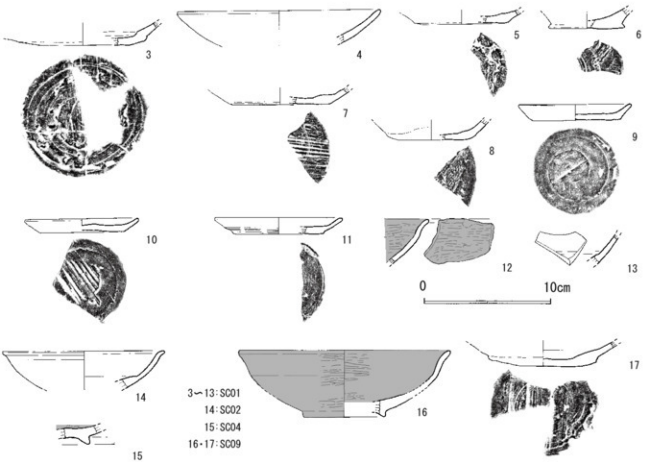
D-4区、SE01に隣接し、SD06と重複して検出された0.8 × 0.62ｍの楕円形を呈す土坑である。検出面からの深さは最深で24cm程である。SD06とは切り合い関係にあるが、SD06と同時に掘り下げてしまったため前後関係は判然としない。しかし、検出時にはSE01と同様の黒褐色土が埋土であったことを確認していることから、近・現代の所産と考えられるSD06に時期的に先行する遺構である可能性が高い。遺物は土師器甕や白磁椀の小破片が出土しているが、図化はし得なかった。

SC08（第9図）

D-5区、SB01に重複して検出した土坑である。0.8 × 0.72ｍの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で12cm程である。SB01とは重複関係にあるものの、SB01の柱穴とは切り合いがみられないため前後関係



第9図　SC01～11実測図（S=1/40）



第10図 土坑（SC）出土遺物実測図（S=1/3）

は不明である。遺物は出土してない。

SC09（第９・10図）

D-4区、SD01の北側に隣接して検出した土坑である。規模は1.28 × 0.8 mで平面形態が瓢箪状を呈す。掘り込みは二段になり、P67と重複するが前後関係は不明である。検出面からの深さは最大で44cmを測る。埋土内からは図面上で完形に復元できる両黒の黒色土器B類（16）と土師器の坏の底部（17）が出土している。16は底部から体部にかけてわずかにふくらみ、そこから口縁部にかけてはS字状に外反する器形を呈す。破片資料を同一個体と認識し、図面上で完形に復元したものである。内外面ともにミガキが加えられ、炭素の吸着により黒色を呈す。17は隣接するP60から出土した破片と接合している。底部切り離しはヘラによるものである。黒色土器の口縁部形態がSC01出土のものと似ていることから、遺構の帰属時期も同様の平安時代末に属するものと考えられる。

SC10（第９図）

C-4区の調査区端で検出した1.0 ×（0.66+ α）を測る円形を呈すと考えられる土坑である。遺構の南東端は攪乱（芋穴か）により破壊される。検出面からの深さは最深でも6cm程を測るのみである。遺物は出土していない。

SC11（第９図）

SC10の北側に隣接して検出した溝状の細長い土坑である。2.26 × 0.6 mを測りSD06に切られる。平面形態だけみると、SD06に分断される形でSD05に連続する同一遺構にもみえるが、両者の検出面のレベルが50cm程の差があったため別遺構として認識した。検出面からの深さは最深でも12cm程を測るのみである。遺物は出土していない。

3　溝状遺構（SD）

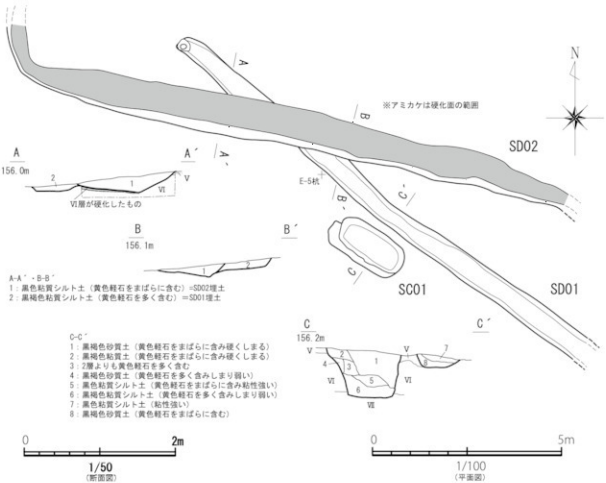
SD01（第 11・12 図）

E-5 杭周辺で検出した溝状遺構で、SD02 に切られる。検出した範囲では長さ 13.5 m、幅 0.5 ～ 0.7 m を測る。調査区東壁の断面でこの溝状遺構に対応する可能性がある土層を確認していることから、本来はさらに東に向かい延びていたものと推測される。埋土には黄色軽石を多く含む黒色粘質土が堆積する。底面に硬化面は認められない。また、この SD01 の軸に平行して SC01 が南側に隣接するが切り合いは認められない。

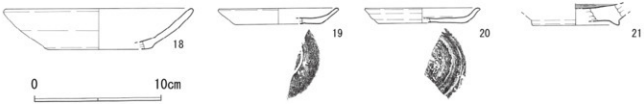
出土遺物には土師器の坏（18）、小皿（19・20）、黒色土器 A 類の底部片（21）がある。18 の坏は底部がほとんど遺存していないため不明だが、小皿は 2 点ともに底部切り離しはヘラによるものである。21 は内黒の黒色土器 A 類で、高台が低く、外に向かいわずかに開くタイプである。平安時代末の所産であろう。

SD02（第 11 図）

E-5 杭周辺で SD01 と交差する形で検出された溝状遺構である。SD01 を切る。長さ 15.5 m、幅 0.5 ～ 1.1 m を測る。埋土は黄色軽石をまばらに含む黒褐色土が堆積する。全体的に既に削平されており、特に北側掘り



第11図　SD01・02・SC01実測図（平面図：S=1/100、断面図：S=1/50）



第12図　SD01出土遺物実測図(S=1/3)

形は底面まで削平されている。遺構の底面は御池軽石に達し、硬化する。西端は北に向かいほぼ直角に折れ、遺構の両端は徐々に浅くなり最終的には途切れる。底面全体に硬化面が認められることから道跡と考えられる遺構である。埋土内からは比較的多くの土師器片が出土しているが、いずれも小破片であるため図化することはできなかった。底部片をみると切り離しはヘラによるもので、板状圧痕が認められるものもある。

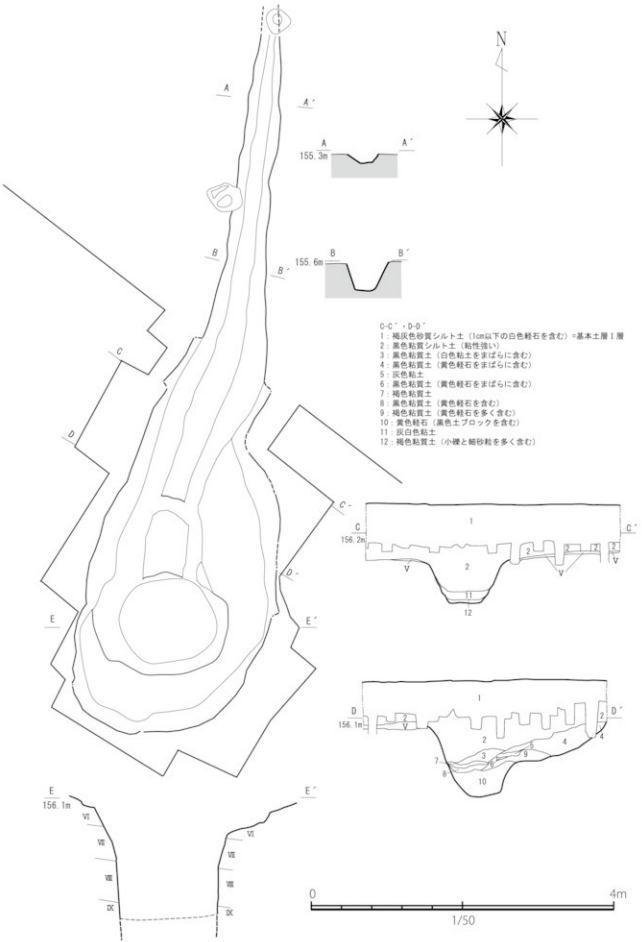
SD03（第 13 ～ 18 図）

D・E-3 区で検出した溝状遺構である。調査区端で検出していたため、当初は溝状を呈する部分のみを確認していた。その後、調査区外に遺構の中心が存在する可能性が高いことから、一部トレンチ状に拡張し、遺構の全体像の確認を行った。その結果、当初検出していた溝状の部分は調査区外である南側に向かうにつれ幅が広くなり、最終的には井戸状を呈する掘り込みに連結することが判明した。全体的な平面形態はオタマジャクシのような形を呈する。本来の掘り込み面からは若干下がった位置で検出しているが、掘り形はロート状を呈すようである。遺構の埋土は、最上部には他の遺構と同様の黄色軽石を若干含む黒色粘質土が堆積していた。それより下位には白色を呈する粘土や灰と考えられる灰色土が入り込んでおり、溝状を呈する部分の底面は良質な粘土を含む二重構造となっていた。この底面土層の上層は灰白色を呈する良質な粘土が貼られ、溝底に接する下層には褐色土に細かな礫や砂を含む層が確認された。

また、この溝状部分から掘り込みに連結する接点は一段深くなり、テラス状を呈する。このテラスの範囲では溝状部分に見られたような厚い粘土の貼り付けはみられない。溝状部分についてもテラスとの接点から粘土が貼られるわけではなく、若干溝幅が広がる土層セクション C-C′ の周辺でも最も厚く貼られ、テラスとの接点付近であるセクション D-D′ では底面の厚い粘土はみられない。

検出面のレベル的には井戸状の掘り込み部分が最も高く、そこから溝状部分に向かいレベルは緩やかに傾斜していく。テラス部分に近いところには厚い粘土が貼られ、溝状部分の先端にいくにつれ粘土が薄くなることを考えると、底面に粘土を貼ることで傾斜を大きくし、水が確実に流れるようにしたとも推測できる。しかし、テラス部分とそれに接続する溝状部分の始点付近には粘土は貼られておらず、このような粘土の貼り付けが何を意図したものかは明言できない。それでも、深い井戸状を呈す形態や、それに接続する標高の低い方へ向かい傾斜する溝状部分の存在を考慮すれば、井戸状の部分に湧いた水を、溝状部分を通して外へ排出するものであったと考えるのが最も蓋然性が高いようである。当初、井戸状部分の埋土内最上層から鞴の羽口が出土したため、製鉄・鍛冶関連の遺構である可能性を考えていたが、それ以外に鉄滓等の関連遺物がほとんど出土していないことや、遺構内自体に水の存在が想定されること、遺構の構造自体から製鉄の直接的な作業場である可能性は低い。井戸から直接水が引けるという意味では、水田等の農耕に関する作業に使われていた可能性が考えられるが、今回の調査ではプラントオパール分析を実施していないため、科学的に稲や水田、畑の存在の有無を実証することはかなわない。しかし、少なくとも遺構や遺物から水田や畑の存在は確認しておらず、遺跡内でこれらが営まれていた可能性は低いといえよう。このように、井戸部分から排出した水の使い道が特定できないことから、井戸部分に取り付いた溝状部分については導水施設というよりは井戸に湧いた水の汚れた部分を外へ排出するための排水施設の機能を有していた可能性が高いといえる。これらの可能性・推測をより確実なものとするためには、今後同様の遺構の類例を蓄積して再度検討すべきと考える。

遺物は埋土内から大量に出土している。多くは土師器坏と小皿であるが、この他黒色土器や上述のように鞴の羽口等も出土している。これらの遺物の出土状況をみると、溝状部分の多くには粘土が貼られていたこともあって、遺構の底面から出土しているものがほぼ皆無である。また、埋土内からブロック状の粘土と一緒に完形資料が出土していることなどから、遺構としての機能を終えた後、一括して廃棄したと考えられるような状況がみられる。ただし、埋土の中でも出土位置やレベルには幅がみられ、一度ではなく複数回にわたって廃棄行為が行われた可能性が高い。しかし、少なくとも同様のレベルで出土した完形品や極めて狭い範囲で接合関係にあるものについては、ある程度の一括性を認め得るものである。以下、種別ごとに報告する。なお、



第13図　SD03実測図（S=1/50）

本遺構からは掲載遺物以外にも多量の破片資料が出土しているが、器形や全体像が分かるものを選別して報告しており、出土状況図についても掲載遺物のみを提示している。

22 ～ 54 は土師器の坏である。掲載した資料の法量の平均値は、口径 15.3cm、底径 8.7cm、器高 3.3cm である。底部から口縁部に向かい大きく開く器形を呈しており、口縁部は直口し、端部は舌状を呈するものが多い。体部は比較的丁寧にナデられ、明確な稜を残すものは少ないが 23 のような器形が大きく歪むものも存在する。底部の切り離しについては 48 以外は全てヘラによるもので、多くが板状圧痕を残す。これと連動して底部内面がオサエやナデにより凹むものが多い。小皿に比べ完形品の出土が少ないが、図面上で復元した資料についても器形や法量が共通するようである。

55 ～ 112 は土師器小皿である。完形品やほぼ完形に復元できるものが多い。掲載資料の法量の平均値は、口径 8.5cm、底径 6.5cm、器高 1.4cm となる。器形は底部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がるもの（62・66 など）、ほぼ直線的に立ち上がるもの（55・58 など）、直線的に立ち上がり端部が先細りとなるもの（72・76 など）、わずかに外反気味なもの（78・97）などがみられる。量的に多いのは前者二者である。底部の切り離しはヘラによるもののみであり、板状圧痕を残すものが多い。

113 は土師器坏の底部付近の屈曲部と考えられる資料で、外面には線刻される。114 も土師器小皿の底部片で内面には貫通しない円形の刺突が確認できる。115 は内面に布痕を残す製塩土器である。外面は剥離する。116 ～ 118・120 は両黒土器の黒色土器 B 類である。116 は完形に復元可能な資料である。底部から口縁部にかけてやや膨らみながら立ち上がり、口縁部は若干外反する。高台は低い。内外面共に横方向を基調とするミガキが施される。117 は底部が厚く、高台が低く外に開くタイプである。118 は高台は欠損する。120 は器壁が薄く断面三角形の低い高台が付く。119 はミガキ椀の口縁部で、直線的に開きながら立ち上がる器形を呈す。口縁部内面が若干肥厚する。121 は 120 と似た器形の黒色土器 A 類で、断面三角形の低い高台が付く。

122 ～ 126 は貿易陶磁器である。122 は大宰府分類白磁椀Ⅱ類、123 は白磁椀Ⅳ類である。いずれも 11 世紀後半から 12 世紀前半の所産である。124 は白磁椀の口縁部片か。125 は白磁椀の高台部で、外面および畳付に施釉される。釉のかかる高さのある高台であることから、白磁椀Ⅴ類であろうか。126 は白磁皿の底部で、底部のみ釉が削り取られる。大宰府分類白磁皿Ⅶ類であろう。このような出土貿易陶磁器からは 11 世紀後半から 12 世紀代の年代が付与でき、遺構の廃棄時期もこの時間幅に収まるものと考えられる

127 ～ 129 は産地不明の国産陶器と考えられる資料である。外面は平行タタキとカキメ状の細沈線、内面はオサエ・ナデ後にやはりカキメ状の調整が加えられる。SD03 からは体部片のみの出土であるが、包含層内からは同種の頸部や口縁部が出土していることから、器種は大甕であると考えられる。これらの資料は胎土に特徴を持っており、粗い砂粒を含み断面の中が茶褐色、外が褐灰色というサンドイッチ状を呈している。

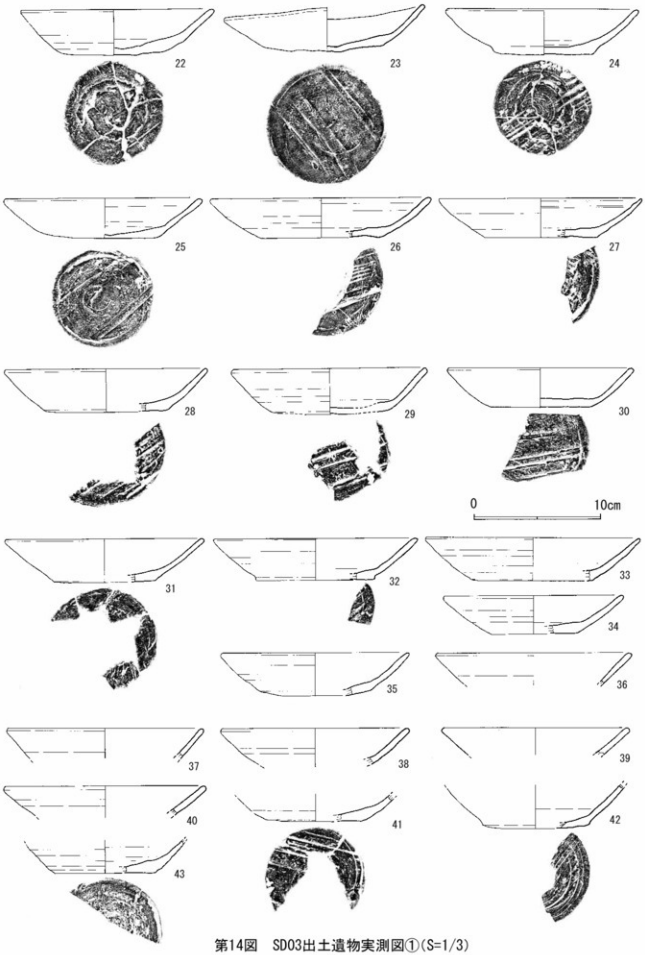
130・131 は滑石製品である。130 は 9.4 × 2.4cm の長方形を呈しており、穿孔の痕跡が残る。滑石製石鍋の転用品と思われ、外面には工具による削り出しの痕跡が確認できる。短軸の破断面が研磨されているため、一見すると石鍋の口縁部片にも見えるが、外面のケズリの方向が横方向になるため、この短軸の研磨は転用後のものと考えられる。用途は不明である。131 も滑石製石鍋の口縁部の転用品である。内外面共に削痕や研磨痕が残るが、用途等は不明である。

132 は砂岩製の砥石、133 は磨面と敲打面をもつ砂岩製の磨・敲石である。

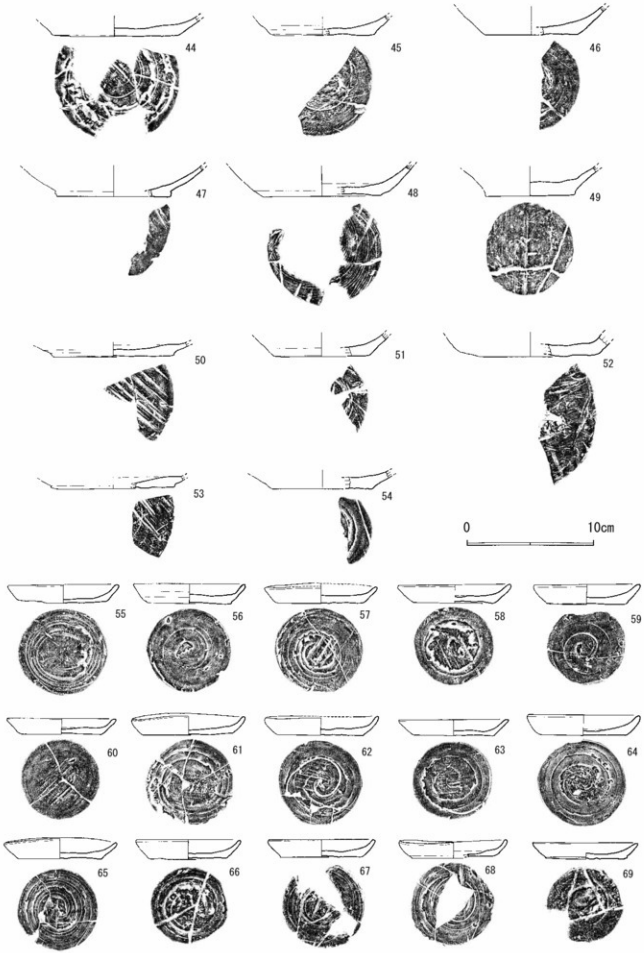
134 と 135 はいずれも鉄釘である。どちらも断面方形で、頭部がく字に折れる。この他、製品ではないが小型の鉄滓が数点出土しているが図化し得なかった。

136 は鞴の羽口である。先端部が先細りとなり、ガラス質の融溶物が付着する。表面には長軸に沿って溝状の窪みが巡る。

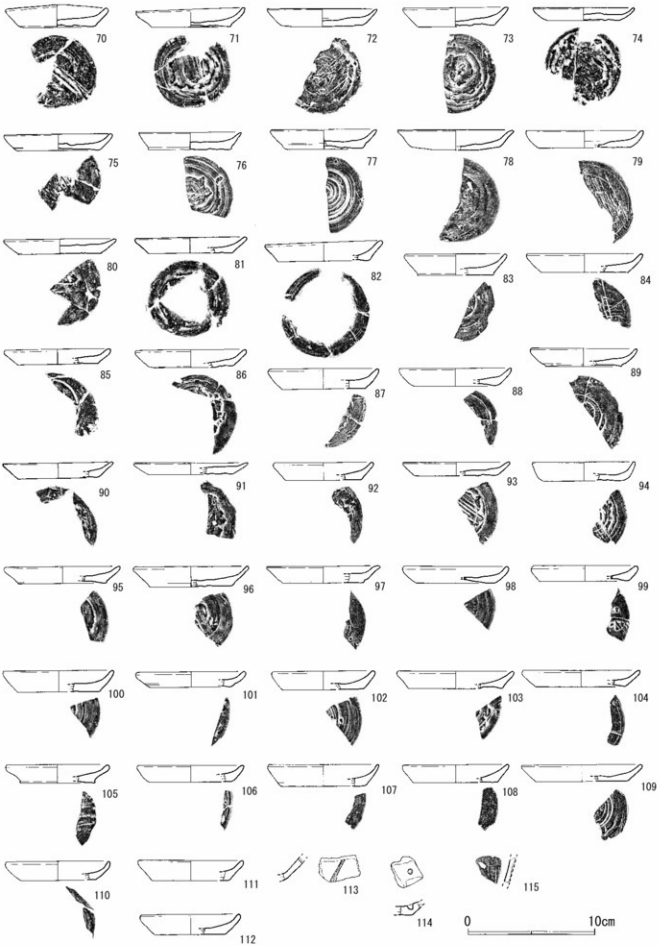
137 ～ 146 は繊維状の束を多く含んだ粘土塊である。図化した以外にも多数の出土がみられたが、壁面と思われる部位が遺存していた資料のみ図化した。二次的な焼成を受けたものや、融溶物が付着したものは認められないことから、炉壁は含まれていない可能性が高い。建物の土壁であったものと考えられる。



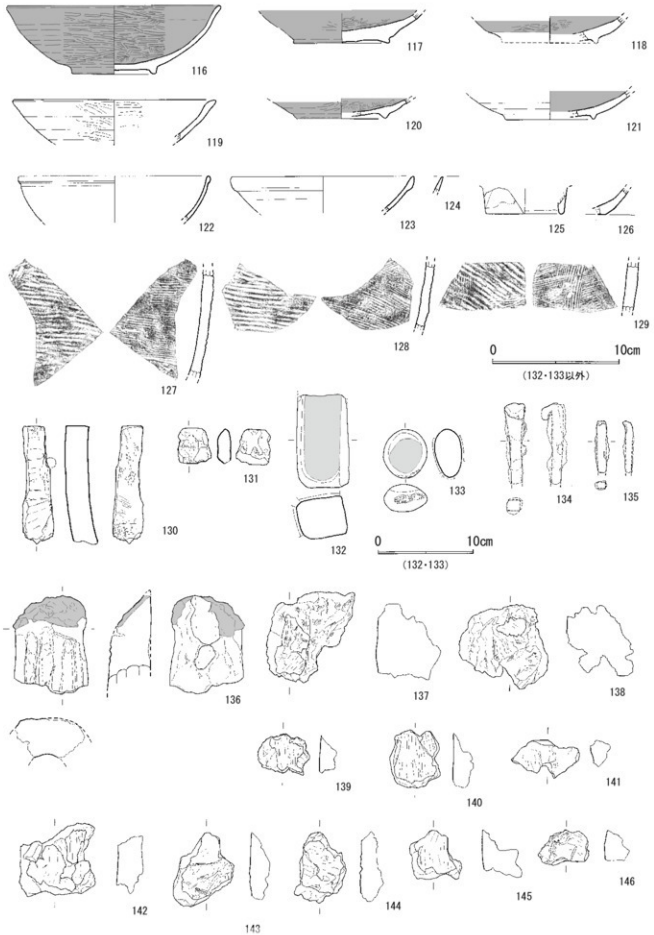
第14図　SD03出土遺物実測図①(S=1/3)



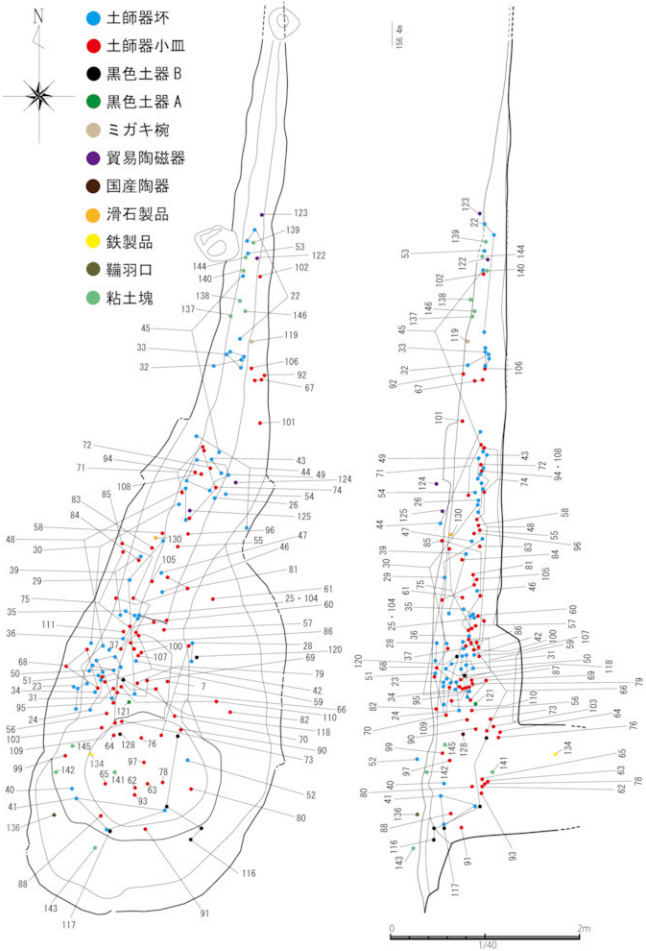
第15図　SD03出土遺物実測図②(S=1/3)



第16図　SD03出土遺物実測図③(S=1/3)



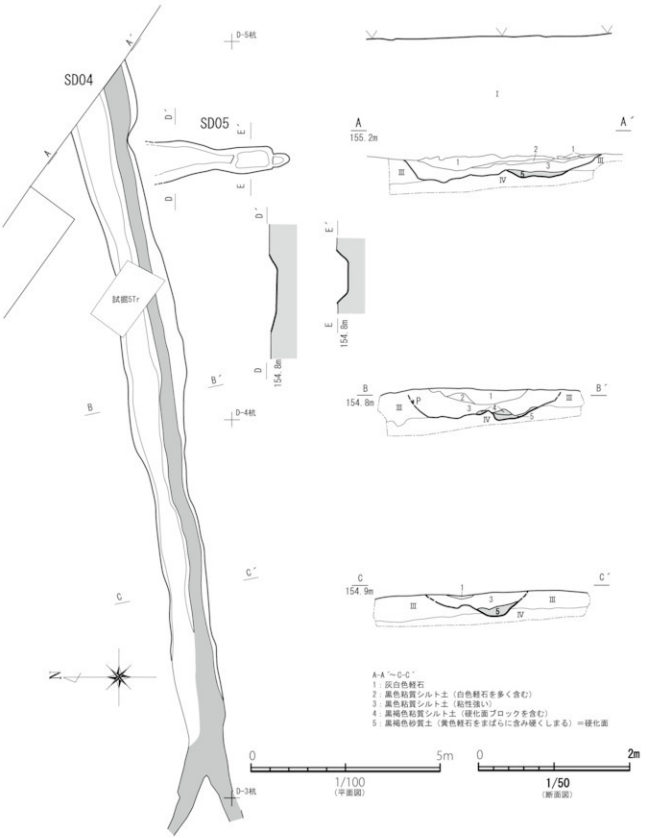
第17図　SD03出土遺物④(石器:S=1/4、その他:S=1/3)



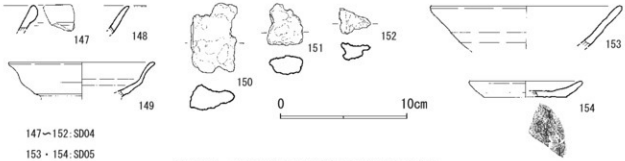
第18図　SD03 遺物出土状況（S=1/40）

SD04（第19・20図）

C-3・4区で検出した溝状遺構である。試掘調査の際に5トレンチで確認していたものである。Ⅲ層中に掘り込まれており、埋土にはⅢ層と同様の黒色土が堆積していた。埋土最上層に桜島文明軽石が堆積しており、これが平面的にも帯状に検出されたことから何らかの遺構であることは認識できていた。しかし、埋土が地



第19図　SD04・05実測図（平面図：S=1/100、断面図：S=1/50）



第20図　SD04・05出土遺物実測図(S=1/3)

山と同様の黒色土であったことから、掘り形の検出は容易でなかった。そのため、サブトレンチを設定し、土層断面を確認しながらの遺構検出となった。その結果、全長約 20 m で東西方向に直線的に延びる溝状の遺構であり、底面には硬化面が伴うことが判明した。遺構の西端は底面の硬化面のみが確認され、二股に分かれる。ここから SF01 や SF02 に連結する可能性もあるが、途中空白部分があるため別遺構として報告する。遺構の断面をみると、二つの溝が切りあうような形となり、南側のみ硬化面がみられる。掘りなおしの可能性もあるが、断面観察からはその確証は得られなかった。埋土の最上層には桜島文明軽石が堆積していることから、時期的には中世の所産である可能性が高い。

147 ～ 152 が埋土内から出土した遺物である。147 は白磁椀Ⅳ類の口縁部、148 は白磁皿の口縁部である。149 の白磁皿は、やや青味を帯びる釉がかけられ、外面高台付近は露胎となる。内面見込みも露胎もしくは蛇の目釉剥ぎになるものと考えられる。露胎部分は橙色に発色する。大宰府分類白磁皿のⅠ～ⅩⅠ類には該当する資料が見当たらないことから、これらの資料よりも後出するものである可能性が考えられる。14 世紀前半以降か。また、これらに加え 3 点の椀形鍛冶滓を図化している（150 ～ 152）。上述のように埋土最上層に桜島文明軽石が堆積する状況も考慮すると、遺構の帰属時期は 14 世紀代以降である可能性が高い。

SD05（第 19・20 図）

C・D-4 区で検出した溝状遺構である。南北方向に走行しており、遺構の北側は SD04 と重複する。時期的な前後関係は明確ではないが、SD04 に切られていた可能性が高い。遺構の南側端近くは土坑状に窪み、その先は消滅する。この範囲は土坑とも切りあっていた可能性がある。近・現代の溝状遺構である SD06 を挟んでさらに南側には SC11 が丁度延長線上にあるため、SD05 と SC11 とした遺構は本来同一の遺構であった可能性も考えられたが、検出面にレベル差があったため別遺構とした。

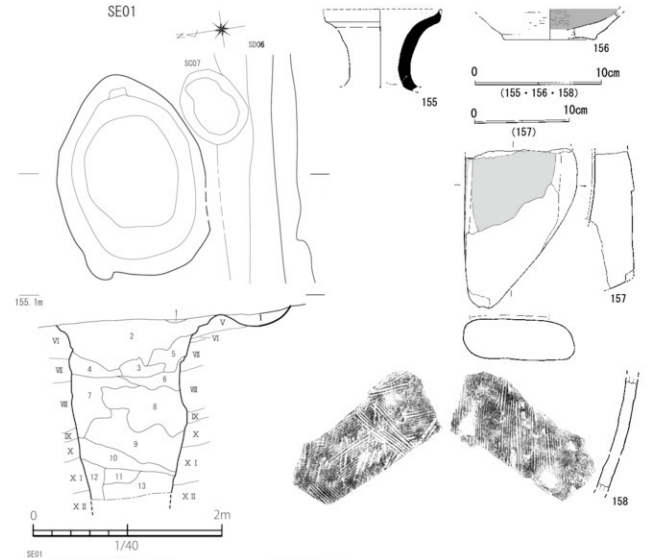
埋土内からは土師器の坏（153）と小皿（154）が出土している。また、この遺構を検出するための精査中に包含層出土遺物の項で報告する 368 の水滴が出土している。遺構の掘り形を明確にするため検出面を若干下げているため、掘り形のレベルより大分上位からの出土となっていることから包含層出土の遺物として報告しているが、本来はこの遺構に伴う遺物であった可能性も考えられる。

4　井戸跡（SE）

SE01（第 21 図）

D-4 区で検出した井戸跡と考えられる遺構である。2.2 × 1.5 m の楕円形を呈す。検出面からの深さ 1.9 m 程まで掘り下げたが、安全面の理由から完掘はしていない。本来の底はさらに深くなると考えられる。ここまで掘り下げた段階では湧水は認められなかった。

遺物は須恵器壺の口縁部（155）、黒色土器 A 類の底部（156）が出土している他、砥石と考えられる石器（157）、国産陶器の甕と考えられる資料（158）が確認されている。さらに土師器坏や小皿の小破片が出土しているが図化し得なかった。157 の砂岩製砥石が埋土の中位から出土しているのみで、その他の遺物は図化していないものも含めいずれも埋土の上層から出土している。そのため、大部分の遺物は遺構の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。出土遺物は全体的にみて平安時代末（11 世紀後半～ 12 世紀代）のものと考えられる。

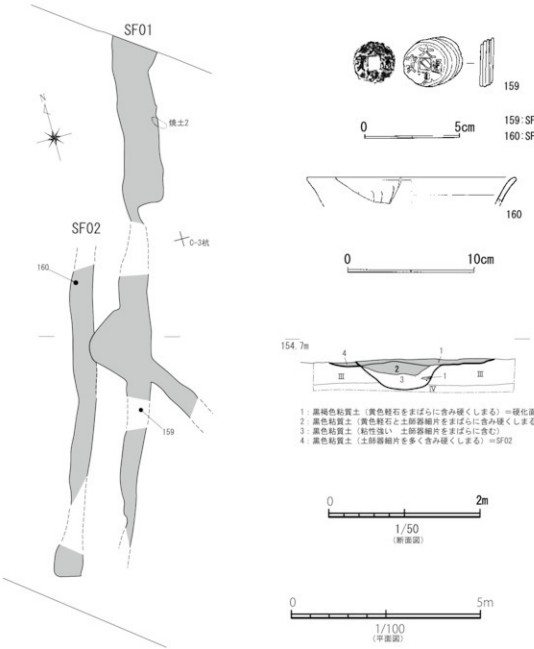


第21図　SE01実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（石器：S=1/4、その他：S=1/3）

5　硬化面（SF）

SF01（第22図）

C-3杭周辺で検出した硬化面である。南北方向に走行し、長さ約13 m、幅0.2 ～ 1.6 mで一部SF02と重複する。遺構の南端は途中で消滅する。断面観察からはSF02を切るものと考えられる。検出したのは硬化面の範囲だが、断面の断ち割状況からは本来は溝状の掘り込みを持つ遺構のようで、その埋土の上層が硬化していることが分かる。この硬化面の下位には土師器の細片をまばらに含み硬くしまる層が確認できる。道跡として利用する際に土に土師器を混ぜて意図的に硬化させたのであろうか。硬化面は部分的に検出できていない範囲や点的にのみ検出した範囲もあるが、本来はこの範囲も帯状に硬化面が続いていたものと考えられる。南側は二股に分かれる。この硬化面上では銭貨が5枚重なった状態で出土している（159）。出土地点の周囲は部分的に硬化面が残るのみだが、本来は上述のように帯状に広がっていたものと推測される。これらの銭貨は重なった状態で固着しているため、一枚目のみ「大観通寶」という文字が確認できる。初鋳年代は西暦1107年とされる。また、隣接して焼土の塊（焼土2）が検出されているが、遺構との関係は不明である。



第22図　SF01・02実測図（平面図：S=1/100、断面図：S=1/50）
出土遺物実測図（古銭：S=1/2、貿易陶磁器：S=1/3）

SF02（第22図）

SF01の西側に隣接して検出された硬化面である。一部SF01に切られる。SF01と同様に南北方向に走行する。長さ約8ｍ、幅0.2～0.5ｍを測る。南北端ともに途中で終息する。正確には硬化面というよりは、土師器の細片を多く含み硬くしまる面が広がるものである。意図的に粉砕した土師器の細片を土に混ぜて固め、道路として利用したものと推測される。硬化面の範囲からは11世紀後半から12世紀前半に比定される大宰府分類の白磁椀Ⅴ類の口縁部（160）が出土している。

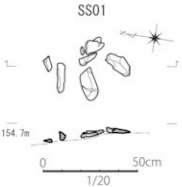
SF03（第5図）

C-4区、SD05に隣接して検出した硬化面である。SD04と重複するが、前後関係は不明である。

6　集石遺構（SS）

SS01（第23図）

C-2区で検出した集石遺構である。8点の砂岩と輝石安山岩の礫から構成される。多くは破砕礫で煤が付着するものもあるが、いずれも砥石のような磨痕は認められない。包含層中からも同様の使用痕跡のない礫がいくつか出土しており、中には煤が付着するものも認められるものの、用途等は不明といわざるを得ない。本遺構も意図的に集積したものか、偶然まとまって出土したのかは不明である。



第23図　SS01実測図(S=1/20)

7　ピット（P）出土の遺物（第24図）

ここでは、先述の掘立柱建物跡やピット列といった建物跡ないしはその一部と考えられるもの以外のピットから出土した遺物を報告する。各ピットの位置および平面形態は第5図を参照されたい。

161はP15から出土した土師器小皿である。器形は底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がり、器高は低い。162はP20から出土した土師器小皿でほぼ完形の資料である。やはり底部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる。底部の切り離しはヘラによるもので、板状圧痕もみえる。163はP56出土の白磁椀Ⅳ類の口縁部である。11世紀後半から12世紀前半にかけての資料である。164はP58出土の鉄滓である。大きさの割には重量感がある。165～167はP76から出土した資料である。165は土師器の小皿である。底部と口縁部の境の屈曲部が肉厚で、口縁部は先細りとなる。底部切り離しはヘラ切りである。166は土師器坏の底部片、167は内黒の黒色土器A類の口縁部である。

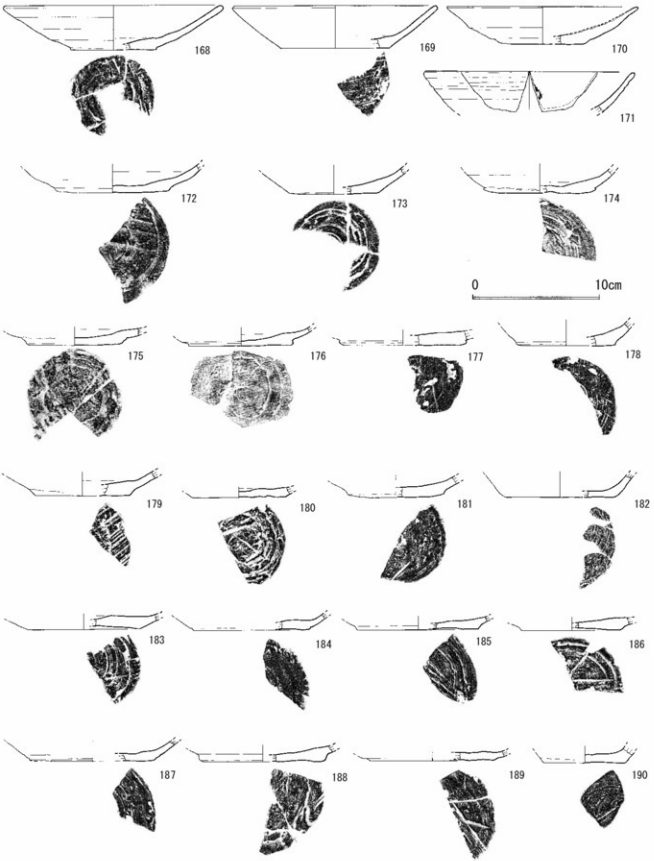
8　包含層出土の遺物

本遺跡において最も量的に多く出土したのは平安時代末の土師器であるが、その他須恵器、陶磁器、鉄製品、鉄滓等も出土している。以下、種別ごとに報告する。

①平安時代の土師器（第25～28図）

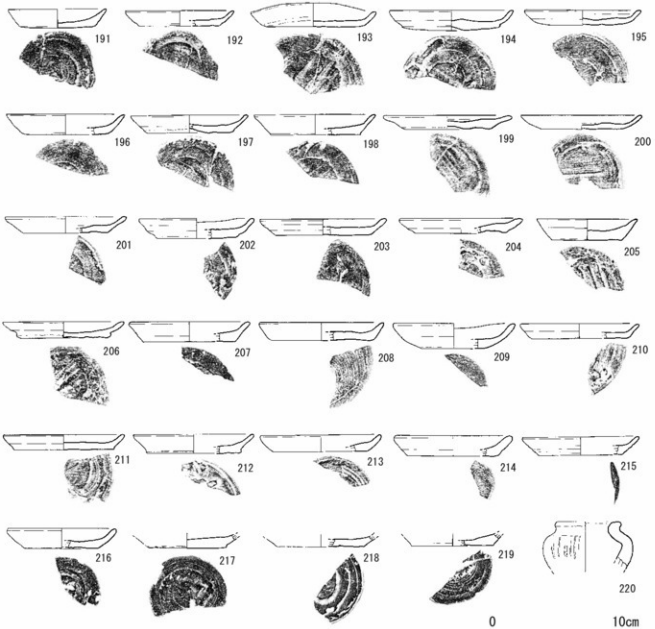
168～190は土師器の坏である。包含層中からは多量の土師器片が出土しているにもかかわらず、底部から口縁部まで完形に復元できたのは168～170の3点のみである。これらの資料はいずれも底部から口縁部にかけて大きく直線的に開きながら立ち上がる器形を呈す。底部の切り離しはいずれもヘラ切りによるものである。171は土師器坏の口縁部である。内面には墨書らしき痕跡が残るが、遺存する部分はわずかである。文字の端のようにもみえるが、何が書かれているかは不明といわざるを得ない。本遺跡で墨書土器の可能性がある資料は本資料のみである。172～190は土師器坏の底部である。底部の切り離しは182と190を除いては全てヘラによるもので、板状圧痕を残す資料も多い。掲載資料のみに限定しても底部糸切り離しは全体の1割にも満たない。底部糸切りの資料は極力図化しているため、これが出土遺物全体となればさらに底部切り離し技法が糸切りのものが占める割合は低くなるものといえる。包含層出土資料と量的にまとまって出土したSD03の資料と比較すると、図面上で復元したものが多いせいもあるが、法量にばらつきが認められる。器形全体

第24図　ピット(P)出土遺物実測図(S=1/3)



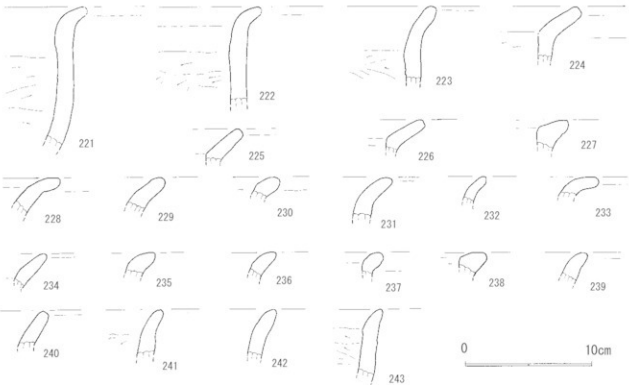
第25図　包含層出土遺物実測図①(S=1/3)

が分かる資料が少ないためより踏み込んだ検討はできないが、包含層出土資料についてはある程度の時期幅がある可能性が考えられる。



第26図　包含層出土遺物実測図②(S=1/3)

191～219は土師器の小皿である。反転復元により図面上で完形に復元できたものは多いが、完形での出土は皆無である。掲載した資料の法量の平均値をみてみると、口径9.4cm、底径6.9cm、器高1.4cmとなる。完形品がまとまって出土したSD03の資料と比べると、口径が0.9cm、底径が0.4cm程大きくなる。器高の平均値は同一である。これらの包含層出土資料については、多くが反転復元して図面上で復元したものであるため、実際の値とは誤差があることが想定されるが、それでもSD03出土資料と比較して口径・底径は大きくなる傾向を認めうる。そのため、土師器坏と同様に若干の時間幅が存在する可能性が高い。器形についてはSD03出土資料と同様のヴァリエーションが認められるが、やはり、底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がるものと、やや内湾気味のものが多い。底部切り離しについても、208と214が糸切りである以外は全てヘラによるもので、板状圧痕を残すものが多い。底部糸切りの割合は坏よりもさらに低くなり、掲載遺物に関しては全体の7パーセント程である。小皿に関しても底部糸入りは極力図化しているため、出土遺物全体に関していえば、糸切りの割合はさらに少なくなるといえる。220は土師器の小壺で外面には数条の沈線が縦位に走る。



第27図　包含層出土遺物実測図③(S=1/3)

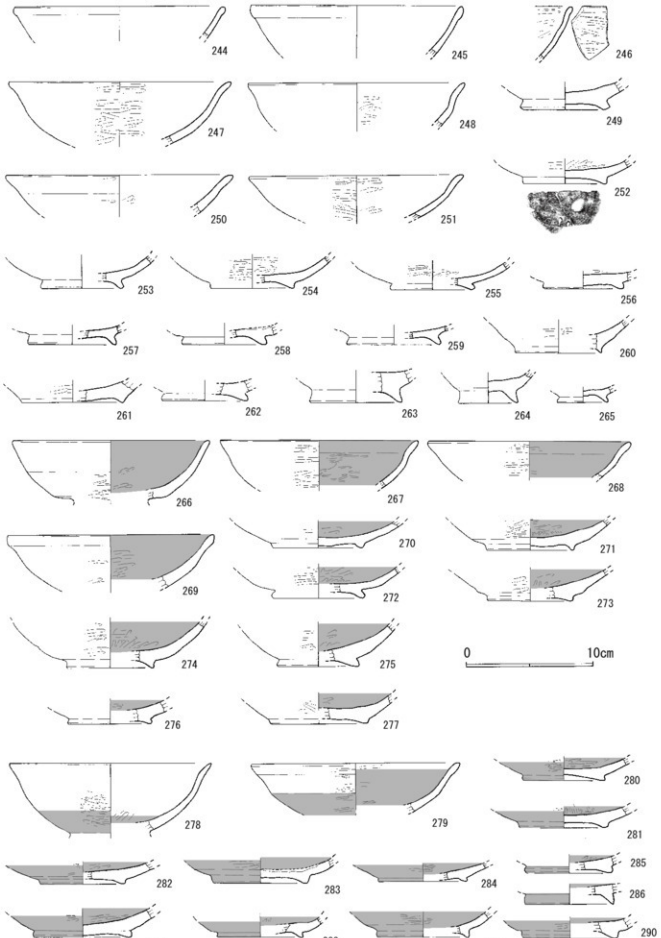
221～243は土師器甕である。掲載した以外にも多くの土師器甕が出土しているが、胴部の破片資料が多く、接合するものもほとんどなかったため、ここでは口縁部資料のみを掲載した。口縁部形態は複数のヴァリエーションが認められる。221～223のように胴部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が短く外反するものや、224～226のようにくの字状に強く外折するもの、242・243のようにほぼ直線的に立ち上がるものなどがみられる。底部片は出土しておらず、口縁部から底部までつながる資料も皆無であるため、全体的な器形は不明である。そのため、これらの器形（口縁部形態）の差が時期差を示すものなのか、同時期のヴァリエーションなのかは不明といわざるを得ない。器面調整は、外面がナデ、内面が屈曲部を境に上位がヨコナデ、下位がケズリとなる。中には煤が付着しているものもみられる。

244～262はミガキ調整の高台付椀（以下、ミガキ椀とする）である。244・245は口縁部が玉縁状に肥厚する資料である。246もわずかに口縁端部が外側に肥厚する。いずれも白磁椀Ⅱ類やⅣ類を模倣したものの可能性がある。249の底部が白磁椀Ⅳ類の底部に酷似する形態を呈することもこのことを傍証するものといえよう。247・248・250・251はミガキ椀の口縁部である。高台部は欠くが、底部からやや膨らみながら立ち上がり、口縁部が短く外反する器形を呈す。252～262はミガキ椀の底部と考えられるもので、いずれも高台を有す。260や261のように高台というよりは、突起状の低い高台をもつものがみられる。大部分は遺構内出土の資料と同様に、低い高台で、外側に開くものである。252は底部外面に「×」状の線刻がみられる。また、ここで「ミガキ椀」として分類した資料の中にも断面や器面の一部が灰色や黒色を呈しているものがみられ、本来は後で報告する黒色土器であった可能性がある資料も存在する。しかし、現況で明確な炭素の吸着（器面・断面が黒色を呈する）がみられるもの以外のミガキ調整を加える椀形土器を「ミガキ椀」とした。

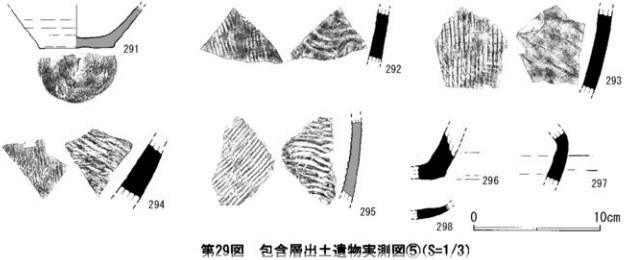
263～265は高台付椀である。ミガキ調整がみられないもので、3点のみの出土である。底径は三者三様であるが、ミガキ椀の高台よりは高くなる傾向にある。底部のみの出土のため、全体的な器形は不明である。

② 平安時代の黒色土器（第28図）

266～277は所謂黒色土器A類と呼ばれる内黒の高台付椀である。口縁部形態をみると、266のように直線的に立ち上がるものや、267・268のように口縁部が短く外反するもの、さらには269のように口縁端部外



第28図　包含層出土遺物実測図④(S=1/3)



第29図　包含層出土遺物実測図⑤(S=1/3)

面が玉縁状に肥厚するものなどがみられる。主体を占めるのはミガキ椀と同様に、口縁部が短く外反するものといえる。270 ～ 277 は黒色土器 A 類の底部である。個別の資料で若干の形態差はみられるが、概ね低く外側に開く高台を有す。高台外面は直線的で、内面は回転ナデにより斜めになる資料もある（273・274・277）。

278 ～ 290 は両黒土器、所謂黒色土器 B 類である。内外面共に横方向を基調とするミガキが加えられ、炭素の吸着により内外面が黒色を呈する。磨耗によりミガキの単位が不明瞭なものが多い。口縁部の形態が分かる資料は 278 と 279 のみである。278 は磨耗のため、黒色部分が残るのは内外面共に部分的である。上述のミガキ椀や黒色土器 A 類と共通する器形を呈すようである。高台部は欠くが、丸みを帯びる体部から口縁部にかけては緩やかに外反する。279 も外面の黒色部分は体部下半のみである。やや口縁端部が肥厚するが、器形も 278 に類似する。280 ～ 290 は底部資料である。高台の特徴もやはりミガキ椀や黒色土器 A 類に共通する。

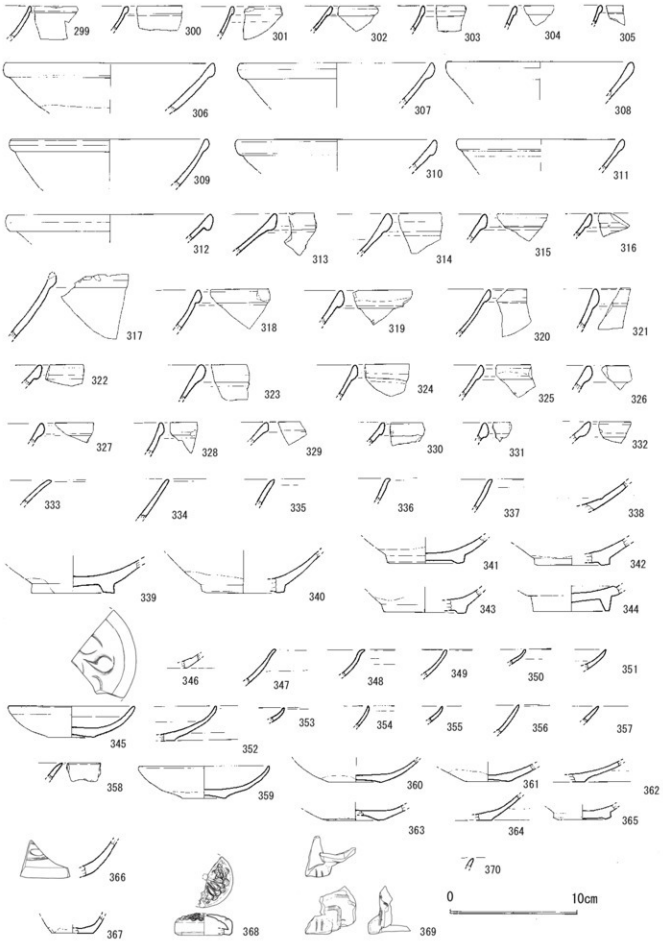
以上のように、ここで「ミガキ椀」、「黒色土器 A 類」、「黒色土器 B 類」とそれぞれ分類した資料の中には、断面や器面の一部が灰色ないし黒色を呈す資料がみられることや、278・279 や SD03 出土 116 の土器のように黒色土器 B 類ではあるものの、部位によっては炭素の吸着が完全でなく黒色を呈していない範囲がある資料も存在する。そのため、本来は黒色土器であった資料をミガキ椀としたり、黒色土器 B 類を黒色土器 A 類として分類している可能性も捨てきれない。これら三種は共通する器形・調整技法をもつことから、ここでの分類は主に器面および断面の色調によるところが大きいことを断っておく。また、本遺跡出土の黒色土器は高台付椀のみで、その他の坏や皿といった器種は出土していない。

③ 平安時代の須恵器（第 29 図）

291 ～ 298 は須恵器である。全体的な出土量は少ない。291 は坏である。ロクロナデの調整痕を明瞭に残す。焼成は不良で胎土は橙色に発色する。292 ～ 297 は甕ないしは壺の破片であろうか。292 は外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。293 は外面格子目タタキ、内面は平行タタキの後ナデ調整が加えられる。294 は底部付近の破片と考えられ、内面は平行タタキ、外面はナデ調整を加える。295 は外面平行タタキ、内面は同心円当て具痕が残り、焼成不良で断面が橙色に発色する。296 は壺の底部片、297 は壺の肩部であろうか。298 は坏身の底部片であると思われる。

④ 貿易陶磁器（第 30 図）

299 ～ 305 は大宰府分類白磁椀Ⅱ類に該当する資料である。体部から口縁部にかけて丸味を帯びながら立ち上がり、口縁部外面は小さな玉縁を呈す。化粧土を有し、釉は薄めで貫入がみられる。11 世紀後半から 12 世紀前半にかけての所産と考えられる。306 ～ 332 は白磁椀Ⅳ類である。本遺跡から出土した貿易陶磁器の大部分は本類である。大きな玉縁口縁を特徴とするが、個体差が大きい。312 のような下方に垂れ下がるような大きな玉縁もあれば、308 のような稜線が明確でなく玉縁というよりは口縁端部が肥厚するような資料もみられる。釉色も様々で、濁った白色を呈すものや若干青味を帯びるもの、黄味を帯びるものなどがみられる。



第30図　包含層出土遺物実測図⑥(S=1/3)

11 世紀後半から 12 世紀前半の資料といえる。333 ～ 337 は白磁椀の口縁部片である。333 ～ 335 は口縁部がほぼ直線的に立ち上がるもの、336・337 は口縁端部がわずかに外折するものである。口縁部片のみでは分類が困難であるが、白磁椀Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ類のいずれかに該当しようか。11 世紀後半から 12 世紀代の資料と考えられる。338 は白磁椀の体部片で、内面に段を有す。貫入がある釉の様子や化粧土を有すことから白磁椀Ⅱ類であると思われる。339 ～ 344 は白磁椀の底部である。339 は高台部外面を直に、内面を斜めに削るもので、釉は高台および一部畳付までかかる。釉が体部下半にまでおよぶが、化粧土がみられることや高台の形態などから白磁椀Ⅱ類の底部であるものと思われる。340 ～ 343 は白磁椀Ⅳ類の底部である。体部下半には施釉されない。底部は肉厚で、高台は低い。344 は高い高台を有す白磁椀Ⅴ類の底部である。

345 は白磁皿Ⅷ類と考えられる資料である。やや丸みを帯びる体部を有し、口縁部は直口する。内面見込みには箆描きで草花文を施す。全体的に施釉されるが、底部のみ釉が削り取られる。346 は底部の釉が削り取られ、内面見込みに段を有すことから皿Ⅴ類であろうか。347 は口縁端部がやや外反する白磁皿である。348 は口縁端部が短く外折する白磁皿Ⅳ類の口縁部である。349 ～ 351・353 ～ 357 は皿Ⅵ類ないしは皿Ⅷ類の口縁部と考えられる資料である。358 は口縁部の小破片であるが、口縁部外面に縦線がみられる。皿Ⅴ類であろうか。352・359 ～ 364 は皿Ⅵ類である。352 や 359 のように底部がわずかに突出するものや、360・361・363 のように突出はほとんどみられず底部が上げ底状になるものがある。いずれも体部下半には施釉されない。365 は白磁皿Ⅱ類の底部である。白磁椀Ⅳ類と同様の形態を呈す。

366 は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面には花文がみられる。12 世紀中頃から後半の所産といえる。

367 は青白磁の合子の身である。底部付近までやや青味がかった釉が施される。368 は青白磁の水滴である。約 1/3 のみが遺存しており、中央付近と縁辺部に小穴が確認でき、その周囲は菊文が施される。369 は白磁の獣像であろうか。遺存する範囲では獣足部分と考えられる部位が確認できる。その上には衣のような部位もみられることから、獣の上に人物が座っていた可能性も考えられる。370 は天目茶椀の口縁部の小破片である。

上でみてきた白磁椀および白磁皿の年代はいずれも 11 世紀後半から 12 世紀代といえる。特に出土量的に多数を占めるのは大宰府 D 期（11 世紀後半から 12 世紀前半）とされる白磁椀Ⅱ類・Ⅳ類と白磁皿Ⅵ類である。

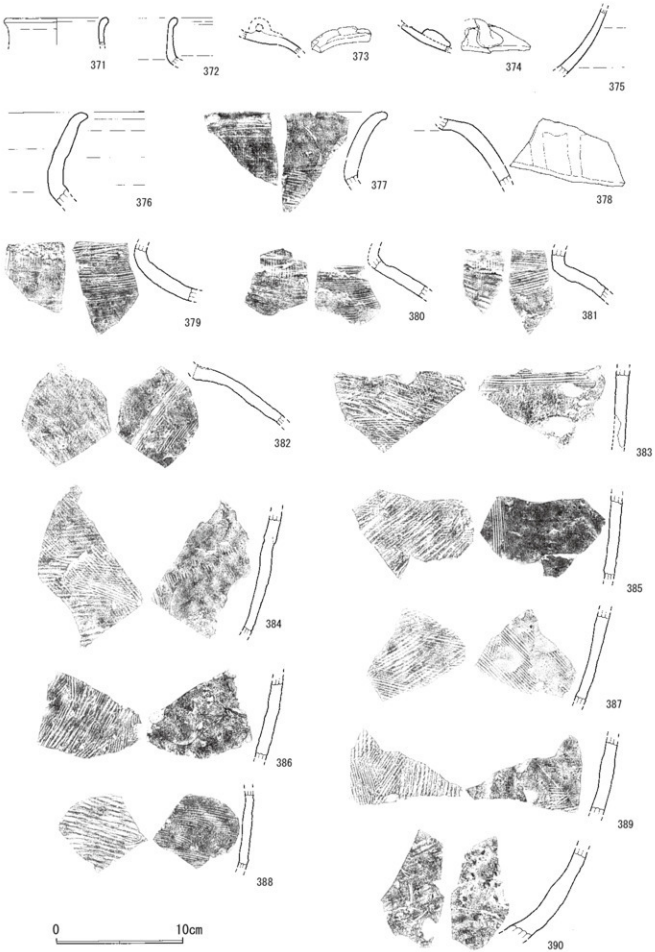
⑤ **中国陶磁器**（第 31 図）

371 ～ 375 は中国産陶器の壺ないしは耳壺と考えられる資料である。371 ～ 373 は灰オリーブ色の青磁のような色調の釉がかかる。これら 3 点の資料は胎土・釉の色調がよく似ているが、371 と 372 は別個体と考えられる。373 はほとんどが欠損するが縦の耳が付いていたようである。374 は同じく耳壺の肩部で、半分ほど横付けの耳が遺存する。黄味を帯びる釉がかけられるが、大部分が磨耗により剥離する。375 は褐色の釉がかけられる。やはり壺の体部であろうか。ここに掲載した資料以外にも、同様の中国陶器と考えられる資料の小破片が出土しているが、全体的な出土量は少ない。

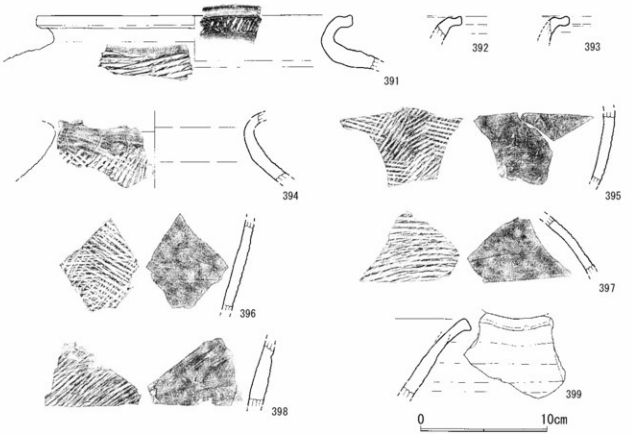
⑥ **国産陶器**（第 31・32 図）

376・377・379 ～ 390 は産地不明の国産陶器である。外面は平行タタキの後にカキメ状の細沈線を、内面はナデないしはオサエの後にやはりカキメ状の細沈線により調整する。一見すると須恵器のような焼き上がりである。376・377 は口縁部、379 ～ 381 は頸部である。382 は肩部、それ以外は体部から底部付近と考えられる資料である。いずれも胎土に特徴があり、断面をみると中が茶褐色、外側が灰褐色ないしは灰色を呈しておりサンドイッチ状になる。さらに、胎土中には 2 ～ 3mm 程度の茶褐色を呈す鉱物が多く含まれるのも大きな特徴といえる。外面には光沢のある自然釉が薄くかかるものもある。376 や 377 の口縁部をみると、かなり口径が大きくなるものと考えられる。378 は常滑焼の甕である。肩部で、オリーブ色の釉がかかる。常滑焼の出土はこれ 1 点のみである。

391 ～ 398 は東播系須恵器の甕である。391 ～ 393 は甕の口縁部資料である。391 をみると口縁部が短く折れ、頸部以下には格子目状のタタキ、内面はナデ調整が加えられる。口縁部内面には押圧によると思われる浅い刻目が巡るようである。394 は頸部から肩部にかけて、397 は肩部の資料で、やはり外面は格子目状のタタキ



第31図　包含層出土遺物実測図⑦(S=1/3)



第32図　包含層出土遺物実測図⑧(S=1/3)

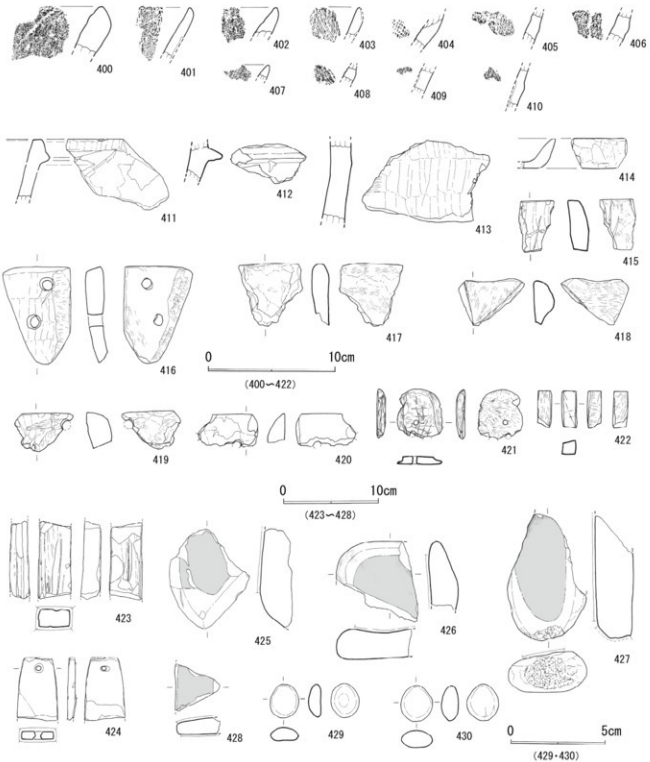
が、内面はナデによる調整が加えられる。395・396・398は甕の体部片である。外面は格子目状ないしは平行タタキにより調整され、内面は丁寧なナデにより平滑となる。399は片口鉢の口縁部であり、片口部分のみが遺存する。内外面共にナデ調整が加えられる。

⑦ その他の土器（第33図）

400～410は内面に布痕を残す製塩土器である。400～403・407・408は口縁部片である。400は器壁が2cm程あり、他資料に比べて肉厚の印象を受ける。口縁部をみるといずれも先細りするようで、外面はナデないしはオサエにより整形される。本遺跡からは底部の出土はみられなかった。

⑧ 滑石製石鍋・滑石製品（第33図）

411～422は滑石製石鍋ないしはその転用品である。411は滑石製石鍋の口縁部で、口縁部外面には断面台形の鍔が巡る。外面に削痕がみられることや、破断面も研磨することから転用しようと試みた可能性が高いが口縁部の形状が残るため石鍋として報告する。412も石鍋の口縁部付近と考えられ、断面が縦長台形の鍔が巡る。411に比べると鍔が高い。やはり破断面の一部が研磨されることから転用品の可能性がある。外面には煤が付着する。411は木戸雅寿氏編年のⅢ類-a-2、412はⅢ類-a-1に比定でき、両者共に12世紀代の所産と考えられる。413は体部片と考えられるが、縦長の把手が付くタイプの可能性もある。414は口径は復元できなかったがかなりの小型品である。器高は2.4cmを測るのみである。415～420は石鍋の転用品と考えられる資料である。415は口縁部を転用したものである。破断面が研磨されるが、用途は不明である。416も石鍋口縁部の転用品と考えられる資料である。径1cm程の小穴が2箇所確認でき、破断面も丁寧に研磨される。本来は縦長の把手が付くタイプの石鍋であったものと考えられる。温石として再利用したものか。417・418も口縁部の転用品と考えられ、破断面が研磨されたり、削られたりすることで形状がかなり変化している。419・420も本来は口縁部であったものを研磨しており、穿孔がみられる。これらの転用品の大部分は再利用のための研磨痕などがみられるものの、未製品のため用途が判然としない。421は円盤状の形態を呈し、1/3



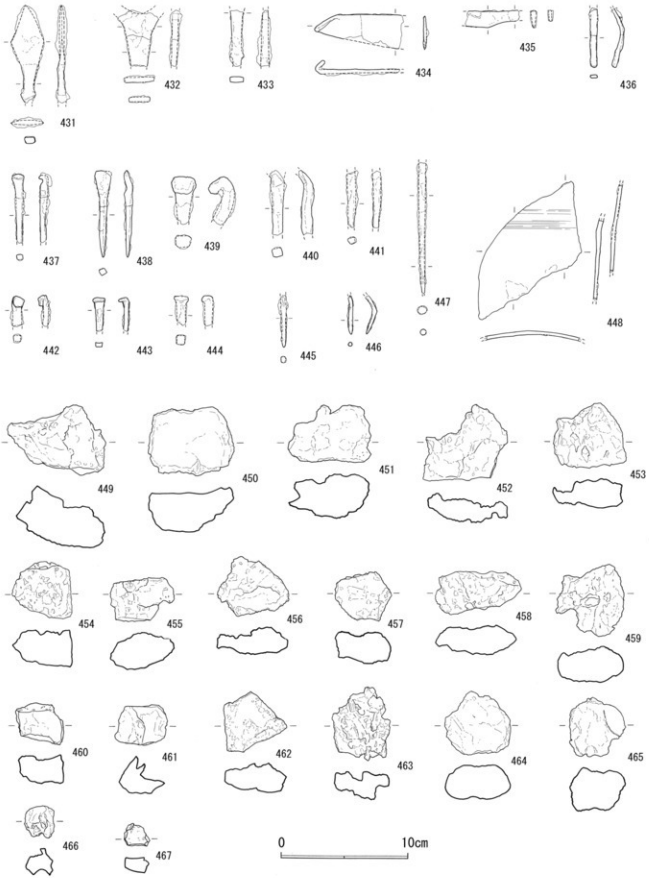
第33図　包含層出土遺物実測図⑨（石器：S=1/2・1/4、その他：S=1/3）

程が欠損するものと思われる。中央付近に3箇所の穿孔が確認できる。表面には「井」字状の線刻がみられる。422は四角柱状の形態を呈し、各面が研磨される。用途は不明である。

これまでみたように、滑石製石鍋の転用品については、用途・時期等が不明なものが多い。石鍋の口縁部の形態が残るものについては、12世紀代と考えられる鍔が巡るものや転用品の中に縦長把手が付くタイプが存在することから、先にみた貿易陶磁器の年代と同様の11世紀後半から12世紀代の所産である蓋然性が高い。

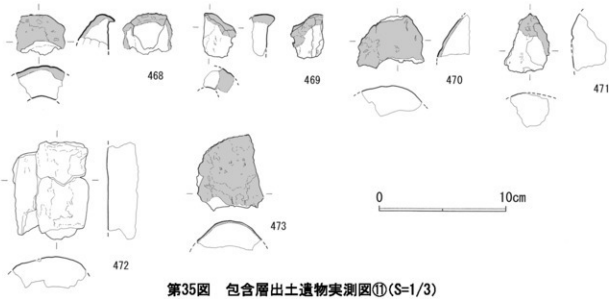
⑨ 石器・石製品（第33図）

423・424は砂岩製の砥石である。423は表裏面に窪みを残す。側面は両側から擦り切りのような研磨が加



第34図　包含層出土遺物実測図⑩(S=1/3)

えられる。424は1箇所穿孔がみられ、大きさ・形態などから手持ちの砥石であったものと推測される。表裏面、両側面に研磨痕がみられる。426は台石で、表面が大きく窪む。一部煤が付着する。砂岩製である。427は磨



第35図　包含層出土遺物実測図⑪(S=1/3)

面と敲打痕を残す磨敲石である。やはり砂岩製である。425・428も磨面が残ることから砥石として使われたものと考えられる。429・430は石英製の碁石と考えられるものである。両者共に磨かれており、表面には光沢を有す。

⑩ 鉄製品・鍛冶関連遺物（第34・35図）

431～448は鉄器および鉄製品である。いずれもX線撮影は行っておらず、錆膨れの著しい部分は形態を推定しているところが多い。431～433は鉄鏃である。431は鏃身部が三角形を呈するもので、篦被を有すようである。432は雁又鏃であると思われるが二股の鏃身部は欠損する。433も鏃であると思われる資料で、錆膨が著しいが、篦被を有すようである。434は刃部をもつことや全体的な形態から鉄鎌であると思われる。刃部先端が折り曲がる。435は刀子で刃部の多くは欠損する。刃側に鈍い関がみられる。436は先端が若干匙状になるようにもみえるが、錆膨れしており、判然としない。437～440・442～444は鉄釘である。断面形態は長方形を呈す角釘が多い。いずれも頭部が折れる。441・445・446も釘の可能性があるが、頭部が欠損するためその他の製品の可能性も残る。446は断面形態が円形に近い。447は一部欠損するため、器種は不明であるが、鉄鏃や鉋の可能性も考えられる。これも断面形態は円形に近い。448は鉄鍋である。口縁部は欠くが、体部上半でわずかに外側に屈曲するようである。内面には煤が付着する。

449～467は鉄滓である。大小様々で、449のように底部に砂や小石が付着したり、463のように繊維の束を多く含むようなものもある。449や450のように椀形鍛冶滓と考えられる資料が多いが、今回はこれらの出土資料について金属学的分析は実施しておらず、一括して鉄滓として報告する。ここでは合計19点のみ図化しているが、全体的な出土量は包含層だけでも200点を数え、総重量は約3.3kgを計る。出土地点をみると、調査区の北西半で全体の約87%が出土しており、特にC-2、C-3区で全体の半数以上が出土している。しかし、鉄滓以外の遺物の出土状況も同様の傾向をみせ、この範囲で鉄滓のみが集中して出土したというわけではないといえる。

468～473は鞴の羽口である。468～471は先細りする先端部と考えられ、断面が三角形を呈する。いずれも外側にガラス質の融溶物が付着したり、鉄分が付着して表面が硬化したりする。通風孔部分が遺存するものもあるが、いずれも破片資料のため、径は不明である。

今回の調査では炉跡などの製鉄や鍛冶に関する遺構は検出していないが、鞴の羽口をはじめ、鉄滓など製鉄や鍛冶に関連する遺物が出土していることを考えると、近辺で鍛冶が行われていた可能性が考えられる。

第４節　その他の時代の遺構と遺物

これまでみてきたように、本遺跡の主要な時代は平安時代末から中世初頭（11 世紀後半から 12 世紀代）であるが、それ以後の遺構・遺物もわずかではあるが出土をみている。以下、平安時代～中世以外の遺構・遺物を一括して報告する。

１　溝状遺構（SD）

SD06（第 36 図）

D-3 区～ D-5 区にかけて検出した、全長 21 m程、幅 0.5 ～ 0.9 m の溝状遺構である。当初、埋土が基本土層Ⅰ層（表土盛土）に酷似しており、周辺の他の遺構を精査・検出する際にかなり掘り下げたため、検出面からの深さは極めて浅い。調査区断面で確認すると、深さ 40cm 弱程あったようだが、一番浅い西側部分は 10cm にも満たない。西端は徐々に浅くなり最終的には消滅する。上部はⅠ層に削平されているため、掘り込み面は不明であるが、基本土層のⅢ～Ⅳ層を掘り込んでいることや、文明軽石を多く含む土が埋土となることから、少なくとも文明軽石の降下以前、平安時代から中世にかけての遺構ではないといえる。また、後述するように、基本土層Ⅲ層からはわずかながら近世の染付や国産陶器が出土していることから、Ⅲ層を掘り込んで構築される本遺構は近世よりも新しい時代のものと考えられる。さらに、遺構内の埋土が基本土層Ⅰ層に酷似することから、近・現代の所産である可能性が高い。他遺構との関係についてみると、SB01 の柱穴の一つ、SC07、SC11、P76 とは切り合い関係にある。SB01 の柱穴については SD06 を掘り下げた後に検出していることから、SB01 の方が時期的に先行するものといえる。SC07 と P76 については、掘り下げ時に SD06 と同時に掘り下げてしまったため、平面図では SD06 が SC07 と P76 に切られるような表現になっているが、堆積する埋土の差異から実際には SD06 が両遺構を切っていたものと考えられる。

出土遺物としては 474 の青磁椀の口縁部片や 475 の椀形鍛冶滓が出土している。青磁椀については平安時代末から中世初頭にかけてのものと考えられることから、いずれも流れ込みの可能性が高いといえる。先述のように埋土の様子からは近・現代の所産であるものと考えられる。

今回の調査においては、遺構内から近世以降の遺物が出土したものがないことや、遺構内に堆積する埋土の様子からも SD06 が唯一の近世以降の遺構であるものと考えられる。

２　包含層出土の遺物

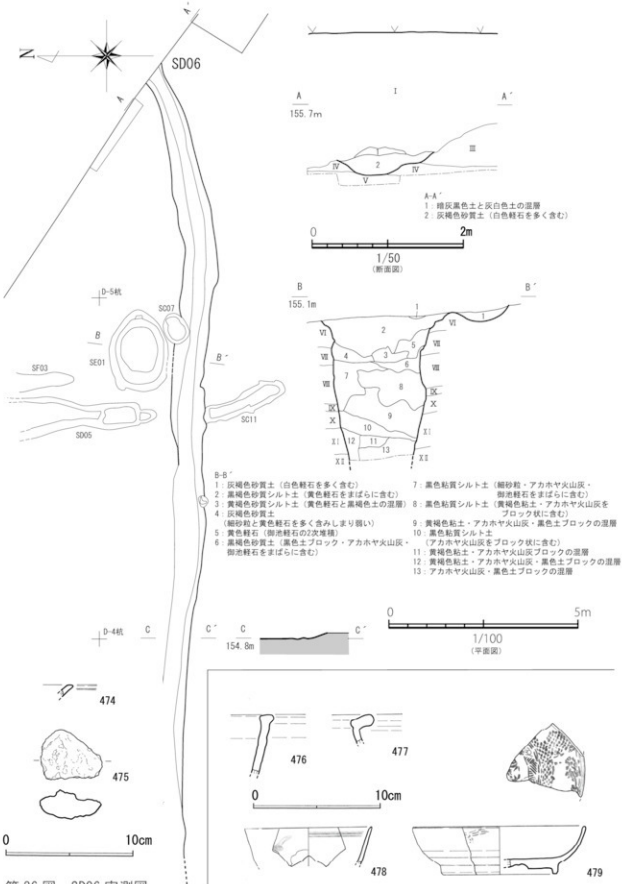
基本土層のⅢ層から出土している遺物の大多数は、先述のように平安時代から中世（11 世紀後半から 12 世紀代）にかけての所産のものであり、その他の時代の遺物は極めて限定的である。その中で、染付や薩摩焼と考えられる国産陶器等の近世に属すると考えられる遺物もわずかながら出土をみている。以下、平安時代および中世以外の時代の包含層出土遺物を報告する。

476・477 は薩摩焼の鉢であろう。476 は口縁部が平坦となり、断面が T 字を呈す。477 は口縁部がく字に強く屈曲する。内外面共に褐釉が施される。いずれも近世の所産と考えられる。

478 は染付の椀・479 は皿である。479 は肥前系の蛇の目凹形高台皿と考えられる資料である。高台中央が円形に削り込まれ、その周囲は蛇の目状に釉が剥がれる。内面には花文が施され、一部外面にも文様がみえる。18 ～ 19 世紀代の所産であろうか。

この他にも近世の遺物としては、掲載遺物と同様の薩摩焼や染付の小破片が出土しているが、出土量は限定的で、図化し得るほどの破片ははとんどなかった。平安時代より古い時代の遺物については、Ⅲ層から弥生土器の口縁部片と考えられるものが１点出土しているのみであり、それ以外の時代の遺物については全く出土をみていない。

また、表土（盛土）層である基本土層のⅠ層からも若干の陶器や瓦片が出土しているが、ガラス片などと一緒に出土しており、いずれも現代の所産であるといえる。



第 36 図　SD06 実測図
（平面図：S=1/100、断面図：S=1/50）
出土遺物実測図（S=1/3）

第37図　包含層出土遺物⑫(S=1/3)

第1表　永田藤束遺跡出土遺物観察表①

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・周辺・取上番号	口径	底径	最高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
7	1	土師器（Ｅ万不明）	椀	P160(SB02) 1481	—	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精緻	
8	2	土師器（Ｅ万不明）	椀	P125(SB04) 1266	—	—	—	ナデ→ミガキ（黒斑）	ナデ→ミガキ（黒斑）	灰白	灰白	微細な黒色粒	
10	3	土師器	坏	SD01 1226・1228・1233・1236	—	10.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	4	土師器	坏	SD01 1222	16.0	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	反転復元
	5	土師器	坏	SD01 1224	—	7.4	—	ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の赤色粒　A＋B	ヘラ切り　反転復元
	6	土師器	坏	SD01 1071	—	6.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細赤色粒　A＋B	ヘラ切り　反転復元
	7	土師器	坏	SD01 1054	—	8.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	8	土師器	坏	SD01 1051	—	7.2	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の赤色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	9	土師器	小皿	SD01 1272	9.0	6.8	1.3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色粒　A-Dマーブル	ヘラ切り
	10	土師器	小皿	SD01 1072	8.8	6.6	1.1	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	微細な白色粒　C	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	11	土師器	小皿	SD01 1069	10.1	7.2	1.3	ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細黒色粒　B	ヘラ切り　反転復元
	12	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD01 1223	—	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	
	13	白磁	椀	SD01 1052	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	内or外釉か
	14	白磁	皿	SD02 1518	12.8	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元
	15	土師器（黒色土器A）	高台付椀	SD04 1262	—	—	—	ナデ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙→黄灰	微細な白色粒	黒色土器か
	16	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD09 0098・1099・1246	16.6	6.2	5.3	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転・面上復元
12	17	土師器	坏	SD09 1260 P80 1540	—	8.5	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	18	土師器	坏	SD01 1066	15.0	8.6	3.3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒色・赤色粒　A＋B	ヘラ切り　反転復元
	19	土師器	小皿	SD01 1064	9.4	6.8	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	20	土師器	小皿	SD01 1065	9.0	7.0	1.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A＋B	ヘラ切り　反転復元
	21	土師器（黒色土器A）	高台付椀	SD01 1056	—	7.0	—	ナデ→ミガキ（黒斑）	ナデ→ミガキ（黒斑）	浅黄橙	黒	微細な黒色・白色粒	
14	22	土師器	坏	SD03 0984・1087・1200	15.2	7.2	3.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り
	23	土師器	坏	SD03 1514	15.6	9.2	3.5～3.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	1mm以下の黒色粒　B	ヘラ切り　板状圧痕
	24	土師器	坏	SD03 1445・1513	15.0	8.0	3.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	25	土師器	坏	SD03 1490	15.3	8.0	3.3～3.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰白	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	26	土師器	坏	SD03 1407	17.0	9.6	3.1	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	27	土師器	坏	SD03 1562・一括	16.0	9.0	3.1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅橙	1mm以下の赤色粒　B	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	28	土師器	坏	SD03 1147・1148	15.8	10.0	3.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	29	土師器	坏	SD03 1563・1203・1562	15.0	9.2	3.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	30	土師器	坏	SD03 1336・1402	14.4	8.0	3.1	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A-Bマーブル状	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	31	土師器	坏	SD03 1421・1447・1460・1470・1471・1477	15.6	8.0	3.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	32	土師器	坏	SD03 1189・1190・床証一括	15.6	9.4	3.3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	33	土師器	坏	SD03 1447	16.9	9.6	3.4	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	微細な黒色粒　A	反転復元
	34	土師器	坏	SD03 1176・1490	14.0	6.8	3.0	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・白色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	35	土師器	坏	SD03 1190・1193・1194・1195	14.6	9.0	3.4	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	36	土師器	坏	SD03 1460・1496・一括	15.2	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙～灰褐	にぶい橙～灰褐	微細黒色粒　A-B	反転復元
	37	土師器	坏	SD03 1441・一括	15.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色粒　B	反転復元
	38	土師器	坏	SD03 埋土一括	14.6	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色粒　A-B	反転復元
	39	土師器	坏	SD03 1342・1489	14.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の赤色粒　A	反転復元
	40	土師器	坏	SD03 1511	15.6	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒　A-B	反転復元
	41	土師器	坏	SD03 0108・1512・一括	—	8.0	—	ナデ	ナデ	明褐灰	灰白	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	42	土師器	坏	SD03 1524	—	8.4	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰白	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	43	土師器	坏	SD03 1410・1412	—	8.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
15	44	土師器	坏	SD03 1357・1402・一括	—	10.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	45	土師器	坏	SD03 1089・1409	—	8.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	46	土師器	坏	SD03 1426・一括	—	7.4	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　B	ヘラ切り　反転復元
	47	土師器	椀	SD03 1184	—	9.0	—	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	48	土師器	坏	SD03 1338・1424・1442・1446・1449・1454	—	9.2	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒　A	糸切り　板状圧痕
	49	土師器	椀	SD03 1385・1376・1405・1417・埋土一括	—	7.4～7.8	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	50	土師器	坏	SD03 1322・1369・1391	—	9.6	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	51	土師器	坏	SD03 1285・一括	—	7.6	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤色粒　A＋B（マーブル）	ヘラ切り　反転復元
	52	土師器	坏？	SD03 1278	—	11.0	—	ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細黒色粒　A	底部ナデ
	53	土師器	坏	SD03 1093	—	9.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	微細黒色・赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	54	土師器	坏	SD03 1408	—	8.0	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色・赤色粒　A＋B	ヘラ切り　反転復元
	55	土師器	小皿	SD03 1488	8.8	7.2	1.5	ナデ	ナデ	浅橙	浅黄橙	2mm以下の赤色粒　A-Bマーブル	ヘラ切り
	56	土師器	小皿	SD03 1503	8.8	6.6	1.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り→ナデ
	57	土師器	小皿	SD03 1496	9.0	7.0	1.6～1.2	ナデ	ナデ	浅橙	浅黄橙	1mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕
	58	土師器	小皿	SD03 1487	9.0	6.3	1.5	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	59	土師器	小皿	SD03 1387・1493	8.2	6.2	1.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な白色粒　A-B	ヘラ切り→ナデ
	60	土師器	小皿	SD03 1467・1496・1497	8.4	6.4	1.3	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕
	61	土師器	小皿	SD03 1165	8.8	7.0	1.3～1.3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒　A-Bマーブル	ヘラ切り　板状圧痕
	62	土師器	小皿	SD03 1485	8.8	6.8	1.6～1.3	ナデ	ナデ	灰褐	褐灰	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	63	土師器	小皿	SD03 1545	8.6	6.4	1.3～1.2	ナデ	ナデ	浅橙	浅橙	微細な黒色・白色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕
	64	土師器	小皿	SD03 1548	8.6～8.2	7.0	1.3～1.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り
	65	土師器	小皿	SD03 1529	8.8	6.4	1.3～1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り
	66	土師器	小皿	SD03 1499・1547	8.0	6.2	1.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・茶色粒　A	ヘラ切り
	67	土師器	小皿	SD03 1067・1383・土坑一括 SK02一括	8.3	6.5	1.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	68	土師器	小皿	SD03 1400・1432・1448	8.4	6.8	1.5～1.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な白色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕

第2表　永田藤束遺跡出土遺物観察表②

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・間伐・取上番号	法量 (cm) 口径	底径	器高	文様・調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
15	69	土師器	小皿	SD03 一括 1519	8.3	6.1	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	3mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	70	土師器	小皿	SD03 1395・1398・1305	7.8	6.0	1.4～1.5	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰白	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	71	土師器	小皿	SD03 1363・1408・1358	8.5	6.4	1.5～1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	72	土師器	小皿	SD03 1411	8.8	6.6	1.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	73	土師器	小皿	SD03 1327	8.2	6.0	1.5	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	74	土師器	小皿	SD03 1339・1363・1377	8.0	5.8	1.0	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	75	土師器	小皿	SD03 1341・1409・一括	8.4	6.6	1.3	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	76	土師器	小皿	SD03 1553	8.0	6.6	1.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	77	土師器	小皿	SD03 テラス一括	8.2	6.4	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	1mm以下の黒色・茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	78	土師器	小皿	SD03 1550	9.1	7.0	1.6	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙	1mm以下の茶色粒　A-B（底部）	ヘラ切り→ナデ　反転復元
	79	土師器	小皿	SD03 1558	9.2	7.4	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙→褐灰	褐灰	微細な白色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	80	土師器	小皿	SD03 1534・一括	8.8	6.6	1.2	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A-B	ヘラ切り→ナデ　反転復元
	81	土師器	小皿	SD03 1164・1188・1254	8.6	6.8～6.2	1.2～1.2	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り
	82	土師器	小皿	SD03 1440・一括	9.0	7.2	1.6～1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り→ナデ
	83	土師器	小皿	SD03 1352	7.8	6.0	1.7	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	84	土師器	小皿	SD03 1180	9.0	6.8	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	微細な白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	85	土師器	小皿	SD03 1140・1462・1493	8.2	6.4	1.2	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	1mm以下の赤色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	86	土師器	小皿	SD03 1519・1520・一括	8.6	6.6	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色・茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	87	土師器	小皿	SD03 1560	8.4	6.6	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色・茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	88	土師器	小皿	SD03 1333・一括	8.6	6.6	1.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色・茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	89	土師器	小皿	SD03 埋土一括	8.4	6.0	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡橙	2mm以下の茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	90	土師器	小皿	SD03 1381・埋土一括	8.6	6.4	1.2	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　B	ヘラ切り　反転復元
	91	土師器	小皿	SD03 1486	8.8	6.8	0.9	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	微細な白色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	92	土師器	小皿	SD03 1026	7.6	6.0	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	93	土師器	小皿	SD03 1507	8.2	6.6	1.1	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	微細な白色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	94	土師器	小皿	SD03 1404	8.0	6.4	1.5	ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	95	土師器	小皿	SD03 1475	9.0	7.0	1.3	ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細な茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	96	土師器	小皿	SD03 1169	8.8	6.6	1.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な白色・茶色粒　B	ヘラ切り　反転復元
	97	土師器	小皿	SD03 1301	8.8	6.4	1.3	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙	微細な黒色・茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	98	土師器	小皿	SD03 埋土一括	8.0	6.4	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	99	土師器	小皿	SD03 1395・一括	8.0	7.0	1.2	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	100	土師器	小皿	SD03 1522	8.6	6.4	1.7	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	101	土師器	小皿	SD03 1021	8.4	6.4	1.2	ナデ	ナデ	灰白	淡黄橙	微細な白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	102	土師器	小皿	SD03 1197	7.8	6.4	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な白色・茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	103	土師器	小皿	SD03 1546	9.0	7.4	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	微細な茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	104	土師器	小皿	SD03 1490	9.2	7.0	1.3	ナデ	ナデ	灰白	灰白	1mm以下の茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	105	土師器	小皿	SD03 1347	8.0	6.0	1.5	ナデ	ナデ	灰白	淡黄橙	1mm以下の茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	106	土師器	小皿	SD03 1084	8.2	6.6	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	107	土師器	小皿	SD03 1523	8.5	6.6	1.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な茶色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	108	土師器	小皿	SD03 1371	8.2	6.6	1.4	ナデ	ナデ	灰白	灰白	1mm以下の茶色粒　A-Bマーブル	ヘラ切り　反転復元
	109	土師器	小皿	SD03 1384	9.4	7.2	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細黒色・赤色粒	ヘラ切り　反転復元
	110	土師器	小皿	SD03 1386・1466	8.0	6.0	1.5	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細赤色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	111	土師器	小皿	SD03 1495	8.2	6.2	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰白	1mm以下の茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	112	土師器	小皿	SD03 埋土一括	7.6	5.6	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な白色・茶色粒　A-Bマーブル	ヘラ切り　反転復元
	113	土師器	坏	SD03 埋土一括	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰褐	1mm以下の茶色粒　A-Bマーブル	外面剥離あり
	114	土師器	小皿?	SD03 埋土一括	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白	灰白	1mm以下の茶色粒　C	内面剥災？あり
	115	布痕土器	饂飩巻	SD03 一括	—	—	—	刷毛	布痕	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の茶色粒	
16	116	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD03 1280・1281・1515・1532	16.7	6.5	5.5	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白～黒	灰白～黒	精緻	
	117	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD03 1508	—	7.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な黒色・白色粒	
	118	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD03 1324	—	7.4ヲ	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	119	土師器（ミガキ椀）	高台付椀	SD03 1029	16.0	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	淡黄橙	淡黄橙	微細な茶色粒	反転復元
	120	土師器（黒色土器B）	高台付椀	SD03 1173・1188～一括	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	121	土師器（黒色土器A）	高台付椀	SD03 1525	—	7.0	—	摩耗	摩耗	淡黄橙	黒	微細な茶色粒	反転復元
17	122	白磁	椀	SD03 1201	14.8	—	—	施釉	施釉	灰黄	灰黄	微細黒色粒	反転復元　貫入有　椀II類
	123	白磁	椀	SD03 1096	14.4	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀IV類
	124	白磁	椀か	SD03 1318	—	—	—	施釉	施釉	淡黄	淡黄	微細黒色粒	
	125	白磁	椀	SD03 1138	—	6.0	—	施釉・露胎	施釉・露胎	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀V類か
	126	白磁	皿	SD03 南遺構内	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	口縁部
	127	国産陶器	壺	SD03 南遺構内	—	—	—	平行タタキ（横間に条なし）	カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色・茶色砂粒	新宮色調サンドイッチ状
	128	国産陶器	壺	SD03 1330	—	—	—	平行タタキ（横間に条なし）	カキメ	褐灰	褐灰	1mm程の黒色・白色砂粒	新宮色調サンドイッチ状
	129	国産陶器	壺	SD03 南遺構内・南風 3層一括	—	—	—	平行タタキ→カキメ	カキメ	褐灰	褐灰	1mm程の黒色・白色砂粒	新宮色調サンドイッチ状
17	147	白磁	椀	SD04 1267	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀IV類
	148	白磁	皿か	SD04 1102	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	
20	149	白磁	皿	SD04 1010・C-3 溝 333	11.4	—	—	施釉・露胎	施釉・露胎	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　14C後半？
	153	土師器	坏	SD05 1087	15.2	—	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の赤色粒　A	反転復元
	154	土師器	小皿	SD05 1058	8.8	6.6	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色・白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
21	155	須恵器	盌	SE01 1237	9.2	—	—	ナデ	ナデ	黄灰～黒味（自然釉）	灰白	微細な白色粒	新宮色調サンドイッチ状
	156	土師器（黒色土器A）	高台付椀	SE01 1126	—	7.3	—	ナデ→ミガキ（横刷）	ナデ→ミガキ（横刷）	灰白	黒	1mm以下の白色粒	

第3表　永田藤束遺跡出土遺物観察表③

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位・取上番号	法量（cm）			文様・調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	最高	外面	内面	外面	内面		
21	158	国産陶器	壺	SE01　1119	—	—	—	平行タタキ→カキメ	ナデ・オサエ→カキメ	灰白～暗灰（自然釉）	灰白～暗灰	2mm程の黒色・茶色砂粒	新須恵器サンドイッチ状
22	160	白磁	椀	SF02　1279	16.4	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀V-2ｂ類
24	161	土師器	小皿	P15　1209	9.2	6.5	1.1	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	162	土師器	小皿	P20　1017	9.1	6.8	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙～黄橙	淡黄橙	茶色粒	ヘラ切り　板状圧痕
	163	白磁	椀	P56　1320	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細な黒色粒	白磁断片
	165	土師器	小皿	P76　1256	9.7	8.0	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	166	土師器	坏	P76　1257	—	—	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の茶色粒　A-B	ヘラ切りか
	167	土師器（黒色土器A）	高台付椀	P76　1258	—	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白	黒褐	微細な白色粒	
25	168	土師器	坏	D-2　3層　713・754・一括	17.0	6.8	3.5	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	169	土師器	坏	D-3　3層一括	15.8	8.6	3.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	170	土師器	坏	C-4　3層　1128	15.0	7.2	3.0	ナデ	ナデ（刷毛）	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	171	土師器	坏	B-2　3層　406・一括	16.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙～黒褐	黒褐	微細な黒色粒　A	反転復元　内面墨書か
	172	土師器	坏	D-3　3層　1061	—	9.0	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	173	土師器	坏	B-3　3層　639・640・一括　3層一括	—	7.0	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	2mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	174	土師器	坏	D-3　3層一括	—	9.0	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	175	土師器	坏	D-3　3層一括	—	7.3	—	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい褐	2mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　板状圧痕
	176	土師器	坏	D-3　3層　1002	—	8.2	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕
	177	土師器	坏	B-2　3層　279	—	10.0	—	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	178	土師器	坏	B-2　3層　789	—	7.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	179	土師器	坏	B-2　3層　265	—	7.4	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	微細赤色粒　A+B	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	180	土師器	坏	C-2　3層　729	—	7.4	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	181	土師器	坏	C-3　3層　613	—	7.6	—	ナデ	ナデ	褐灰	灰褐	微細白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	182	土師器	坏	D-3　3層一括	—	8.6	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰褐	2mm以下の赤色粒　B	糸切り　反転復元
	183	土師器	坏	C-3　3層　644	—	9.0	—	ナデ	ナデ	灰褐	にぶい褐	1mm以下の黒色・赤色粒　A+B（マーブル）	ヘラ切り　反転復元
	184	土師器	坏	D-3　3層　323	—	9.0	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り→ナデ　反転復元
	185	土師器	坏	D-3　3層　1004	—	9.6	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	微細白色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	186	土師器	坏	D-3　3層一括	—	7.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	187	土師器	坏	D-3　3層一括	—	10.0	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	188	土師器	坏	東　3層一括	—	9.8	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細白色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	189	土師器	坏	東　3層一括	—	9.8	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	190	土師器	坏	C-2　3層　665	—	6.4	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	微細白粒　A	糸切り　反転復元
26	191	土師器	小皿	D-3　3層　1000・一括	8.8	6.0	1.5	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	192	土師器	小皿	D-3　3層　13	8.6	6.6	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な茶色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	193	土師器	小皿	D-3　3層　892	10.0	7.6	1.9～1.2	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	194	土師器	小皿	C-2　3層　512・515	9.8	7.8	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元　反転復元
	195	土師器	小皿	D-3　3層　22	9.1	7.0	1.2	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な茶色粒　A	ヘラ切り→ナデ　反転復元
	196	土師器	小皿	B-2　3層　913	9.4	7.0	1.6	ナデ（摩耗）	ナデ（摩耗）	黄橙	黄橙	2mm以下の赤色粒　B？	ヘラ切り　反転復元
	197	土師器	小皿	D-3　3層　1000・一括	9.6	6.8	1.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	198	土師器	小皿	B-2　3層　402	9.6	7.1	1.6	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	微細な黒色粒　C	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	199	土師器	小皿	C-3　3層　631	10.2	6.8	1.1	ナデ（摩耗）	ナデ（摩耗）	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の赤色粒　B？	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	200	土師器	小皿	D-3　3層　1007	9.6	6.4	1.1	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	201	土師器	小皿	D-3　3層一括	9.6	6.7	1.3	ナデ	ナデ	灰黄褐	褐灰	微細な黒色粒　C	ヘラ切り　反転復元
	202	土師器	小皿	B-2　3層　245	9.0	6.2	1.0～1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色・茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	203	土師器	小皿	D-3　3層　19	10.0	7.4	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り→ナデ　反転復元
	204	土師器	小皿	D-3　3層　994	9.8	7.2	1.2	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	205	土師器	小皿	C-2　3層　706	8.0	5.6	1.7	ナデ	ナデ	淡黄橙	褐灰	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	206	土師器	小皿	D-4　3層　563	9.6	7.5	1.3	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	207	土師器	小皿	B-2　3層　280	9.6	7.2	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	208	土師器	小皿	D-3　3層　993	9.8	8.0	1.4	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色粒　A	糸切り　反転復元
	209	土師器	小皿	C-1　3層　104	9.6	5.0	2.1～1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色・茶色粒　A	ヘラ切り？　反転復元
	210	土師器	小皿	D-3　3層　882	9.4	7.4	1.1	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	211	土師器	小皿	D-3　3層　997	9.6	7.9	1.2	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　板状圧痕　反転復元
	212	土師器	小皿	D-3　3層　995	9.6	7.4	1.5	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	微細な黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	213	土師器	小皿	D-3　3層一括	9.6	7.4	1.3	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・茶色粒　A-B	ヘラ切り　反転復元
	214	土師器	小皿	D-3　3層一括	9.4	7.4	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	灰黄褐	1mm以下の黒色粒　A	糸切り　反転復元
	215	土師器	小皿	C-2　3層　45	9.0	6.6	1.4	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤色粒　A+B	ヘラ切り　反転復元
	216	土師器	小皿	D-3　3層一括	8.4	6.0	1.6	ナデ	ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2mm以下の赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	217	土師器	小皿	B-2　3層　762	—	6.2	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	218	土師器	小皿	C-2　3層　513	—	6.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	219	土師器	小皿	D-3　3層一括	—	6.4	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白色・赤色粒　A	ヘラ切り　反転復元
	220	土師器	小皿	C-2　3層　139	5.0	—	—	ナデ・オサエ→無調整	ナデ・オサエ	淡黄橙	淡黄橙	1mm以下の黒色粒　A	
27	221	土師器	壺	B-2　3層　420・797	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	にぶい橙	黒褐	2mm以下の白色・茶色・透明粒	
	222	土師器	壺	B-2　3層　793	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の黒色・白色粒	
	223	土師器	壺	B-3　3層　590	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	褐灰	にぶい黄橙	2mm以下の白色・透明粒	外面スス付着
	224	土師器	壺	C-2　3層　494	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色粒	
	225	土師器	壺	B-2　3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	にぶい橙	灰褐	1mm以下の黒色・白色粒	
	226	土師器	壺	B-2　3層　793・一括	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	褐灰	にぶい橙	3mm以下の白色粒	
	227	土師器	壺	B-1　3層　109	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の黒色・白色・茶色粒	全体的に摩耗

第4表　永田藤束遺跡出土遺物観察表④

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・原位・取上番号	法量 (cm) 口径	底径	最高	文様・調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
27	228	土師器	壺	9ア 3層 144 一括	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい橙	3mm以下の黒色・白色・茶色粒・金雲母	
	229	土師器	壺	C-2 3層 807	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の白色粒・金雲母	
	230	土師器	壺	B-1・5ア 3層一括 C-2 3層 49	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	灰褐	にぶい橙	1mm以下の白色粒	
	231	土師器	壺	C-2 3層 510	—	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	1mm以下の白色・透明粒	
	232	土師器	壺	C-2 3層 107	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・白色粒	
	233	土師器	壺	B-2 3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰	1mm以下の黒色・白色粒	スス付着
	234	土師器	壺	B-3 3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい橙	2mm以下の白色粒	
	235	土師器	壺	B-3 3層 19	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・白色粒	
	236	土師器	壺	B-3 3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の白色粒	
	237	土師器	壺	B-2 3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	灰褐	褐灰	1mm以下の白色粒	
	238	土師器	壺	C-2 3層 490	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の黒色・白色・茶色粒	
	239	土師器	壺	B-2 3層 175	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	2mm以下の黒色・茶色粒	
	240	土師器	壺	C-2 3層 458	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	2mm以下の黒色・白色粒	
	241	土師器	壺	C-2 3層 470	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	灰褐	にぶい橙	1mm以下の白色粒・茶色粒	
	242	土師器	壺	C-2 3層 39	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい赤褐	1mm以下の白色粒	
	243	土師器	壺	C-2 3層 520・622	—	—	—	ナデ	ナデ・ケズリ	褐灰	にぶい橙	3mm以下の黒色・白色・茶色粒	
28	244	土師器（ミガキ無）	高台付椀	B-2 3層 451	16.4	—	—	摩耗（ミガキか）	摩耗（ミガキか）	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒	反転復元　玉縁白磁模倣か
	245	土師器（ミガキ無）	高台付椀	B-1 3層 108	16.6	—	—	摩耗（ミガキか）	摩耗（ミガキか）	浅黄橙	褐灰	1mm以下の黒色・茶色粒	反転復元　玉縁白磁模倣か
	246	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 708	—	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒	玉縁白磁模倣か
	247	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 469	17.6	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の茶色粒	反転復元
	248	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 710・733	17.2	—	—	ナデ→ミガキ（横刷）	ナデ→ミガキ（横刷）	浅黄橙	浅黄橙	微細な茶色粒	反転復元
	249	土師器（ミガキ無）	高台付椀	B-3 3層 825	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・茶色粒	反転復元　玉縁白磁模倣か
	250	土師器（ミガキ無）	高台付椀	B-3 3層 988	18.0	—	—	ナデ→粗いミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色粒	反転復元
	251	土師器（ミガキ無）	高台付椀	D-3 3層 549	17.0	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白	浅黄橙	微細な黒色・茶色粒	反転復元
	252	土師器（ミガキ無か）	高台付椀	D-3 3層 893	—	6.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白	褐灰	微細な黒色・白色粒	反転復元　高台内面に線刻あり
	253	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 97	—	6.6	—	摩耗（ナデか）	摩耗（ミガキか）	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・白色粒	反転復元
	254	土師器（ミガキ無）	高台付椀	D-3 3層 32	—	6.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色粒	反転復元
	255	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 447	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白	浅黄橙	微細な黒色粒	反転復元
	256	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-3 3層 630	—	6.4	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	褐灰	微細な黒色・白色粒	反転復元
	257	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 154・449	—	7.0	—	摩耗（ミガキか）	摩耗（ミガキか）	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の茶色粒	反転復元
	258	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 92	—	6.8	—	摩耗（ナデ）	摩耗（ミガキか）	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色粒	反転復元
	259	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 492	—	7.4	—	摩耗（ナデ）	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色粒	反転復元
	260	土師器（ミガキ無）	高台付椀	D-3 3層一括	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色粒	反転復元
	261	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-2 3層 137	—	8.0	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm以下の白色・赤色粒	反転復元
	262	土師器（ミガキ無）	高台付椀	C-4 3層 302	—	6.6	—	ナデ	ナデ→ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な白粒	反転復元
	263	土師器	高台付椀	C-3 3層 318	—	7.2	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒	反転復元
	264	土師器	高台付椀	C-2 3層 512	—	4.6	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細黒色粒	反転復元
	265	土師器	高台付椀	C-2 3層一括	—	4.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色・赤色粒	反転復元
	266	土師器（黒色土器A）	高台付椀	B-2 3層 278	15.4	—	—	ナデ→ミガキ（横刷）	ナデ→ミガキ	橙→灰	黒	1mm以下の黒色・茶色粒	反転復元
	267	土師器（黒色土器A）	高台付椀	B-3 3層 648	15.4	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	1mm以下の黒色粒	反転復元
	268	土師器（黒色土器A）	高台付椀	C-3 3層 969	16.0	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	微細な黒色粒	反転復元
	269	土師器（黒色土器A）	高台付椀	C-2 3層 148	16.2	—	—	ナデ→粗いミガキ	ナデ→ミガキ	橙	褐灰	1mm以下の茶色粒	反転復元　玉縁白磁模倣か
	270	土師器（黒色土器A）	高台付椀	D-3 3層 1	—	7.0	—	ナデ→ミガキ（横刷）	ナデ→ミガキ（横刷）	浅黄橙	黒	1mm以下の白色・茶色粒	反転復元
	271	土師器（黒色土器A）	高台付椀	D-3 3層 527	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	褐灰→浅黄橙	黒	微細な白色粒	反転復元
	272	土師器（黒色土器A）	高台付椀	B-2 3層 405	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	微細な白色粒	反転復元
	273	土師器（黒色土器A）	高台付椀	B-2 3層 452	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	微細な黒色粒	反転復元
	274	土師器（黒色土器A）	高台付椀	B-3 3層 784	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	1mm以下の黒色粒	反転復元
	275	土師器（黒色土器A）	高台付椀	C-2 3層 511	—	6.4	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰黄褐	黒	微細な白粒	反転復元
	276	土師器（黒色土器A）	高台付椀	東　3層一括	—	6.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	微細な白粒	反転復元
	277	土師器（黒色土器A）	高台付椀	D-3 3層一括	—	7.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙	黒	微細な黒色・白色粒	反転復元
	278	土師器（黒色土器B）	高台付椀	E-6 3層 1015	15.8	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	浅黄橙→黒	浅黄橙→黒	1mm以下の白色砂粒	反転復元　炭素の吸着剤
	279	土師器（黒色土器B）	高台付椀	D-3 3層 295	16.4	—	—	ナデ→丁寧なミガキ	ナデ→丁寧なミガキ	浅黄橙→黒	浅黄橙→黒	微細な白色粒	反転復元
	280	土師器（黒色土器B）	高台付椀	D-3 3層 1003・一括	—	6.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	281	土師器（黒色土器B）	高台付椀	C-2 3層 63	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	282	土師器（黒色土器B）	高台付椀	B-6 3層 923	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	283	土師器（黒色土器B）	高台付椀	E-5 3層 962	—	7.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白→褐灰	黒	微細な白色砂粒	反転復元　黒色土器か？
	284	土師器（黒色土器B）	高台付椀	D-3 3層一括	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	285	土師器（黒色土器B）	高台付椀	B-2 3層 867	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	褐灰	黒	微細な白色粒	反転復元
	286	土師器（黒色土器B）	高台付椀	C-3 3層一括	—	7.0	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	287	土師器（黒色土器B）	高台付椀	C-2 3層 48	—	7.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	288	土師器（黒色土器B）	高台付椀	C-3 3層一括	—	6.8	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	褐灰→黒	褐灰→黒	微細な白色粒	反転復元
	289	土師器（黒色土器B）	高台付椀	B-1 3層 907	—	7.4	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	黒	黒	微細な白色粒	反転復元
	290	土師器（黒色土器B）	高台付椀	B-2 3層 267	—	7.6	—	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	褐灰	黒	微細な白色粒	反転復元
29	291	土師質須恵器	坏	C-3 3層 544	—	6.0	—	ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色・白色粒	
	292	須恵器	壺	B-2 3層 745	—	—	—	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	精緻	
	293	須恵器	壺	B-2 3層 766	—	—	—	格子目タタキ	平行タタキ→ナデ	灰白	灰白	1mm以下の黒色・茶色粒	焼成不良
	294	須恵器	壺？	C-2 3層 368	—	—	—	ナデ	平行タタキ	褐灰	褐灰	1mm以下の黒色粒	
	295	土師質須恵器	壺	D-4 3層 896	—	—	—	平行タタキ	同心円当て具痕	灰褐	橙	1mm以下の黒色・白色粒	焼成不良

第5表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑤

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位・取上番号	法量（cm）			文様・調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
29	296	須恵器	盌？	B-2　3層　261	—	—	—	ナデ・ケズリ	ナデ	黄灰	黄灰	2mm以下の白色・黒色粒	
	297	須恵器	盌	C-4　3層　592	—	—	—	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	1mm以下の黒色粒	
	298	須恵器	坏	C-2　3層　196	—	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	1mm以下の黒色・白色粒	
	299	白磁	椀	C-2　3層　364・694	—	—	—	施釉	施釉	灰黄	灰黄	微細黒色粒	貫入有　椀Ⅱ類
	300	白磁	椀	D-3　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　椀Ⅱ類
	301	白磁	椀	C-2　3層　147	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅱ類
	302	白磁	椀	北西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　椀Ⅱ類
	303	白磁	椀	北西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　椀Ⅱ類
	304	白磁	椀	B-2　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　椀Ⅱ類
	305	白磁	椀	北中　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　椀Ⅱ類
	306	白磁	椀	B-3　3層　375	16.4	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	307	白磁	椀	B-2　3層　241	15.2	—	—	施釉	施釉	灰黄	灰黄	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	308	白磁	椀	B-2　3層　290	14.6	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	309	白磁	椀	C-3　3層　622	15.4	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	310	白磁	椀	B-3　3層　642	15.6	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	311	白磁	椀	C-3　3層　620	13.0	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	312	白磁	椀	東　3層一括	16.0	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	反転復元　椀Ⅳ類
	313	白磁	椀	D-3　3層　1103	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	椀Ⅳ類
	314	白磁	椀	C-2　3層　436	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	315	白磁	椀	重機一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	椀Ⅳ類
	316	白磁	椀	北中　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	317	白磁	椀	C-3　3層　539	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	318	白磁	椀	C-2　3層　37	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	319	白磁	椀	C-3　3層　623	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	320	白磁	椀	C-2　3層　730	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	321	白磁	椀	C-3　3層　838	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	322	白磁	椀	B-3　3層　350	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	椀Ⅳ類
	323	白磁	椀	C-2　3層　808	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	324	白磁	椀	C-2　3層　694	—	—	—	施釉	施釉	灰黄	灰黄	微細黒色粒	貫入有　椀Ⅳ類
	325	白磁	椀	C-3　3層　354	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	326	白磁	椀	C-3　3層　575	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	327	白磁	椀	C-2　3層　689	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	328	白磁	椀	B-2　3層　379	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	329	白磁	椀	C-4　3層　572	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	椀Ⅳ類
	330	白磁	椀	重機一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	貫入有　椀Ⅳ類
30	331	白磁	椀	B-3　3層　786	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	332	白磁	椀	B-5　3層　936	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅳ類
	333	白磁	椀	B-5　3層　932	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	椀Ⅳ類か
	334	白磁	椀	B-5　3層　961	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	
	335	白磁	椀	B-3　3層　636	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	
	336	白磁	椀	C-2　3層　719	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅴ類か
	337	白磁	椀	C-2　3層　220	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅴ類か
	338	白磁	椀	B-3　3層一括	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	椀Ⅱ類か
	339	白磁	椀	B-2　3層　170 南西　3層一括	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　貫入有　椀Ⅱ類か
	340	白磁	椀	C-2　3層　363	—	6.5	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	341	白磁	椀	南西　3層一括	—	6.1	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	342	白磁	椀	C-3　3層　322	—	6.0	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	343	白磁	椀	C-3　3層　357	—	6.4	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　椀Ⅳ類
	344	白磁	椀	南西　3層一括	—	6.0	—	露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	反転復元　椀Ⅴ類
	345	白磁	皿	D-6　3層　1544	10.0	3.6	2.5	施釉・露胎	施釉	灰黄	灰黄	微細黒色粒	反転復元　高環類
	346	白磁	皿	B-2　3層　242	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	皿Ⅴ類か
	347	白磁	皿	C-4　3層　604 重機一括	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	皿Ⅴ類か
	348	白磁	皿	C-2　3層　96	—	—	—	施釉	施釉	淡黄	淡黄	微細黒色粒	皿Ⅴ類か
	349	白磁	皿	重機一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	貫入有　皿Ⅵ類か高環
	350	白磁	皿	B-2　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	淡黄	淡黄	微細黒色砂粒	皿Ⅵ類か　皿Ⅵ類か高環
	351	白磁	皿	C-2　3層　88	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	皿Ⅵ類か高環
	352	白磁	皿	D-5　3層　942	—	—	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	皿Ⅵ類
	353	白磁	皿	北西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	皿Ⅵ類か高環
	354	白磁	皿	B-2　3層　788	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	皿Ⅵ類か高環
	355	白磁	皿	C-3　3層　1129	—	—	—	摩耗	施釉	淡黄	淡黄	微細黒色粒	皿Ⅵ類か高環
	356	白磁	皿	C-3　3層　1130	—	—	—	施釉	施釉	淡黄	淡黄	微細黒色粒	貫入有　皿Ⅵ類か高環
	357	白磁	皿	C-2　3層　143	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	皿Ⅵ類か高環
	358	白磁	皿	C-3　3層　621	—	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	外面縦面文か　皿Ⅴ類か
	359	白磁	皿	D-1　3層　908 C-2　3層　146	10.2	3.5	2.5	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　皿Ⅵ類
	360	白磁	皿	C-2　3層　123 北中　3層一括	—	4.2	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　皿Ⅵ類
	361	白磁	皿	B-2　3層　382	—	3.6	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	反転復元　皿Ⅵ類
	362	白磁	皿	D-3　3層　28	—	—	—	施釉・露胎	施釉	淡黄	淡黄	精良	皿Ⅵ類か
	363	白磁	皿	D-3　3層　996	—	3.6	—	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	反転復元　皿Ⅵ類

第6表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑥

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位・取上番号	法量（cm）			文様・調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	最高	外面	内面	外面	内面		
30	364	白磁	皿	北西　3層一底	—	—	—	施釉・露胎	施釉	淺黄	淺黄	微細黒色砂粒	高台型
	365	白磁	皿	C-4　3層　309	—	4.6	—	露胎	施釉	灰白	灰白	微細黒色砂粒	高２型
	366	青磁	椀	重機一括	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色砂粒	椀Ⅰ-2類
	367	青白磁	合子身	C-3　3層　332	—	3.2	—	施釉・露胎	施釉	明オリーブ灰	灰白	微細黒色粒	
	368	青白磁	水滴	D-4　3層　567	(9.4)	4.0	1.7	施釉・露胎	施釉・露胎	灰白	灰白	微細黒色粒	小穴2箇所
	369	白磁	皿	B-2　3層一底 C-2　3層　261	—	—	—	施釉・露胎	露胎	灰白	灰白	微細黒色粒	
31	370	中国陶器	天目茶椀	南西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	黒褐	黒褐	微細白色粒	
	371	中国陶器か	壺	C-2　3層　56	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	
	372	中国陶器か	壺	C-2　3層　85	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	
	373	中国陶器か	茶壺	C-2　3層　79	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色・茶色粒	耳有
	374	中国陶器	茶壺	C-2　3層　444	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	全体的に摩耗
	375	中国陶器	壺	C-1　3層　410-一括	—	—	—	施釉	施釉	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色粒	
	376	国産陶器	甕	B-2　3層　268	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰一浅黄橙	褐灰	2mm程の黒色・茶色粒	
	377	国産陶器	甕	重機一括	—	—	—	ナデ・カキメ	ナデ・カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色粒	
	378	常滑焼	甕	B-2　3層　258	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐一 灰オリーブ（粗）	褐灰	1mm以下の黒色・白色粒	
	379	国産陶器	甕	C-2　3層　167	—	—	—	カキメ→ナデ	ナデ・カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	380	国産陶器	甕	B-2　3層　209 C-2　3層一括	—	—	—	平行タタキ・カキメ	カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	381	国産陶器	甕	C-3　3層　369	—	—	—	平行タタキ・カキメ	カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	382	国産陶器	甕	B-2　3層　269	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ・オサエ・カキメ	褐灰	褐灰	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	383	国産陶器	甕	B-2　3層　385	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ・オサエ・カキメ	褐灰（自然釉）	褐灰	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	
	384	国産陶器	甕	D-3　3層　999	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ・オサエ・カキメ	黒褐（自然釉）	褐灰	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	385	国産陶器	甕	C-2　3層　101 北西　3層一括	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ一カキメ	褐灰（自然釉）	褐灰	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	
	386	国産陶器	甕	C-2　3層　170	—	—	—	カキメ	ナデ・オサエ	褐灰一 黒褐（自然釉）	褐灰	1mm程の黒色・茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	387	国産陶器	甕	D-3　3層　1009	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ・オサエ・カキメ	褐灰	褐灰	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	388	国産陶器	甕	南西　3層一括	—	—	—	平行タタキ	カキメ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色・茶色粒	断面色調サンドイッチ状
	389	国産陶器	甕	B-2　3層　271	—	—	—	平行タタキ・カキメ	ナデ・オサエ・カキメ	褐灰一 黒褐（自然釉）	褐灰	1mm程の茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
	390	国産陶器	甕	C-2　3層　122 西・北西　3層一括	—	—	—	平行タタキ	ナデ・オサエ	褐灰	灰黄褐	2mm程の黒色・白色・茶色砂粒	断面色調サンドイッチ状
32	391	実様系須恵器	甕	重機一括	25.0	—	—	ナデ・横刷毛タタキ	ナデ	灰	灰	1mm以下の白色粒	反転復元　断面色調マーブル状
	392	実様系須恵器	甕	B-2　3層　763	—	—	—	ナデ	ナデ	灰	黄灰	微細な白色粒	断面色調マーブル状
	393	実様系須恵器	甕	C-2　3層一括	—	—	—	ナデ	ナデ	灰	黄灰	微細な白色粒	断面色調マーブル状
	394	実様系須恵器	甕	B-1　3層　905	—	—	—	ナデ・横刷毛タタキ	ナデ	灰	灰	1mm以下の白色粒	反転復元
	395	実様系須恵器	甕	C-4　3層　901-903	—	—	—	綾杉状タタキ	丁寧なナデ	灰	灰黄	1mm以下の黒色・白色粒	
	396	実様系須恵器	甕	C-2　3層　519	—	—	—	綾杉状タタキ	丁寧なナデ	暗灰	灰	1mm以下の白色粒	
	397	実様系須恵器	甕	B-1　3層　111	—	—	—	綾杉状タタキ	丁寧なナデ	灰	灰	1mm以下の白色粒	
	398	実様系須恵器	甕	C-4　3層　1540	—	—	—	綾杉状タタキ	丁寧なナデ	黄灰	灰黄	1mm以下の黒色・茶色粒	
	399	実様系須恵器	内口鉢	C-1　3層　410-410-166	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	3mm以下の黒色・白色砂粒	
33	400	布張土器	徳塩器	C-3　3層　618	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	明赤褐	明赤褐	5mm以下の黒色・白色・透明粒	全体的に摩耗
	401	布張土器	徳塩器	C-2　3層一括	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	褐灰	にぶい橙	1mm以下の黒色・白色・茶色粒	
	402	布張土器	徳塩器	南西　3層一括	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	にぶい赤褐	橙	2mm以下の黒色・白色・透明粒	
	403	布張土器	徳塩器	C-2　3層一括	—	—	—	ナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい橙	1mm以下の白色粒	
	404	布張土器	徳塩器	北西　3層一括	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	灰褐	にぶい褐	1mm以下の白色粒	
	405	布張土器	徳塩器	C-1　3層一括	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白色粒	
	406	布張土器	徳塩器	C-3　3層一括	—	—	—	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色・白色・茶色粒	
	407	布張土器	徳塩器	C-3　3層一括	—	—	—	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白色・茶色	
	408	布張土器	徳塩器	C-2　3層一括	—	—	—	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白色粒	
	409	布張土器	徳塩器	C-2　3層一括	—	—	—	ナデ・オサエ	布痕	にぶい橙	橙	2mm以下の白色粒	
	410	布張土器	徳塩器	C-3　3層一括	—	—	—	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白色・茶色粒	
36	474	青磁	椀	SD06　1019	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	
37	476	国産陶器	鉢	南西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	黒褐	黒褐	1mm以下の白色砂粒	擂摩痕
	477	国産陶器	鉢	南西　3層一括	—	—	—	施釉	施釉	黒褐	褐	1mm以下の白色砂粒	擂摩痕
	478	染付	椀	南西　3層一括	10.0	—	—	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	
	479	染付	皿	重機一括	13.4	8.8	3.8	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黒色粒	肥前系

土師器坏・小皿の胎土

胎土A　胎土が浅黄橙色系を呈するもの
胎土B　胎土が橙色系を呈し、赤褐色鉱物を多く含むもの
胎土C　胎土が灰色系を呈するもの

第7表　永田藤東遺跡出土遺物観察表⑦

図版番号	遺物番号	種別・器種	出土遺構・地点・層位・取上番号	法量（cm） 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土・石材	備考
17	120	凍石製品	C0C3 1188	9.4	2.4	1.8	82.0	凍石	穿孔有
	121	凍石製品	C0C3 東遺構内	2.8	2.6	1.1	14.0	凍石	石版口縁部の転用品
	122	紡石	C0C3 1361	(9.9)	(5.5)	(4.0)	(444.0)	砂岩	
	123	錐製石	C0C3 1515	5.2	4.6	3.4	86.5	砂岩	
	124	鉄釘	C0C3 1543	(6.5)	1.7	(0.9)	(29.0)	—	
	125	鉄釘	C0C3一括	(4.1)	(0.7)	(0.5)	(5.0)	—	
	126	輪羽口	C0C3 1288	(7.7)	(5.8)	(3.3)	(122.0)	1mm以下の白色砂・雲母来	
	127	粘土塊	C0C3 1033	7.1	7.0	5.1	100.0	雲母来・茶色砂粒	
	128	粘土塊	C0C3 1036	6.7	7.0	4.2	98.0	雲母来・茶色砂粒	
	129	粘土塊	C0C3 1092	3.4	4.1	1.2	12.0	雲母来・茶色砂粒	
	140	粘土塊	C0C3 1198	4.6	4.0	1.6	23.0	雲母来	
	141	粘土塊	C0C3 1528	3.1	5.3	1.6	15.0	雲母来・茶色砂粒	
	142	粘土塊	C0C3 1216	5.8	6.0	2.0	47.0	小石・白色砂粒	
	143	粘土塊	C0C3 1289	5.8	4.8	1.6	30.0	雲母来・茶色砂粒	
	144	粘土塊	C0C3 1092	5.6	4.1	1.8	23.0	雲母来・茶色砂粒	
	145	粘土塊	C0C3 1453	4.0	4.1	3.0	20.0	雲母来	
	146	粘土塊	C0C3 1035	2.8	4.1	2.0	15.0	雲母来・茶色砂粒	
20	150	鉄滓	C0C4 1281	5.6	3.6	2.1	51.0	—	砂付着　磁石反応なし
	151	鉄滓	C0C4 1164	3.3	2.8	1.5	18.0	—	磁石反応なし
	152	鉄滓	C0C4 1292	2.0	2.5	1.4	8.0	—	磁石反応なし
21	153	紡石	D0D1 1154	(17.0)	11.9	4.8	(1200.0)	砂岩	研付痕
22	159	銭貨	EF01 581	—	—	—	—	—	大観通寶　5枚混巻
24	164	鉄滓	F0J0 1241	3.8	3.0	2.3	38.0	—	磁石反応なし
33	411	凍石製石鍋	C-0 3層 370	—	—	—	80.0	凍石	石版口縁部転用の可能性有
	412	凍石製石鍋	B-2 3層 265	—	—	—	49.0	凍石	石鍋転用の可能性有
	413	凍石製石鍋	B-2 3層 916	—	—	—	188.0	凍石	
	414	凍石製石鍋	B-5 3層 957	—	—	—	25.0	凍石	
	415	凍石製品	B-3 3層 771	4.0	2.7	1.5	24.0	凍石	石版口縁部の転用品
	416	凍石製品	E-6 3層 554	7.7	5.4	1.5	90.0	凍石	石版口縁部の転用品　2箇所に穿孔有
	417	凍石製品	C-2 3層 142	5.5	5.0	1.4	45.0	凍石	石版口縁部の転用品
	418	凍石製品	C-2 3層 100	3.6	5.3	1.6	34.0	凍石	石版口縁部の転用品
	419	凍石製品	C-5 3層一括	3.0	4.4	1.8	30.0	凍石	石版口縁部の転用品　穿孔有
	420	凍石製品	C-3 3層 313	2.6	4.7	1.4	24.0	凍石	石版口縁部の転用品　2箇所に穿孔有
	421	凍石製品	B-2 3層 121	(3.9)	3.5	0.7	15.0	凍石	2箇所に穿孔有　表面に線刻有
	422	凍石製品	B-2 3層 123	(2.9)	1.1	1.1	8.0	凍石	
	423	紡石	C-3 3層 653	(8.2)	(3.5)	(2.1)	(106.0)	砂岩	
	424	紡石	D-3 3層 296	(6.7)	(4.3)	(0.9)	(42.0)	砂岩	手持ちの紡石か
	425	紡石	C-2 3層 725	(10.5)	(8.5)	(3.4)	(304.0)	砂岩	
	426	紡石	B-2 3層一括	(8.6)	(8.7)	(3.2)	(274.0)	砂岩	
	427	錐製石	C-2 3層 699	(13.3)	(8.4)	(4.4)	(545.0)	砂岩	
	428	紡石	C-2 3層 722	(5.1)	(4.7)	(1.0)	(46.0)	砂岩	
	429	碁石	東東 3層一括	1.8	1.5	0.7	2.0	石英	白色
	430	碁石	B-2 3層 866	1.9	1.7	0.9	3.5	石英	白色
34	431	鉄鏃	C-3 3層 650	(7.7)	2.6	(0.4)	(19.0)	—	圭頭鏃
	432	鉄鏃	北西 3層一括	(4.4)	(3.3)	(0.4)	(14.0)	—	腐天鏃
	433	鉄鏃	B-2 3層 369	(4.4)	(1.1)	(0.5)	(8.0)	—	
	434	鉄鏃？	D-3 3層 887	(7.0)	(2.7)	(0.4)	(15.0)	—	
	435	刀子	C-2 3層 709	(4.3)	1.4	(0.4)	(5.0)	—	
	436	？	B-3 3層 637	(4.0)	(0.7)	(0.3)	(2.0)	—	
	437	鉄釘	C-2 3層 497	(5.5)	(1.0)	(0.4)	(5.0)	—	
	438	鉄釘	D-5 3層 940	6.8	1.3	0.5	6.0	—	
	439	鉄釘	B-3 3層 373	(3.8)	2.0	(0.9)	(16.0)	—	
	440	鉄釘	C-2 3層 817	(5.1)	(1.1)	(0.7)	(10.0)	—	
	441	鉄釘	B-3 3層 782	(4.5)	(0.7)	(0.5)	(4.0)	—	
	442	鉄釘	C-2 3層 812	(2.5)	(0.7)	(0.5)	(3.0)	—	
	443	鉄釘	C-3 3層一括	(2.6)	(1.0)	(0.4)	(2.0)	—	
	444	鉄釘	B-3 3層 948	(2.4)	(1.2)	(0.7)	(4.0)	—	
	445	鉄釘？	C-2 3層 721	(4.1)	(0.4)	(0.4)	(3.0)	—	
	446	鉄釘？	西 3層一括	(3.1)	(0.4)	(0.4)	(1.0)	—	
	447	鉄釘？	B-2 3層 742	(10.3)	(0.6)	(0.6)	(8.0)	—	
	448	鉄鎹	東西形　黄色土一括	—	—	—	(49.0)	—	内面使付痕
	449	鉄滓	C-2 3層 703	5.6	2.7	3.3	156.0	—	砂付着　磁石反応有（弱）
	450	鉄滓	D-3 3層一括	5.4	6.8	3.1	234.0	—	磁石反応有
	451	鉄滓	B-2 3層 251	4.6	6.5	3.5	118.0	—	磁石反応なし
	452	鉄滓	C-3 3層 358	6.0	6.7	1.8	86.0	—	磁石反応なし
	453	鉄滓	D-5 3層 943	5.1	6.8	2.3	66.0	—	磁石反応なし
	454	鉄滓	B-3 3層 849	4.5	4.7	3.0	96.0	—	磁石反応なし
	455	鉄滓	B-3 3層 846	3.5	5.1	3.0	58.0	—	磁石反応なし
	456	鉄滓	B-2 3層 400	4.7	5.7	2.2	60.0	—	磁石反応なし
	457	鉄滓	B-2 3層 235	3.9	4.4	2.5	67.0	—	磁石反応なし
	458	鉄滓	D-5 3層 945	3.5	6.8	2.4	71.0	—	磁石反応なし
	459	鉄滓	D-5 3層 941	5.7	5.4	2.8	88.0	—	磁石反応なし
	460	鉄滓	B-2 3層 737	3.3	3.8	2.3	49.0	—	磁石反応有
	461	鉄滓	B-2 3層 859	3.3	4.2	2.9	42.0	—	磁石反応なし
	462	鉄滓	C-4 3層 345	5.3	5.0	2.3	50.0	—	磁石反応なし
	463	鉄滓	D-5 3層 935	5.9	4.5	2.2	53.0	—	磁石反応なし　鞴羽来が混ざる
	464	鉄滓	B-3 3層 845	5.0	5.2	2.7	100.0	—	磁石反応有（弱）
	465	鉄滓	B-2 3層 229	4.7	4.4	3.5	94.0	—	磁石反応有
	466	鉄滓	C-3 3層 312	2.6	2.4	1.7	18.0	—	磁石反応なし
	467	鉄滓	C-3 3層 531	1.8	2.0	1.2	8.0	—	磁石反応なし
35	468	輪羽口	C-4 3層 570	(3.1)	(3.8)	(2.4)	(31.0)	1mm以下の白色粒	ガラス質触溶物付着
	469	輪羽口	D-5 3層一括	(3.3)	(2.5)	(1.8)	(13.0)	1mm以下の白色粒・雲母来	ガラス質触溶物付着
	470	輪羽口	C-4 3層 942	(2.6)	(3.3)	(2.5)	(38.0)	1mm以下の白色粒	ガラス質触溶物付着
	471	輪羽口	東 3層一括	(4.5)	(3.2)	(2.6)	(27.0)	1mm以下の白色粒	触溶物付着
	472	輪羽口	重複一括	(7.6)	(5.8)	(2.4)	(90.0)	2mm以下の白色・赤色粒	
	473	輪羽口	C-2 3層 977	(5.8)	(5.1)	(2.0)	(56.0)	1mm以下の白色粒	ガラス質触溶物付着
36	475	鉄滓	C0C6 1068	3.9	4.9	2.3	46.0	—	磁石反応なし

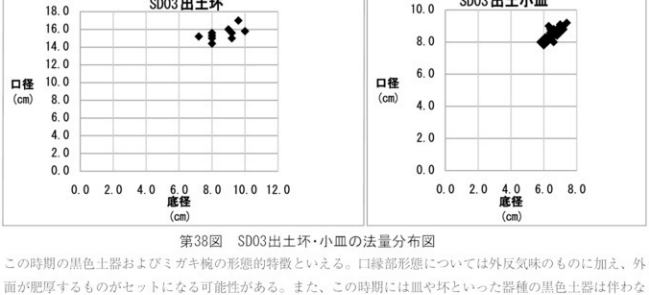
第４章　まとめ

第１節 平安時代末～中世の遺物について―SD03 出土遺物を中心に―

繰り返し述べてきたとおり、本遺跡における出土遺物の主要な時期は平安時代末から中世初頭（11 世紀後半から 12 世紀代）にかけてといえる。この年代観は主に分類・編年研究が進み、年代が明確になっている貿易陶磁器から導き出したものであり、具体的には大宰府分類の白磁椀Ⅱ類およびⅣ類が主体的に出土する時期に比定できる。それより古い時代の遺物はほぼ皆無といってよい。それ以後の時代の遺物についてはある程度出土しているが、平安時代末から中世初頭にかけての遺物に比べれば極めて限定的といえる。言い換えれば、本遺跡出土遺物の時期は 11 世紀後半から 12 世紀代の間にほぼ限定でき、それ故に出土遺物はこの時期の遺物編年の構築に際し、極めて重要な位置を占めるといえる。そのため、ここでは特に坏・小皿・高台付椀を中心とする土師器類に焦点を当て、都域南部地域における土器編年の確立に向けての基礎作業として、各器種の特徴と、器種間のセット関係の抽出を試みたい。

ここで注目したいのは SD03 から出土した資料である。遺構自体は深く掘られた井戸状部分からテラス状の段差を経て溝状部分に連結していくという形態を呈す。全体的な平面形態はオタマジャクシのような形態を呈しており、その機能については汚れた水を流すための排水溝を有す井戸跡である可能性が高いと推測したが、断定はできていない。このような特異な形態にも注意すべきであるが、この遺構のもう一つの特徴が土師器の坏や小皿を中心とする完形資料が多量に出土していることである。第 18 図の遺物出土状況をみると、井戸状部分、テラス部分、溝状部分と比較的万遍なく出土しているが、テラス部分が最も集中して出土した範囲といえそうである。出土位置については埋土の上位から中位にかけての出土が多く、底面からの出土はほぼ皆無である。これは溝状部分には底面に厚く粘土が貼り付けられていたことや、井戸状部分では底面まで完掘していないことに起因するものと理解できる。比較的離れたところで出土し、接合関係にある資料もあるが、多くが狭い範囲で接合するか、完形品など点的な出土をみせる。SD03 自体が建物跡のように日常的に土師器などの道具が存在していた空間とは異なることから、多くの遺物はこれらの道具を持ち込み、廃棄した結果残されたものと考えられる。遺物の出土範囲・位置を鑑みても単一回のみの廃棄とは考えられず、複数回の廃棄行為の累積によるものと理解できる。問題はこの廃棄行為の時間幅がどの程度のものであったかであろう。これについては、11 世紀後半から 12 世紀代の年代が付与できる大宰府編年の白磁椀Ⅱ類・Ⅳ類や椀Ⅴ類・皿Ⅷ類と考えられる資料が出土していることから、やはりこの時間幅の中で捉えることが可能であると考える。

次に、SD03 出土資料に型式学的なまとまりがみられるかどうかを検討したい。まず、土師器坏からみてみよう。器形的には底部から口縁部にかけて大きく直線的に開きながら立ち上がるという特徴をもつ。器形全体が分かる資料で、約半分以上が遺存する資料について、口径／底径から求めた形状比は平均で 1.8 という値が得られている。口径は 15cm 前後、底径は 8cm 前後と 9.5cm 前後にまとまる傾向がみられる。器高の平均は 3.4cm 程である。底部切り離しはヘラ切りである。これらの特徴を有す一群を一つの類型として抽出できそうである。次に土師器の小皿についてみてみよう。小皿は坏に比べると量的にまとまって出土している。器形的には口縁部形態等にヴァリエーションがみられるが、概ね底部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がるものと若干内湾気味のものが多いといえる。底部はヘラ切りによるもので、切り離し後に板状の台の上でナデつけて整形したためか、中央が窪んで薄くなり底部外面には板状圧痕を残すものが多い。法量をみると、口径が 8 ～ 9cm の間に、底径が 6 ～ 7cm の間にまとまるようである。平均値は口径 8.5cm、底径 6.5cm、器高が 1.4cm となる。小皿に関してもこれらの特徴をもつ類型を抽出できるものと考える。最後に黒色土器およびミガキを施す椀についてみてみたい。これらの土器については全体的な出土量が少ないため、土師器坏や小皿のような傾向を抽出するのは困難であるが、完形に復元できる 116 の資料をこの時期の標識的なものとして積極的に評価すれば、やや外に開く低い高台と丸みを帯びる体部から外反気味に立ち上がる口縁部をその特徴として挙げられよう。特に低い高台は包含層出土資料を含めても共通する属性であり、



第38図　SD03出土坏・小皿の法量分布図

この時期の黒色土器およびミガキ椀の形態的特徴といえる。口縁部形態については外反気味のものに加え、外面が肥厚するものがセットになる可能性がある。また、この時期には皿や坏といった器種の黒色土器は伴わないか、かなり少量であった可能性が高い。

では、上でみてきた資料群は実際どの時期に比定できるのであろうか。ここで、都城盆地における中世土師器の編年を提示した桒畑光博氏の研究（桒畑 2004）を参考にみてみたい。桒畑氏が示した一括資料群の中で、本遺跡のSD03出土資料に最も近いと考えられるのが、池ノ友遺跡第1次調査において検出された周溝墓（SK1）出土資料である。周溝内側の中央土壙から土師器小皿1点、刀子、鉄製工具、砥石が出土しており、周溝埋土からも土師器坏1点と小皿2点、ミガキ椀の口縁部が出土している。このうち土師器坏は小さな底部から口縁部にかけて大きく開く形態を呈し、口径は15cmを測る。底径が7cm程とSD03出土資料より若干小さめであるが、底部ヘラ切りであることも含め形態的によく似る。小皿は口径約9cmで底面が突レンズ状にふくらむものと、口径9.5cmで底面が平坦で、全体的に丁寧な調整が加えられる二種類がある。SD03出土資料には突レンズ状の底面を有するものはほとんどなく、作りも丁寧である。どちらかといえば後者の資料に近いといえる。小皿については池ノ友遺跡出土資料とSD03出土資料が、その特徴において完全に合致するものではないため、若干の時期差ないし地域差を示している可能性もあるが、形態の類似度と底部ヘラ切りが主体となることを評価すれば、かなり近い時期の資料とできるであろう。さらに、池ノ友遺跡の周溝墓ではミガキ椀も出土している。この資料は底部（高台部）を欠くが、丸みを帯びる体部と外反する口縁部は、SD03出土資料と共通する。やはり近い時期の資料として評価できよう。また、桒畑氏はこれら池ノ友遺跡第1次調査周溝墓出土資料の次段階として、松原地区第Ⅳ遺跡4号土壙墓出土資料を挙げている。この遺構では土師器類と白磁椀Ⅳ類が共伴しており、貿易陶磁器からみた年代観については、SD03と共通する。そのため、SD03出土資料もこの段階の可能性が考えられる。坏が出土していないため単純に比較はできないが、出土した小皿をみてみると、底部糸切りが大部分を占めるのに加え、口径9～10cmとSD03出土資料より若干大きくなる。このことから、SD03出土資料と松原地区第Ⅳ遺跡4号土壙墓出土資料には時期差があり、前者が後者に先行するものと考えられる。同じ白磁椀Ⅳ類の時間幅の中でも時期差を認めうると考える。なお、桒畑氏は前段階にさかのぼる可能性を示唆しつつも、牟田ノ上遺跡1号溝状遺構出土資料を松原地区第Ⅳ遺跡4号土壙墓出土資料の段階の坏資料として挙げている。法量や器形をみるとSD03出土資料に酷似する。そのため、この資料についてはSD03出土資料とともに前段階（池ノ友遺跡周溝墓出土資料段階）に帰属するものと考える。

上述の池ノ友遺跡第1次調査の周溝墓（SK1）出土資料は、桒畑氏により11世紀代の新しい段階から12世紀初頭の時期が与えられている（桒畑 2004）。これまでみてきたように、池ノ友遺跡の周溝墓出土資料とSD03出土資料の共通性・類似度からいえば、両者は極めて近い時期の所産として理解できる。つまり、両者の比較検討からはSD03出土資料の多くが11世紀代の新しい段階から12世紀初頭頃の所産であるといえる。この点

第 39 図　SD03 出土遺物の編年的位置づけ（桑畑 2004 に加筆）

に関して、SD03 では大宰府分類の白磁椀Ⅱ類やⅣ類が出土しているが、同じく白磁椀Ⅳ類と共伴関係が確認された松原第Ⅳ遺跡 4 号土壙墓出土資料との比較から、SD03 出土資料は白磁椀Ⅱ類やⅣ類の時間幅（大宰府 C 期、11 世紀後半から 12 世紀前半）の中でも早い段階の所産である可能性が指摘できる。このことは、桑畑編年の年代観の妥当性を示すものといえる。ただし、SD03 出土資料には、上で抽出した類型とは異なる特徴を有す資料もわずかながら存在していることや、検出面近くからの出土ではあるものの大宰府 D 期（12 世紀中頃から 12 世紀後半）の資料である白磁皿Ⅷ類が出土していることから、竪穴住居内の床面出土資料や、土坑墓出土資料のような厳密な意味での一括性に欠けるといわざるを得ない。そのため、全体としてはある程度の時間幅を想定する必要がある。それでもそれぞれの器種である程度のまとまりは抽出可能で、これらが一時期を形成していた可能性は高いと考えられる。そのため、ここでは、SD03 出土資料を、桑畑氏の提示した編年観を支持する補足的な資料群として提示したい。

【参考文献】
桑畑光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第 19 号　宮崎考古学会

第 2 節 平安時代末～中世の調査成果

前節では、SD03 出土資料の編年的位置づけを検討してきた。ここでは、このような編年観を基に遺構・遺物の評価について周辺の同時期の遺跡も視野に入れながら総括し、本遺跡の調査成果のまとめとしたい。

これまでみてきたように、今回の調査においては掘立柱建物跡や、道跡と考えられるものも含む溝状遺構を中心とした遺構が確認されている。いずれも遺構に伴うと考えられる遺物が少なく、細かな時期比定や共時性を導きだすことは難しい。しかし、包含層出土遺物の大部分が 11 世紀後半から 12 世紀代にしぼれるという事実から、検出した遺構群も SD04 と SD06 を除いてはこの時期に属する可能性が高いと理解できる。ただし、あくまでこの時間幅での位置づけであり、一部切り合い関係にある遺構が存在することからも、全てが共時性をもって存在していたものではないことはいうまでもない。掘立柱建物跡に関しては、同時存在したのは多くて 2 ～ 3 棟程であろうか。遺構間の切り合いから時期的な前後関係をみてみると、SF02 → SF01、SD01 → SD02 といった時期的関係が看取できる。さらに、検出位置やレベルから SB03 は SF01 よりも古い可能性が高い。これ以外の遺構については、厳密な意味での同時性や前後関係を導き出すことは困難である。

以上のことを念頭に置きながら、遺構の関係についてみると、調査区北西半ではSF01・02を挟んで東西に掘立柱建物跡が存在することが分かる。SB01とSB02については重複関係にあり、時期的に前後する遺構であると考えられるが、それでも近接する遺構の長軸が平行することを考えると、掘立柱建物跡と道跡がセットになる可能性を指摘できる。対して調査区南東半でも掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑墓、ピット等が多く検出されており、ここでもSD01とSD02に切り合い関係が認められるが、同時存在した遺構を抽出することは難しい。このSD01とSD02の周辺ではピットが群を成して検出されているが、建物構造を構成するものとも考えにくく、用途等は不明である。調査区全体を俯瞰してみると、形態が特異で用途が不明確なSD03を除けば、掘立柱建物跡、道跡、溝状遺構、土坑・ピット類という検出遺構からは一般的な集落遺跡と評価できる。

次に出土遺物をみてみたい。出土遺物の大部分は土師器坏・小皿・甕・高台付椀（ミガキ椀・黒色土器）といった土師器類が占める。貿易陶磁器も一定量出土しており、年代決定の大きな指標になるといえる。本遺跡の出土遺物について特徴的な傾向がいくつかあり、以下それらについて検討してみたい。

まず、既に述べたことだが本遺跡では鉄滓が量的にまとまって出土していることが大きな特徴として挙げられる。今回は金属学的な分析は実施しておらず、鉄滓として一括して報告しているが、製鉄・鍛冶におけるどの段階の所産であるのかを明確にすることで、より詳細な遺跡の位置づけが可能になるものといえる。ここでは、このような詳細な分析はかなわないが、少なくとも出土量的には鍛冶関連の作業が行われていた可能性が高いといえ、鉄釘をはじめとする鉄製品や羽口の出土量もこのことを傍証するものといえる。しかし、遺跡内では炉跡など鍛冶関連の遺構は全く検出されておらず、このことがこれらの遺物の評価を難しくしているといえる。調査面積も1,000㎡弱と面的な調査が可能であったわけではないため、ここでは、今回の調査区周辺で鍛冶関連の作業がなされていた可能性を指摘するに止めたい。

次に産地不明の国産陶器と考えられる資料の存在を挙げておきたい。これは、外面に平行タタキ後にカキメ状の細沈線を、内面にはナデ・オサエ後に同様の細沈線で調整するもので、器種は大甕と考えられる。一見すると須恵器のような質感で、部位によっては光沢のある自然釉がかかる。このように内外面の調整に大きな特徴を見出せるが、さらに2～3mmの茶褐色鉱物を多量に含み、色調がサンドイッチ状の発色となる胎土も特有のものといえる。管見によれば都城市内の遺跡においては同類の種類は確認できず、時期・産地も不明といわざるを得ない。今回の調査では、東播系須恵器甕は一定量出土しているものの、常滑焼は1点のみの出土である。そのため、先述の資料は常滑焼や東播系須恵器が都城市内の遺跡で量的にまとまって出土する13世紀以前の資料群である可能性が指摘できる。また、時期的に11世紀前半から12世紀代に限定されるSD03からも出土をみているため、同様の年代が付与できる可能性が高いこともその傍証となろう。いずれにせよ、今後同様の類例の洗い出しを行った上で再度検討を加えたい。

最後に本遺跡で出土したいくつかの特徴的な遺物をみておきたい。まず、**368**の青白磁の水滴であるが、都城市内の遺跡においては初の出土となる。水滴とは書道の際の水差しのことであり、この遺物の出土は識字層の存在を想定させるものである。しかし、本遺跡において墨書土器は可能性があるものが1点（**171**）出土しているのみであり、このような想定を確たるものとするには資料不足の感は否めない。器面に施された釉の様子からは、時期的にも本遺跡の主体となる時期よりも下る可能性が高いといえる。また、**369**の白磁人・獣像も特徴的な遺物として挙げられる。遺存する部分は獣足部分と人物の衣（？）部分のみのため、全体像が分かるものではないが、型作りの可能性のある袋物と考えられる。さらに、**370**は極めて小さな破片であるが、天目茶椀である。このようにみると、少なくともここで特に挙げた遺物に関しては一般的な集落跡で出土するものではなく、検出遺構から導き出した一般的な集落という位置づけとは隔たりがみられる。

これまでみてきたように、今回の調査で検出された遺構をみると、都城市内で調査された同時期の遺跡に比べ決して突出したものではなく、むしろ小規模な集落遺跡として位置づけられる。しかしながら、土師器類を中心とする多量な遺物が出土していることや、上述の青白磁水滴、白磁人・獣像、天目茶椀など一般的な集落ではみられない遺物も複数出土していることを考えると、単純に一般的な集落とするには躊躇する。つまり、

検出遺構と出土遺物の量・質には大きな隔たりがあるといえる。また、鍛冶関連の遺物が多量に出土しているにもかかわらず、鍛冶炉等の関連遺構が全く検出されていないことも、遺構と遺物の評価に大きな隔たりを感じる点である。調査区外に居宅や鍛冶作業場が存在する可能性は考えられるが、検出した遺構群は一般的な集落と同様であり、ここでは平安時代末から中世にかけての一集落として提示しておきたい。

ここで、本遺跡と同時期と考えられる周辺の遺跡についてもみておきたい。まず、永田藤東遺跡から西へ3.5kmのところに筆無遺跡がある。遺跡自体は縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡で、平安時代についても遺物は9世紀代のものから出土しており、時期幅が認められる。貿易陶磁器にも時間幅があるが、出土量からみると、白磁椀Ⅳ類・Ⅴ類が多く、12世紀代の遺物が中心となる。このように、時期幅があるため一概に永田藤東遺跡と比較することはできないが、土師器坏、小皿、黒色土器の中には器形・法量共に似通ったものがあり、白磁椀Ⅱ類やⅣ類が出土していることを考えても近い時期の遺構・遺物も多いものと考えられる。その上で出土遺物全体を比較すると、やはり永田藤東遺跡での鞴羽口・鉄滓等の鍛冶関連遺物の出土量の多さは改めて特筆されよう。

次に、同じ安久町に所在する王子原第2遺跡をみてみよう。距離的にも南へ約2.2kmのところに近い。出土遺物をみると、12世紀中頃から13世紀前半に比定される青磁椀が出土していることや、土師器の坏や小皿の形態、底部糸切りの多さなどから永田藤東よりも若干新しい様相もみられる。しかし、当遺跡でも、底部ヘラ切りの土師器小皿や黒色土器の形態、白磁椀のⅡ類やⅣ類が出土していることなどから同時期の遺構・遺物が存在するものといえる。遺構をみると2×3間の掘立柱建物跡や溝状遺構、道跡と考えられる硬化面に加え土坑などが検出されており、永田藤東遺跡と遺構構成がよく似る。さらに、当遺跡では鉄塊系遺物が出土しており、金属学的分析からは砂鉄系原料鉄とされ、鍛冶作業を裏づける遺物として評価されている。しかし、永田藤東遺跡と同様に、鍛冶作業に関連する遺構は検出されていない。

さらに、永田藤東遺跡から1.7km程東には天ヶ渕遺跡が位置する。当遺跡でも量は少ないが11世紀後半から12世紀前半とされる遺物が出土している。白磁椀Ⅳ類の他、底部から口縁部にかけて大きく開く器形の土師器坏、高台の低い黒色土器に加え、口縁部が玉縁状に肥厚するミガキ椀が確認されている。これらの遺物は永田藤東遺跡のものと共通する。やはり遺構・遺物の一部は永田藤東遺跡と同時期の所産と判断できよう。

これまでみてきた三遺跡については、複数の時期・時代が重層的に検出されている複合遺跡であるが、検出遺構・遺物には永田藤東遺跡のそれと類似するものが確認されており、近い時期の所産であると考えられるものである。これらの遺跡と比較することで、永田藤東遺跡の特異な部分あるいは、同時期の遺跡との共通性が明確になるものといえる。逆に、永田藤東遺跡出土遺物と比較することで、各遺跡の11世紀から12世紀前半という限られた時期の遺構・遺物を抽出できるものと考える。このような個々の遺跡の比較検討を通して、これまで点的に確認されてきた遺跡を一つの地域の中で有機的に結びつく遺跡群として捉えることが可能になろう。

12世紀以降における都城盆地南部地域の遺跡密度の高さは、島津荘成立後の第2次開発ラッシュと評価されているが（桒畑 2009a・b）、本遺跡の盛行期はまさにこの島津荘の拡大期に相当する。調査面積が狭く一集落の全体像を把握できたわけではないためその性格の評価については難しい部分があるが、島津荘拡大期における一集落の地域的様相を示す調査事例と評価できよう。

【参考文献】

桒畑光博 2009a「島津荘は無主の荒野に成立したのか」『季刊南九州文化』第109号　南九州文化研究会
桒畑光博 2009b「島津荘の成立をめぐる諸問題」『地方史研究』第341号　地方史研究協議会
都城市教育委員会 1995『天ヶ渕遺跡』　都城市文化財調査報告書　第33集
都城市教育委員会 2004『王子原第2遺跡』　都城市文化財調査報告書　第66集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第166集

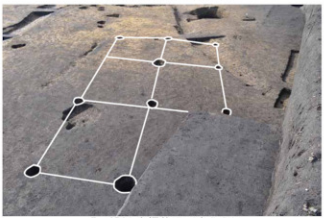
図版１　平安時代～中世の調査①

１　調査区北西遺構検出状況（南から）

２　調査区南東遺構検出状況（西から）

3　調査区北西土層堆積状況

4　調査区南東土層堆積状況



5　SB01 完掘状況（東から）

6　SB02・03・06・07 完掘状況（南から）

7　SB03・04・08～10 完掘状況（北から）

8　SC01 土層断面（南東から）

9　SC01 遺物出土状況（西から）

10　SC01 完掘状況（北西から）

図版３　平安時代～中世の調査③

11　SD01・02 土層断面①(西から)

12　SD01・02 土層断面②(西から)

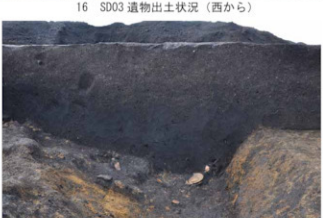
13　SD01・02 完掘状況（南西から）

14　SD03 溝状部分検出状況（南西から）

15　SD03 拡張部検出状況（南東から）

16　SD03 遺物出土状況（西から）

17　SD03 土層断面①(南西から)



18　SD03 土層断面②(北東から)

19　SD03 粘土・灰色土堆積状況（西から）

20　SD03 溝状部分底面の粘土①

21　SD03 溝状部分底面の粘土②

22　SD03 溝状部分底面の粘土③

23　SD03 完掘状況（北から）

24　SD03 完掘状況（南から）

図版 5　平安時代～中世の調査⑤

25　SD04 土層断面（西から）

26　SD04 完掘状況（西から）

27　SE01 土層断面（西から）

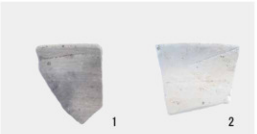
28　SE01 掘り下げ状況（底面は未完掘　西から）

29　SF01・02 検出状況（北から）

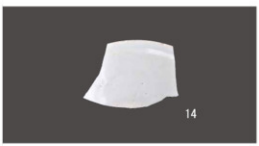
30　SF01 大観通寶出土状況（東から）

31　SD01・02・05・06・SE01 完掘状況（北から）

32　調査区東半遺構完掘状況（南東から）

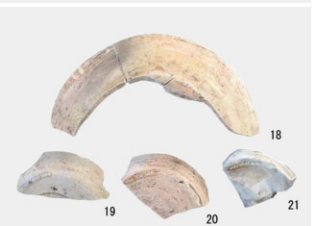


1：SB02　2：SB04



3～13：SC01　14：SC04

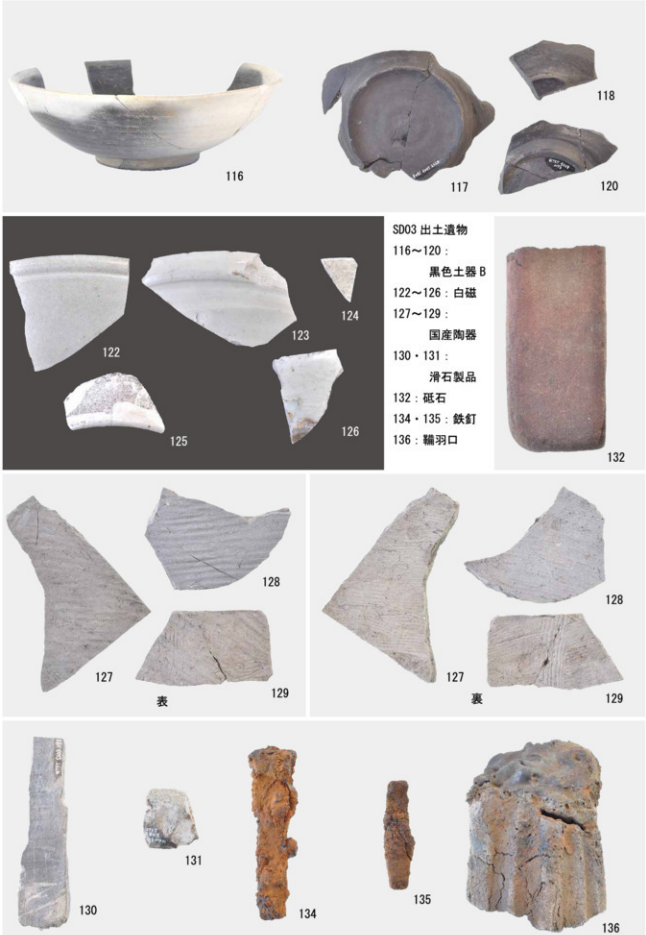
16・17：SC09　18～21：SD01
22～25：SD03



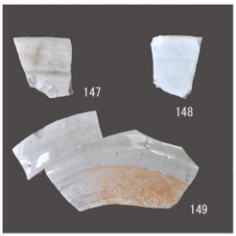
図版７　遺構内出土遺物②

55～71・73～75：SD03 出土土師器小皿　　113：土師器坏（線刻有）　114：土師器小皿（穿孔有）

119：ミガキ椀
121：黒色土器 A


116
117
118
120
122
123
124
125
126
SD03 出土遺物
116～120：
黒色土器 B
122～126：白磁
127～129：
国産陶器
130・131：
滑石製品
132：砥石
134・135：鉄釘
136：鞴羽口
132
127
128
129
表
127
128
129
裏
130
131
134
135
136

図版 9　遺構内出土遺物④



147 ～ 151 : SD04　153・154 : SD05　155 ～ 158 : SE01　159 : SF01　160 : SF02

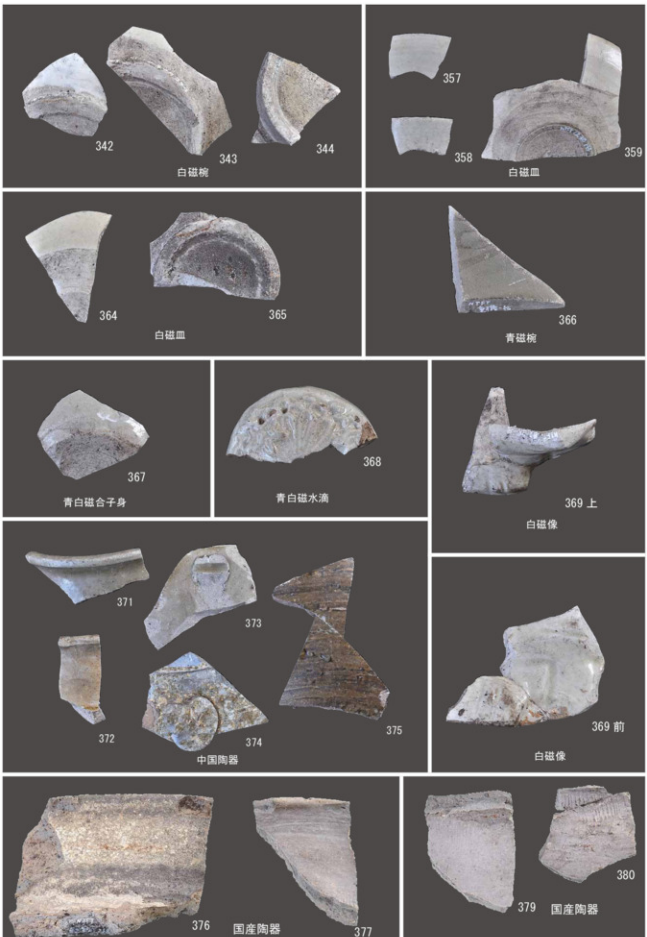
161 : P15
162 : P20
163 : P56
164 : P58
165 ～ 167 : P76

168
169
170
土師器坏
171
墨書土器か
220
土師器小壺
172
173
174
175
土師器坏
176
177
178
179
180
181
182
183
土師器坏
191
192
193
194
195
土師器小皿
196
197
198
199
200
土師器小皿
203
205
208
211
214
217
土師器小皿
221
222
223
土師器甕
224
226
228
229
243
土師器甕

図版 11　包含層出土遺物②

土師質須恵器
291
須恵器
292
297
須恵器
298
299
300
301
302
303
304
305
白磁椀
306
307
308
309
310
311
白磁椀
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
白磁椀
312
313
314
315
316
317
318
319
白磁椀
333
334
335
336
337
338
白磁椀
339
白磁椀
345
白磁皿
346
340
341
白磁椀
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
白磁皿

図版 13　包含層出土遺物④



常滑焼
378
383
385
国産陶器　外面
383
385
国産陶器　内面
384
386
389
国産陶器　外面
384
386
389
国産陶器　内面
東播系須恵器
391
東播系須恵器
394
395
東播系須恵器
399
400
401
402
403
布痕土器
411
412
滑石製石鍋
413
414
滑石製石鍋
416
419
420
石鍋転用品
421
422
滑石製品

図版 15　包含層出土遺物⑥

報告書抄録

書　　名	永田藤東遺跡（ながたふじとういせき）
副 書 名	民間老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 102 集
編 著 者 名	山下大輔
編 集 機 関	都城市教育委員会
所　在　地	宮崎県都城市菖蒲原 19－1
発行年月日	2011 年 3 月 25 日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
永田藤東遺跡（ながたふじとういせき）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 安久町（やすひさちょう） 4995-1、 4996	31° 41′ 56″ 付近	131° 4′ 23″ 付近	H22.1.7 ～ H22.2.22	935 ㎡	民間老人福祉 施設建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永田藤東遺跡（ながたふじとういせき）	集落跡	古代・中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・硬化面・土坑・ピット	土師器 舶載陶磁器 鉄製品 鉄滓 鞴羽口 滑石製品	
		近世・近代	溝状遺構	国産陶器 染付	

都城市文化財調査報告書　第 102 集

永田藤東遺跡

－民間老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2011 年 3 月 25 日

編集　宮崎県都城市教育委員会
発行　〒885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL（0986）23-9547　FAX（0986）23-9549
印刷　有限会社　都城新生社印刷
〒885-0004　宮崎県都城市都北町 7284-1
TEL（0986）38-3500　FAX（0986）38-4187